

序

海軍教授中條是龍君ハ昭和十三年四月本校ニ奉職、爾來五星霜、生徒教育ニ眞摯ナル努力ヲ傾注シ來レリ。

今、囑セラレテ本書ヲ艸ス。コレヲ讀ムニ、ソノ觀察ハ眞正、ソノ行文ハ雄健、感趣盡キズ、海軍兵學校ノ面目洵ニ躍如タリ。

蓋シ江田島精神ハ御テコレ海軍ノ傳統的精神ニシテ、體驗ニヨリテ始メテコレヲ知ルヲ得ベク、假令知り得ルモコレヲ筆舌ニテ表現スルハ極メテ難事ニ屬ス。著者克ク此ノ困難ヲ征シテコレヲ成ス。誠衷ノ致ストコトイフベシ。

敢テ本書ヲ江湖ニ推薦スル所以ナリ。

昭和十八年三月

海軍兵學校長海軍中將 井上成美

筆者のことば

海軍兵學校に着任してから、既に五年有餘の星霜を閲した。その間、私は教官として擔當學科の教授に當るの外、進んで訓育訓練にも参加し、奉公の微衷をいたすとともに、一面、本校に發祥せる海軍精神を凝視しつつ、能ふかぎりこれが體得に力めて來たつもりである。

校長始め各教官の熱意や、生徒自身の生活精神を通じて、教へられるところ頗る多く、尊い幾多の經驗を積み得たことを、いつも有り難い事と感謝してゐる。

殆んど、所謂「娑婆」との諸縁を絶して、學習と教育とに専念する江田島の生活は一際深刻な印象を持つものであり、顧みて、感慨の淺からぬものがある。

大東亞戰爭下、同僚の教官が勇躍出征して、赫々不滅の偉功を立てたり、萬里の海空に一命を君國に捧げ護國の神と神鎮まりましたし方々も少くはない。

況んや、私共よりもおかれて、江田島に來りし若き人々の忠烈鬼神をも泣かしむる壯舉

を耳にし、限りなく逞しきその氣魄に接しては、名狀し難い衝撃を受け、終夜まんじりと
もなし得ないこともしばしばである。

十年一昔とはもはや過去の空言、慌しきこと數年、戦時下の江田島は平時の十年、二十
年に互る變易に匹敵する内容を一時に伸展してゐる様にさへ思はれる。そして、私共はこ
の千載一遇の好機に江田島にあつて、一片耿々の心以て御奉公なし得ることを限りなく有
り難いことと念つてゐる。

適と私は頃者機會を得て、拙いながら、現下の兵學校教育の状況につき放送したのであ
るが、全国各地、既知未知の方々より寄せられた數々の感謝や喜びは私にとり思ひ料られ
ざる感激であつた。と同時に、至らぬ管見が崇高至大なる江田島精神を冒瀆するなきやを
沁々反省せしめられたのであつた。

そして私はこれにより國民の各層がいかにか帝國海軍に信倚するところ深きか、又いかに
海軍兵學校そのものの姿を知らんとする希求の多きかを今更の如く強く考へさせられたの
である。

菲德薄才の私輩には固より到底深遠なる江田島精神の眞姿を語る資格はない。

ただ、私は今古語に所謂「隨力演説」の氣持を以て、多少なりとも世の要請に應ふると
ころあらばと考へ、敢て江田島を語り、その精神に及ぼうとする。

以て、天下有爲の若人諸君が江田島の生活精神を想見し、永き人生への一件侶とせられ
るならば、私の幸甚とするところである。

本書の刊行に當り、軍令部總長永野修身大將閣下より題字を、本校校長井上成美中將閣
下より序文をいただいたことは筆者の光榮として感謝にたへぬ次第である。更に又幾多先
輩各位の御支援御協力を辱うしたことに對しては、衷心より謝意を表する。

昭和十八年五月五日

筆者識す

目次

題字 軍令部總長海軍大將 永野修身閣下

序 海軍兵學校長海軍中將 井上成美閣下

筆者のことば

一、戦時下の海軍兵學校生徒……………二

二、歴史に見る江田島……………一六

江田島の呼称……………一六

江田島の統治……………一七

海軍兵學校の江田島移轉……………二〇

先覺の細心……………二三

三、江田島の春秋……………二五

江田島の地理……………二五

古鷹山……………二六

島の四季……………三三

四、海軍兵學校の教育精神……………三五

兵學校の教育……………三五

聖旨奉體即教育精神の眼目……………三七

訓育基調の教育……………四〇

イ、期と分隊……………四四

ロ、入校教育……………四四

ハ、敬神崇祖……………四四

ニ、各種の訓練	四
ホ、軍紀風紀	五
ヘ、先輩と後輩	五
ト、教育参考館	五
チ、島を離れた生徒生活	六
リ、官舎訪問	六
ヌ、生徒倶楽部	六
ル、山野の跋渉	六
學術教育	六
要は人に存す	六

五、生徒館生活の一日……………七

傳統輝く生徒館	七
總貝起し	七
朝食まで	七
教室へ發進	七
訓練と自選時	八
自習	八
就寢	八
「五分前」と整頓手廻し	八

六、海軍兵學校の特殊行事……………九

棒倒し	九
總短艇操漕教練	九
野外演習	九
乗艦實習・航空實習	一〇

遠	漕	一〇五
彌山登山競技	一〇八	
游泳術訓練	一一三	
幕	營	一一六
游泳競技	一二七	
宮島遠泳	一二九	
軍	歌	一三〇
その他の演練・行事	一三五	
卒業式	一三六	

七、先覺の遺芳、江田島精神.....一三三

刻苦勉勵・齋藤生徒.....一三三

七生報國・廣瀬中佐.....一三六

從容自若・湯淺少佐.....一四四

沈着周到・佐久間艇長.....一四四

一死盡忠・特別攻撃隊.....一五三

純忠至孝・日高中尉.....一五九

挺身敢闘・田村生徒.....一六三

結 び.....一六八

裝 幀 松 添 儲

本書所載の寫眞は「海軍省許可濟第一七五號」
著者及び眞繼不二夫氏より提供されたものである。

海軍省教育局監修

江田島精神

海軍兵學校
教官 中條是龍著



至誠道處
山可禱海
可翻

元軍令部長 永野修 身書

一、戦時下の海軍兵學校生徒

この一文は、本稿起草の機縁となつた放送の舊稿であるが、海軍兵學校の基礎的概念を把む上に便益するところ多しと考へて採録することとした。随つて、第二章以下の諸處と重複するところのあるのは當然であるが、筆者は、古語に所謂「別別於總」（別、別、於、總）、（總、總、於、別、別）の氣持で掲げるのであるから、讀者は是非本文により、江田島に關する一の認識を持つた上で、文章以下の詳説に入つてほしいと思ふ。

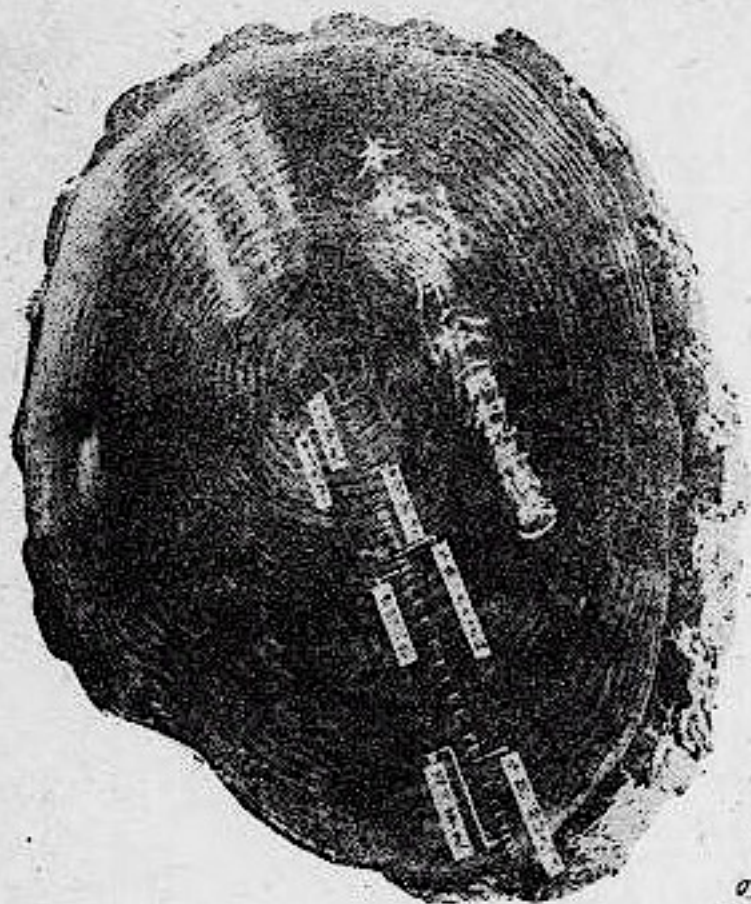
聖地江田島

奥の軍港から船で二十分ばかり参りますと、古鷹といふ名山が屹然として聳え立つてをり、青々とした波靜かな瀬戸内海の入江を抱いて、風光明媚なしかも一切の俗塵を超越した別天地、江田島に到着致します。これこそ、わが海軍兵學校の所在地であります。

本校が東京の築地からこの地に移轉せられましてより、星霜を閲すること五十有餘年、その間、畏くも御十六方の皇族の御卒業を始め奉り、曾ては、旅順港閉塞に於て、その忠勇を天下に示せる軍神廣瀬中佐、近くは、今次大東亞戰爭に於て、ハワイ眞珠灣頭に護國の花と散り、その壯烈無比なことを以て、全世界を驚歎せしめた、かの特別攻撃隊の軍神速、否現存の海軍兵科將校のすべては、本校に於て螢雪の功を積んだ人々であります。

一度、ここ江田島の地に渡り、菊花の御紋章燦として輝く大生徒館を仰ぎみる時、何人か帝國海軍の歩み來りし大いなる姿を思ひ、無限の感激を覺えざる者がありません。





五十年の歴史を語る松の年輪

また、この島の一木一草皆悉く国力伸展の礎たりしを思ふ時、何人か肅然として總身に血潮のたぎるを覚えざる者がありませう。

海軍精神發祥の地 抑々

海軍兵學校の精神は即ち帝國海軍の精神であり、帝國海軍の精神は即ち海軍兵學校の精神であります。

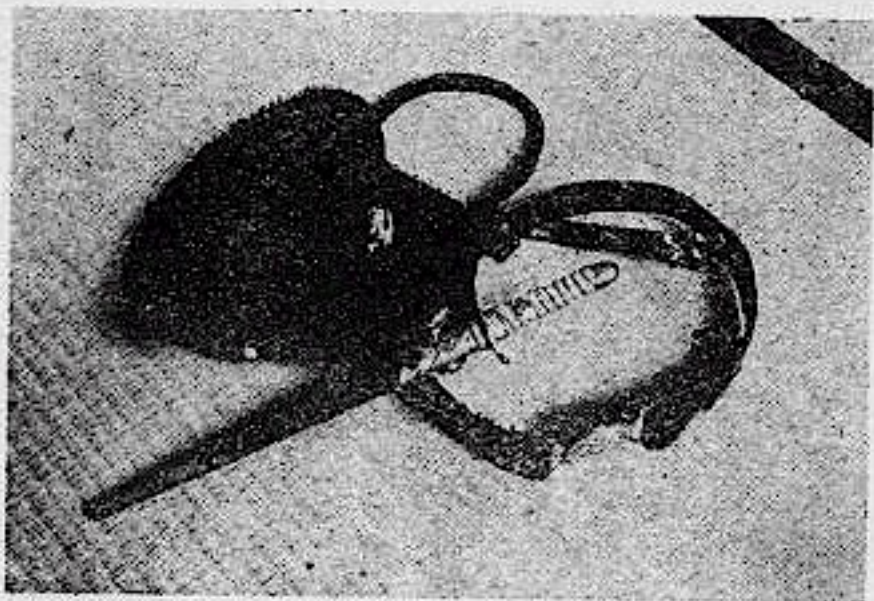
ただひたすらに聖旨を奉體し、一切の世事に拘泥すること

となく、黙々として軍人の本務にいそしみ、一旦緩急あれば、身を鴻毛の輕きに比して、挺身再躍、護國の大任を完うせんとするは、海軍兵學校創立以來の傳統的精神であります。

本校に於ける教育はすべてこの傳統的精神の涵養と發揚とを目標として進められてゐるのであります。

永野修身大將が會て本校校長として在任せられました時、本校教育の目標を道破せられました、一古今無比、世界第一」といはれたことがあります。また、草鹿任一中將は校長として着任の當初、教官並に生徒一同に訓示せられました、**「本校教育の眼目は、要**

軍帽と短劍



するに、戦に強き士官を養成するにあり」と申されました。その人は異り、その言葉は違ひますけれども、ともに瞭乎として本校教育の根本方針を敍べられたものでありまして、帝國海軍従來の赫々たる戦績に見ましても、また、今次大東亞戦争の戦況に徴しましても遺憾なくその事實を證明致してゐるのであります。

生徒として入校

入校期になりますと、入校試験に合格した若人は、續々、この島を目ざして集つてまゐります。希望に輝く彼等のまなざしを見る時、いつも私共は一種の名狀し難き力強さを感ずるのであります。

嚴肅な入校式に於て、

「海軍兵學校生徒を命ず」

と宣せられた瞬間から、身は帝國海軍の軍籍に入り、主任指導官を始とする各教官により、一齊に將校生徒としての教育が行はれます。そして、上下一體、約一箇月の特別課程を経ますれば、ここに大體上級生徒に伍して訓練並に學術教育を受けることの出来る心構

と驕とが出来上るのであります。

この頃、面會を許されて來校せられた父兄が、わが子わが弟の隆々として奔うて來た、たくまじき筋骨を見て、恩寵の厚きに涙し、また、毅然たる決意を眉宇に輝かす肉親の姿に接して、一種崇高とも申すべき感激の情を催す場面を屢々見受けまして、私共もまたたとへやうのない肅然たる氣持になることがあります。

合理的な生徒隊制度

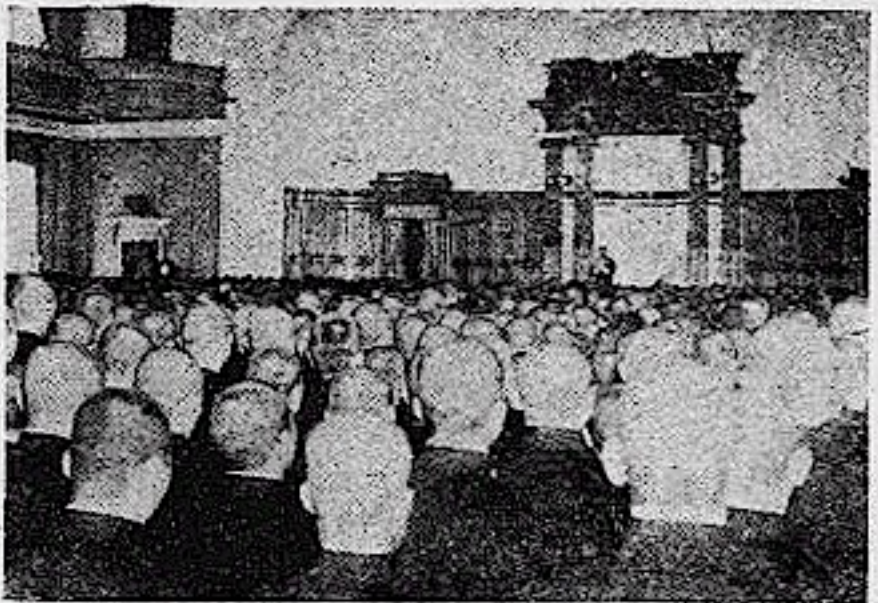
教育は訓育と學術

教育とに一往區別せられますが、訓育を主體と

することは申すまでもありません。そし

て訓育の中心をなすものは、軍人に賜は

入校式





カ一杯 りました勅諭を骨子とする精神教育であり、これに加ふるに、武道・短艇・體操・體技・相撲等の訓練が行はれるのであります。

生徒は入校と同時に、第何十期生徒として、所謂級友としての團結を持つこととなります。この團結は、本人は固よりその家族に至るまで、終生苦樂を分かち合ふといふまことに麗しい獨特の傳統をもつてをります。

期には期指導官が有りました、その期全般の生徒の教育を司ることは、前に述べた通りであります。これと同時に、生徒は各分隊に配屬せしめられるのであります。この分隊

は、各學年の生徒を縦に等しい數でもつて按排された結合體でありまして、訓育の單位、または、母體とも言ふことが出来るのであります。

そして、各分隊は、上級生徒の指導の下に自律的生活を営み、武官教官たる分隊監事があらゆる責任と指導とに任じてをります。そして、分隊は集つて部をなし、部は集つて生徒隊をなし、生徒隊監事がこれを統率し、生徒隊監事は監事長・校長の命を受けて、訓育全般の完璧を期する組織となつてをります。

各種の競技等も多くは分隊を單位として行はれますが、生徒はその分隊の傳統のために、その名譽のために、全く己を滅して精進奮闘するのであります。その間、殆んど、自我利己といふやうな俗惡な觀念を脱却せる、純乎として純なる協力意識が最高度に發揮せられるのであります。

最も大いなる信念のためには、攻撃に次ぐに攻撃、生死を超越して進む海軍魂は、かかる中にも養成せられて行くのであります。

一方、學術教育にありましては、分隊員は各期の編制にもどり、各學年の授業を受ける

ことは申すまでもありません。その内容は統率・軍政・砲術・水雷・運用・航海・通信・航空・機關等の軍事學を始め、精神科學・歴史・國漢・數學・物理・力學・化學・外國語等の高等普通學であります。

かくて、在學三年有餘、確乎たる軍人精神、高潔なる品性、透徹せる知能、加ふるに、健全なる身體を持ち、初級將校として果立つて行くのであります。

軍紀風紀

軍紀風紀が軍の生命たる以上、本校に於ても、これに重きを置くことは申すまでもありません。そして、帝國海軍が過去七十年の長きに亘り、洗練に洗練を重ねました軍律は、殆んど、完全に近しとさへ思はれるものであります。

随つて、生徒の毎日起居する生徒館内に於ては、確實・靜肅・敏速を尙ぶ潑刺たる生徒生活が存するのであります。一切の虚飾、一切の偽瞞を排して精進する姿は、正に、聖なる一大道場であります。

日本男子の魂と魂の觸れ合ふ、切磋琢磨の一大修練場であるのであります。

かくて、精神的に最も動搖し易い時代の若人は、最も完全に近い組織の下に、日に月に向上して行くのであります。皇國のために、誠に慶すべく、賀すべきことであると存じます。

和やかな空氣

この嚴正な軍紀生活の

反面には、また、本校ならではの和やかな空氣も存してをります。例へば、學校をとり巻いて建てられてある家並は、教官の官舎でありまして、生徒は日曜祭日等の休日には、三々五々官舎を訪問し、絆をぬぎ、濃茶を吸りながら、和やかな空氣の中に、いろいろの經驗を話

日曜日

の外出





官舎

かせたりする一面もあるのである

12

す。

曾て校長たりし住山徳太郎中將は、生徒館と教官の官舎との關係を敏べられて、

「たとへば、生徒館は卵で、官舎は母鶏の如きものである。母鶏が卵を漚

めてゐるのが、本校教育の姿である」

と申されましたが、まことに、適切巧妙な喩であると思ふのであります。

その他生徒は土曜・日曜にかけての短艇巡航に或は友人相携へての島巡りに、各々好む

ところに従つて、浩然の氣を養ふ時を持ちますが、これらは永く若き日の思ひ出として残ることと思ひます。

戦時下の兵學校教育

支那事變に引續き、大東亞戦争となりまして、教官も生徒も全校一體決戦即應の決意の下所謂月月火水木金金の猛訓練を行つてをりますが、さればとて、これは別段戦争になつたから非常に變つたといふのではなく、大體、從來の状態と大差はないのであります。

かく肇國以來未曾有の大戦争下に於きましても、餘裕綽々、完全なる士官教育を目ざして精進し得ますことは、一に足れ大御稔威高き皇國の威靈の然らしむるものでありまして、有り難き昭代に生を受けた「みたまわれ生けるしるしあり」の光榮を切々として覺えるのであります。

立て、若人諸君

さて、今やわが陸海軍はハワイに、マライに、東印度諸島に、將



生徒 た印度洋に、史上

未だ曾て見ざる大
戦果を擧げ、聖戦の目的
完遂のためには、國民の
總力を擧げて、堂々の陣
を張り、日東君子の國の
正義と權威とを、世界
に示しつつあるのであり
ます。

今日の日本は、斷じて

昨日の日本ではないのであります。

この秋、この際、先輩の偉業を継ぎ、大東亞共榮圈の盟主たる、躍進日本の生命を背負
つて立つべき責任と光榮とを有する者は誰であります。

特に渺茫涯しなき大東亞の海原に、海上武人として、勇躍護國の大業に身を挺し、烈々
奉公の誠を致すべきは誰であります。

天下の有能敢爲なる若人諸君。諸君、豈その人に非ずやと斷じたいのであります。

二、歴史に見る江田島

江田島の呼稱

江田島は、極めて古くは、附近の島々とともに、安瀨郷、或は、安摩庄等といはれてゐた。江田島と呼ぶに至つたのは、今から約七百年前、巖島文書に「衣田島」と見えるのが、文獻による最初のものやうである。(蓋し衣と江は同訓)

されば、江は入江を意味し、江田島とは「入江のある庄園」か、「江多し」の意か、または「枝」の假借で、この島が能美島と陸続きの関係から、枝島の謂に用ひられたかなどの推想が成り立つのである。

三者、そのいづれにしても、實際の地形状況からすれば、首肯せられるところである。

江田島の統治

島は、古くは、八條院御領として存在し、その後、引續き、女院或は皇室の御領として、つぎつぎに譲與傳領せられ、後醍醐天皇の御代を迎へた。

然るに、正平年間、伊豫の河野氏の一族なる久枝忠三通重が押領して島主となるに至つた。その居城址と思はれるものは、兵學校に近い鷺部村に現存し、鬪氣ながら、海洋に生きた伊豫水軍の勢威を物語つてゐる。

その後、同氏は故あつて姓を吉原と改め、下城して庶人となり、舊臣達とともに、江田島の内木浦に居住することとなつた。

ついで、天正年間、安藝の豪族毛利輝元が中國に百十二萬石の祿を食むや、島も亦、その統治下に入ることとなつた。

かくて、華やかな領主としての立場を去つた久枝氏は、第七代目の吉原與三兵衛信安が

文祿二年に、江田島の庄官とたつてから、引續き明治維新に及ぶまで、代々、所謂庄屋として島治に盡瘁し、よく民衆の信望を集めてゐたのである。

これより先、關原役に於ける論功行賞として、島は毛利氏の支配から同役の殊勳者福島正則の所領に移つた。

然るに、後、淺野長晟が安藝を中心にして四十二萬六千五百石を領することとなるや、島もまたその統治下に歸屬することとなつた。かくて、毛利氏は約十年、福島氏は二十年、淺野氏は、實に、二百五十年にわたつて統治したのである。

星移り歳變つて慶應三年に



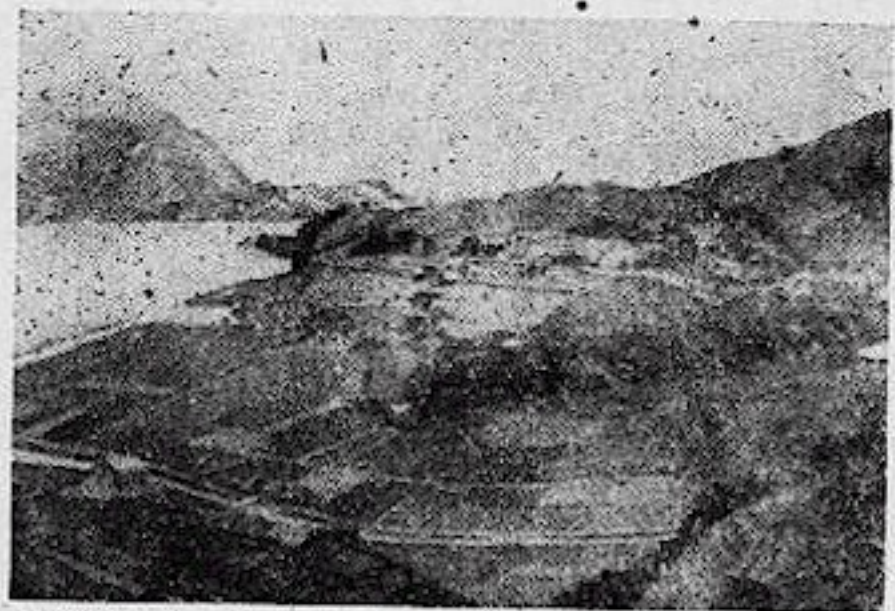
思ふに、島の人々は、悠久の古昔より近代に至るまで、領主の變易や治制の改革等も、多くは、他所事に、いはば、波靜かな瀬戸内海の一桃源郷として、純朴にして平和な星霜春秋を送つたのであらう。

海軍兵學校の江田島移轉

然るに、明治十五年五月、島とは眞に一衣帶水の間にある吳に第二海軍區鎮守府の設置せらるるや、島はその軍港境域に入れられることとなり、更に、當時東京築地にあつた海軍兵學校の本島移轉の議が起るに及び、漸くその名は人々に知られて來るやうになつた。

そして今や曾ては、名も無き一寒農漁村に過ぎなかつたこの島も、帝國海軍兵科將校揃の地として、その名は正に全世界に轟いてゐる。

ここに、吾等の見のがしてはならぬのは、移轉當時の海軍兵學校次長伊地知弘一大佐の



「兵學校ヲ僻地ニ移轉スルノ理由」なる一文である。

そは實に創業の苦心と先覺の明識とを察するに餘りある、立派な、そして記念すべき立論であるからである。曰く。

第一、生徒ノ薄弱ナル思想ヲ振作セシメ海軍ノ志操ヲ堅實ナラシムルニ在リ

第二、生徒及教官ノコトタル務メテ世事ノ外聞ヲ避ケシメ精神勉勵ノ一途ニ赴カシムルニ在リ

第三、生徒ノ志操ヲ堅確ナラシムルニ當テハ大ニ其ノ親族モ全ク教育ノ事ハ校長ニ托スル精神ヲ堅ウスルニ在ルヲ以テ

兵學校移轉直前の江田島

大ニ得失アルヲ知ル今ヤ其ノ得失ヲ按ズルニ繁華輻輳ノ都會ニ校ヲ置キ生徒ヲ教育セバ自ラ世情ニ接シ志操ノ堅確ナラザルヲ知ル是レ之ヲ良策トセザレバナリ

第四、吾國ノ人情ヲ察スルニ海軍ノ志操ニ薄弱ナルハ海軍ノ實情如何ヲ知ラザルニ依ル是ヨリ其ノ志操ヲ振興セシメンニハ能ク其ノ誘導ヲ爲スヲ以テ最モ專要ナリトス（以下略）

まことに、その構想の遠大にして適切なる、刮目想仰すべきものあるを覺える。

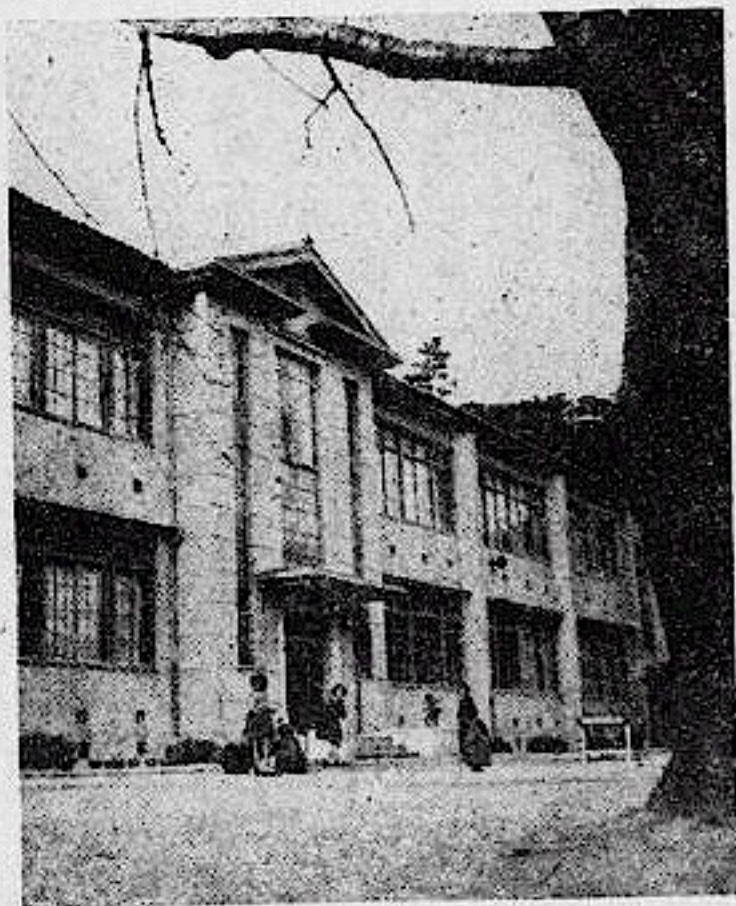
かくて、明治十九年六月、測量は開始せられ、十一月一日起工、同二十一年四月には、講堂・砲臺・官舎等の落成を見、やがて、五月末竣工、八月一日より兵學校はこの地に移轉せられ、同月十三日より東京丸の船内で開廳のこととなつた。

その生徒館・將校集會所・官舎等は春風秋雨五十餘年、今になほその堅容を保持してゐる。そしてその面積に於て、その建造に於て、その他あらゆる規模に於て、當時の生徒數に比し、その結構のあまりにも雄大なことは、先覺の卓見として、そぞろに頭の下る思ひがする。

先覺の細心——從道國民學校

更に、逸してはならないのは、構内特設の從道國民學校に關してである。當時の海軍首腦者は深く任に僻遠の地に赴く教官の不便を思ひ、特に、その子弟教育を重視すべしとなし、兵學校の移轉と同時に、本校も亦、創設の運びとなつたのである。その

從道國民學校



從道と呼稱するは、一面、當時の海軍大臣西郷從道侯の仁惠を永遠に記念し、一面、從道の字面が教育上からしても、極めて適切なりとする考へから出たものであるといふ。

今や、交通連絡の機關は整備し、利便充足、到底往年の比ではないが、當時の人々が兵學校移轉に際し、百般の事に互り、如何ばかり苦心案慮せられたかを、或は人々より聞き、或は現前に見て、感慨眞に限無きものがある。

その後、時運の變遷に伴ひ、本校の内容外觀も、幾多の改易を経て、今日に及んだのであるが、等しく古鷹山下水清冽の江田島灣に臨み、朝夕、たのもしき護國の楨幹は養成せられてゐる。

世界に冠絶せる帝國の海軍兵科將校育成の大道場——海軍兵學校、その所在地——江田島こそは、眞に、天下の聖地といはなければならぬ。

三、江田島の春秋

江田島の地理

遠く、東は紀淡海峡より、西は豊後水道に至る、渺茫二百數十海里——瀬戸内海の景観はまことに雄大、壯麗、しかも幽邃、それぞれの持味のある島嶼と静寂なること鏡の如き海洋の連鎖である。その明媚爽快なる風光は正に一幅の繪巻物といふことが出来るであらう。

江田島は、この内海の中央よりは、やや豊後水道に近い廣島灣上の一小島である。

名にし負ふ天下の呉軍港も近く指呼の間に望むことが出来、その周圍には倉橋・大那沙美・小那沙美・大黒神・小黒神・阿多田等の島々が飛石の如くに點在してゐる。

島はあたかも八つ手の葉の如く、

宋明の古

紺碧の海波、處々に灣入し、しかも

巖登山

山高く、水深く、いかにもくつきりとした男性味を持つ壯麗な姿である。

そして全面、殆ど、起伏せる山嶺丘陵を以て

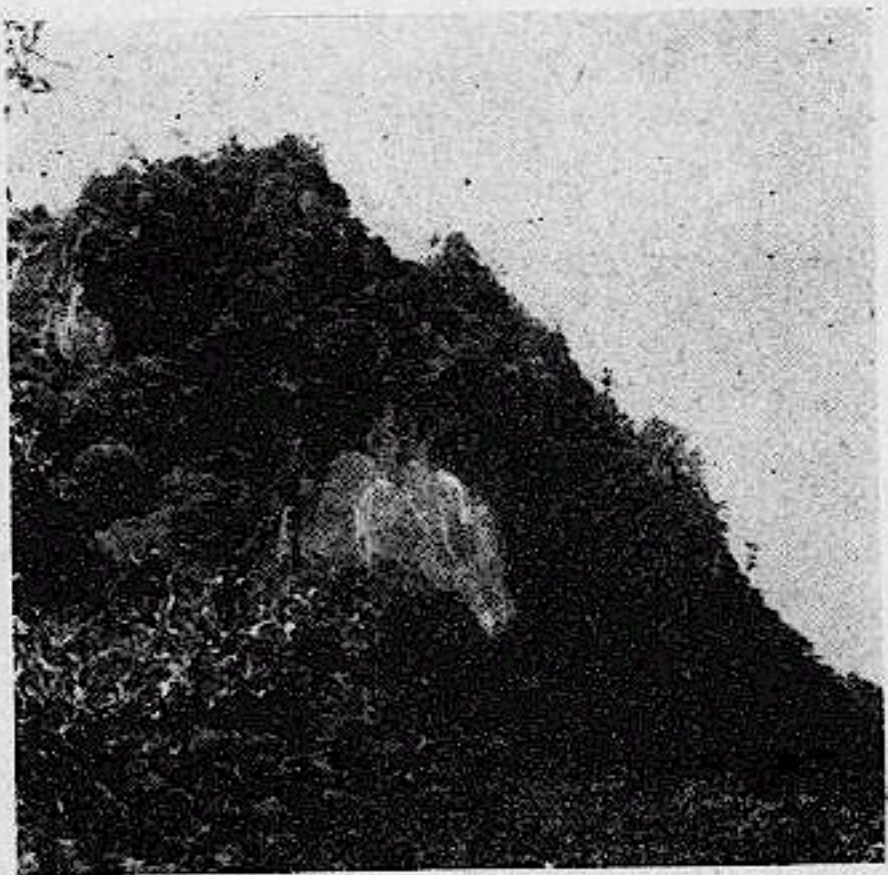
蔽はれてゐるといつていい。

古さびた花崗岩状の岩肌の露出、松翠豊かな巒峰の點綴せる風致は、既に、紛々雑々の俗塵を超越せる内海の別天地といふことが出来る。

古 鷹 山

島の中央、屹然として高きを古鷹山といふ。





一面の松籟、颯々として吹き渡る中、山頂に近づけば、天然の巨巖、蹲踞せる猛虎の如く、躊躇する獅子王の如し。泉あり、澄々として夏なほ盡きず、そぞろに靈氣の身に迫るものあるを覚える。やがて、頂上を極むれば、近く眼下には、山陽道の丘陵連街を眺め、遠く雲煙の彼方には、豫讚の連山をも望むことが出来る。

古鷹山

古鷹は實にこの島隨

一の名峰であり、絶景である。

古鷹には傳説が多い。その一つ――。

昔、一葉の小舟が海原の真只中で忽焉として起る風浪に出會した。歸らんとして針路を定むるに由なく、力盡き氣絶えた。舟人の命の危きことはまことに風前の燈そのものであった。

適といづこよりならん、一羽の大鷹翔け來り、頻りに羽ばたき、あたかも、舟の行手を示すやうなけはひである。舟人は思はず己に歸り、かつは驚きかつは怖れ、しばしが程はただその爲すところを黙視するのみであつた。然るに、鷹は或は立ち或は降り、舳にとどまること一再ではない。そこで舟人はその事の偶然ならざるを知り、さては、我を救はんとするかと、再び楫を手にせば、舟は波のまにまに鷹の行手に進み、つひに、とある波靜かな入江の中へ入つていつた。

そして、鷹は舟人の無事なのを見て、心安んせるものの如く、青空高く飛翔し去つた。――と見れば、鷹は北を指して峨々たる岩山の密林中に姿を消した。舟人は殊の外喜び、

鷹の跡を慕ひ、山に登り、木陰となく、岩根となく、その在處を求めたが、つひに見當らない。止むなく、山頂に小祠を建て、義に勇ましきその神靈を祀つたのであつた。

更に、傳説によれば、この神は威光高く、沖行く帆船も、この祠沖では帆を下し、禮を正しうして通らねばならぬ例であつて、これを一般に「ゲバ」と稱したといふ。

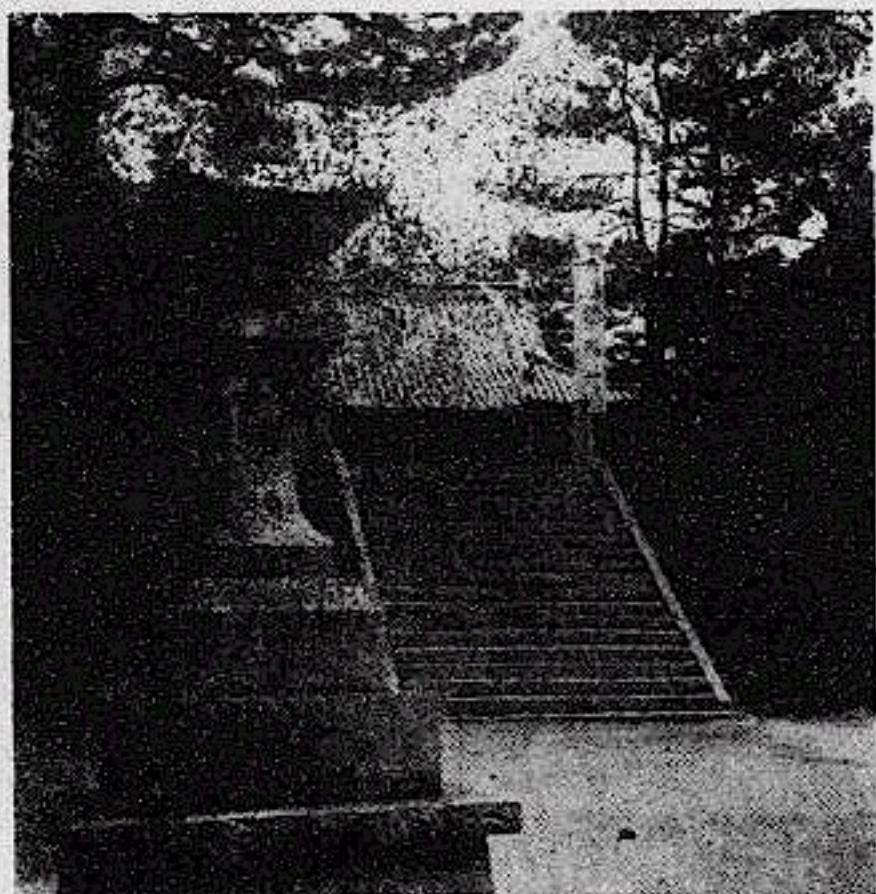
又、古老の言傳へによれば、昔は、古鷹山上に一大叢松があり、その下に、「鷹の宮」、または、「鷹の宮大明神」といはれる神祠が鎮座しましたとのことである。

その後、島民や舟人の崇仰頗る厚く、寶永年間には、一小社を建てると至つた。そして、俗に「雄鷹の宮」または「古雄鷹」と稱したのである。

「古鷹」といふのが、この社名を以て當てた呼稱であることは明白である。

山頂では、今でも時折、祠址を想はする古瓦などを見かけることがある。

因みに、宮は老幼の參拜の便をはかり、江田島村本浦の一部（現在の兵學校内八方園）に移轉したが、この地の兵學校用地となるや、一時、村内の八幡神社に移轉し、後小字「山の神」に轉じたが、火災のために社祠は烏有に歸し、再び、八幡神社に併祀せられ今日に



八幡神社

及んでゐる。

古來「鷹」は勇武

を表象する言葉として用ひられた。俚諺に「鷹に遇うた雀」等いふは、あまねく人の知る所。また、節操を表示する意味に於ても用ひられてゐる。「鷹は飢ゑても、稗を摘まず」といふが如き、これである。

群峰を抜いて、雄々しく聳ゆる靈峰古鷹——その下に、わが若き海の子は、朝

な夕なに不拔の勇武を磨き、不朽の節操を琢磨する。

山には目立つて松が多い。黒松・赤松・老松・稚松、潮風に育つその枝ぶりも亦、とりどりの美しく、ゆかしい匂ひのただよふ樹間をめぐうて山登りをするなどは、吾等に恵まれた喜びの一つである。更に古巖には植物學上貴重な珍樹も相當に多い。

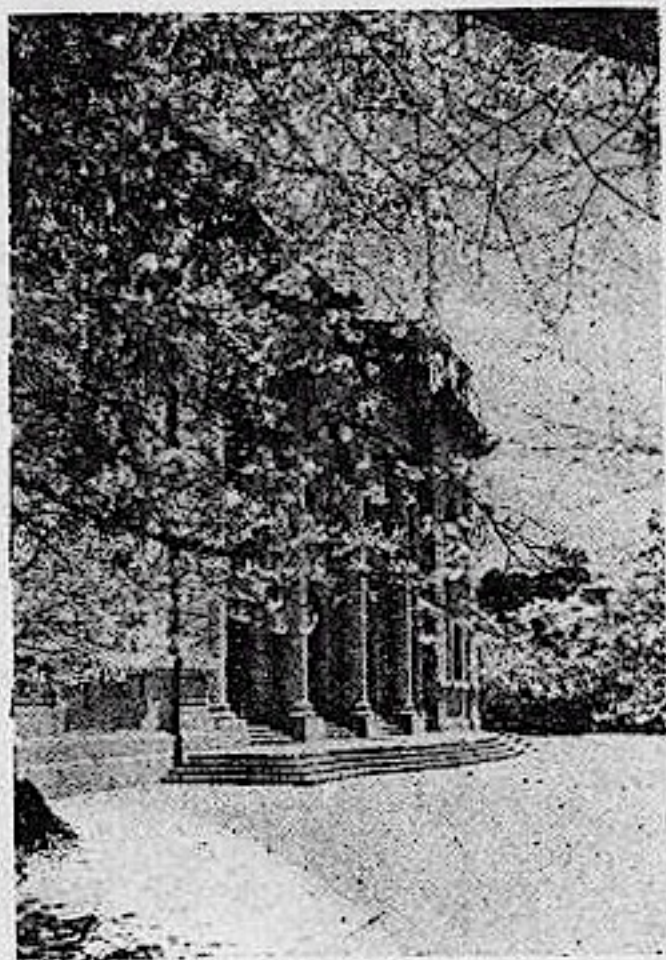
島には、殆ど平野らしいものはなく、丘陵地帯の下はすぐに海邊である。

白砂一條、磯邊の曲路はどこにはてるとも分らない。しかも水はあくまで清く、黒鯛や眼張の軽やかに泳ぎまはる姿態も、手に取るやうに鮮やかである。

水天彷彿、鏡の如き水面をここかしこに漁りする扁舟、村から村へと急ぐ帆船や機械船の動き、まことにのどかな島の風景である。

島の四季

春——吾等に親しきは、先づ春は櫻花。丘陵の中腹に、簾袋に、或は點々として一團の



大講堂用 雲の如く、或は
近の櫻花 連綿銀河の如く

咲き誇つた櫻花の景致
は、また島は花所なる
を思はしむるに餘りがあ
る。

兵學校の校庭、數百株
の老櫻もまた見事であ
る。雲霞とまがふ花また
花、その容姿の純潔な

る、その散り際の鮮やかなる、いかにも日本武士の志操を象徴するが如くである。

霞のやうに咲き誇つたネーブルや蜜柑の花が楚々たる香りを漂はす中を、あてどなく行樂するのも、また島の春のよろこびといへよう。

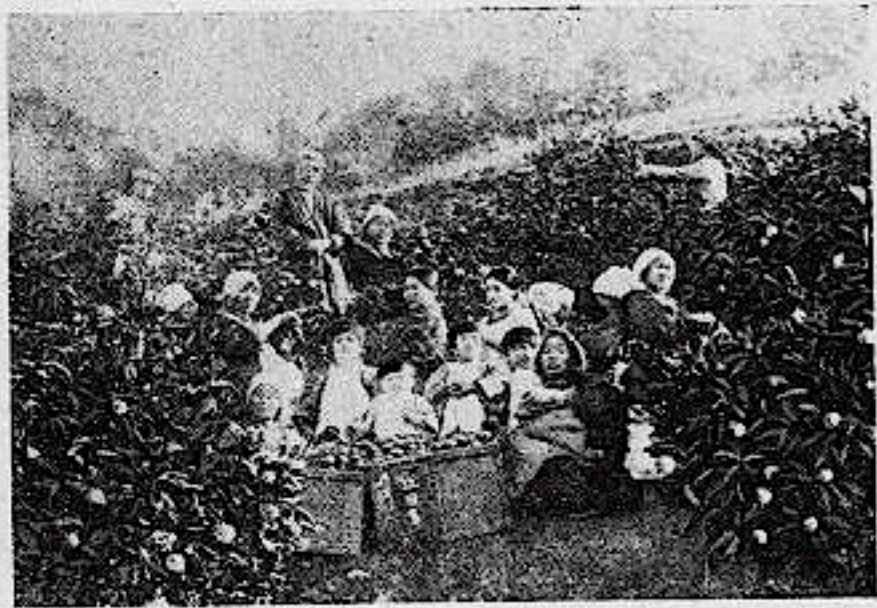
夏——島の夏は灼けつくやうに暑い。海岸の白砂や岩盤が陽光を映り返す上に、内海獨特の夕風の続く日が多いからである。まつ黒な島の子供等は、時を得顔に櫓をこいだり、水泳ぎをしたり、終日、海面に活躍する。

村から村へ、丘から丘への通路には、足を止めて憩ふ緑陰も多く、慰めを一管の煙草に求めて峠を越したり、磯邊を傳つたりして行く村人の悠長さも、島にふさはしい趣きといへよう。

暑い。しかし、水に近い島の夏は、壯快であり、また男性的である。

秋——満目錦繡、柑橘の實の黄ばむ秋は、空あくまで高く、水いよいよ碧

江田内
の漁舟



蜜柑の

を増す。

收穫

一年間の勞作が實を結んで、果物や

農作物の收穫にいそむ人々の顔も一際明朗である。

高きに登つて遠望を縦まにするのもいい。濱傳ひに、村から村へと心ゆくまで遊歩するのもいい。扁舟に帆を張り、浪のまにまに釣魚に興ずるのもいい。泥んや、明月水面にただよふ静夜、欄により、獨り靜觀冥想するに於てをや

冬——島の冬は、概して暖かである。雪が降つたり、氷點下幾度といふやうな温度になつたりすることは、殆んど稀である。

随つて、島の人々は、冬とはいへ、活動的で

ある。暖い冬の陽ざしを受けて、海上の漁撈に、名産薩摩薯や大根の陽干しに、柑橘の園
ひに終日いそがしい。

四、海軍兵學校の教育精神

兵學校の教育

海軍兵學校は、いふまでもなく、將來、帝國海軍の軍令軍政方面の統率者たる、海軍兵
科將校を養成するを以て教育の目標としてゐる。

されば、その教育精神は、おのづから帝國海軍の教育精神といふも適言ではない。

本校を巢立つた數千の人々は、既に、幾多の戦役に、事變に、國力伸展の勇士として、
挺身活躍せること、また、現に、大東亞戦争場裡、渺茫涯しなき海洋の北に、南に、一身
一家の存在を忘れ、夙夜盡忠奉公の誠を效しつつあるは、吾等の寸時も忘るる能はざると
ころである。そしてこれらの熱々たる芳烈偉勳は、實に、これ、海軍兵學校に於ける教育
精神の結實せるものに外ならない。

聖訓五箇條

一 軍人の忠節を盡す
 本分と尽し

一 軍人の禮儀を重んじ

一 軍人の武勇を尚ほし

一 軍人の信義を重んじ

一 軍人の質素を尚ほし

元帥府軍務部附設軍事大学
 訓育部

聖旨奉體即教育精神の眼目

本校の教育精神は、極めて瞭乎たり。他なし、軍人に賜はりし勅諭の御趣旨を奉體し、一切の世情に拘泥することなく、専ら、將校としての見識器量を磨勵し、時の平戦を問はず、聖慮の萬一に對へ奉らんとするにある。

本校の教育は、すべて、この精神の發揚を眼目として、訓育に、學術教育に、諸多の教育的様相を展開してある。

一、生徒訓育科目

科		目		課		目	
精神教育	勅諭奉讀	勅諭勅語奉讀、勅諭勅語衍義	訓示、訓諭、講話	體操、陸戰、短艇、信號	體操、陸戰、短艇、信號	體操、陸戰、短艇、信號	體操、陸戰、短艇、信號
訓練	作業	體操、陸戰、短艇、信號	體操、陸戰、短艇、信號	體操、陸戰、短艇、信號	體操、陸戰、短艇、信號	體操、陸戰、短艇、信號	體操、陸戰、短艇、信號
勤務	日課作業	隊務、軍歌、號令練習、儀式、禮法等	隊務、軍歌、號令練習、儀式、禮法等	隊務、軍歌、號令練習、儀式、禮法等	隊務、軍歌、號令練習、儀式、禮法等	隊務、軍歌、號令練習、儀式、禮法等	隊務、軍歌、號令練習、儀式、禮法等
體武	諸點檢	分隊點檢、生徒館點檢、被服點檢、銃器點檢、短艇點檢、定時點檢	分隊點檢、生徒館點檢、被服點檢、銃器點檢、短艇點檢、定時點檢	分隊點檢、生徒館點檢、被服點檢、銃器點檢、短艇點檢、定時點檢	分隊點檢、生徒館點檢、被服點檢、銃器點檢、短艇點檢、定時點檢	分隊點檢、生徒館點檢、被服點檢、銃器點檢、短艇點檢、定時點檢	分隊點檢、生徒館點檢、被服點檢、銃器點檢、短艇點檢、定時點檢
體操	劍道及柔道、銃劍術、游泳術	劍道及柔道、銃劍術、游泳術	劍道及柔道、銃劍術、游泳術	劍道及柔道、銃劍術、游泳術	劍道及柔道、銃劍術、游泳術	劍道及柔道、銃劍術、游泳術	劍道及柔道、銃劍術、游泳術
體技	各種球技、相撲、馬術、登山行軍等	各種球技、相撲、馬術、登山行軍等	各種球技、相撲、馬術、登山行軍等	各種球技、相撲、馬術、登山行軍等	各種球技、相撲、馬術、登山行軍等	各種球技、相撲、馬術、登山行軍等	各種球技、相撲、馬術、登山行軍等

聖訓五箇條

一 軍人の忠節を重んずる

本分と責任を

一 軍人の禮儀を重んずる

一 軍人の武勇を尚ぶる

一 軍人の信義を重んずる

一 軍人の質素を尚ぶる

元帥府軍務部附屬中等学校
謹す

聖旨奉體即教育精神の眼目

本校の教育精神は、極めて瞭乎たり。他なし、軍人に賜はりし勅諭の御趣旨を奉體し、一切の世情に拘泥することなく、専ら、將校としての見識器量を磨勵し、時の平戦を問はず、聖慮の萬一に對へ奉らんとするにある。

本校の教育は、すべて、この精神の發揚を眼目として、訓育に、學術教育に、諸多の教育的様相を展開してゐる。

一、生徒訓育科目

科 目		課 目
精神教育	勅諭奉讀	勅諭勅語奉讀、勅諭勅語衍義
	訓話	訓示、訓諭、講話
訓練	教 練	鐵砲、陸戰、短艇、信號
	作 業	酷暑訓練、嚴冬訓練、武道週間、短艇週間、短艇巡航、募營、野外演習、總船艇出動、移動訓育、兎狩、棒倒し、總短艇漕漕教練等
勤務	日課作業	隊務、軍歌、號令練習、儀式、禮法等
	諸點檢	分隊點檢、生徒節點檢、被服點檢、銃器點檢、短艇點檢、定時點檢
體 育	武 道	劍道及柔道、銃劍術、游泳術
	體 操	
技		各種球技、相撲、馬術、登山行軍等

軍 事 學		普 通 學	
一、運用術	六、航空術	一、數 學	五、地 理
二、航海術	七、機關術	二、理 化 學	六、國語漢文
三、砲 術	八、工作術	三、精神科學	七、外國語
四、水雷術	九、兵術大要	四、歷 史	
五、通信術	十、軍 政		

訓育基調の教育

本校の教育は、歸するところは一本であるが、その方法として、一往、訓育と學術教育とに分れてゐることは、まづ留意されなければならぬ。

即ち、徳性及び體力の涵養練磨を主要目的とする一切の教育は、訓育であり、各種學術の研究修得を主要目的とする一切の教育は、學術教育と稱せられる。

そして兩者の中にあつては、訓育こそ本校教育の基調をなすものであり、その要樞をなすものは、軍人に賜はりし勅諭を中心とする精神教育である。即ち、夙夜聖旨を奉體し、軍人精神を育養し、軍紀に慣熟し、體力を鍊成し、以て兵科將校たるの本分を自覺せしむるは本校の教育萬般に於ける基礎的精神である。

これが爲には、おほよそ、次の如き制度が設けられ、あらゆる方面から訓育の徹底が期せられてゐる。

訓育基調の教育

本校の教育は、歸するところは一本であるが、その方法として、一往、訓育と學術教育とに分れてゐることは、まづ留意されなければならぬ。

即ち、徳性及び體力の涵養練習を主要目的とする一切の教育は、訓育であり、各種學術の研究修得を主要目的とする一切の教育は、學術教育と稱せられる。

そして兩者の中にあつては、訓育こそ本校教育の基調をなすものであり、その要樞をなすものは、軍人に賜はりし勅諭を中心とする精神教育である。即ち、夙夜聖旨を奉體し、軍人精神を育養し、軍紀に慣熟し、體力を鍊成し、以て兵科將校たるの本分を自覺せしむるは本校の教育萬般に於ける基礎的精神である。

これが爲には、おほよそ、次の如き制度が設けられ、あらゆる方面から訓育の徹底が期せられてゐる。

1、期と分隊

生徒は、入校と同時に、第何十期生徒と呼ばれる。そして、その期の主任指導官を始とする數名の指導官により、彼等は肉親も及ばぬ程の盟友として團結し、切磋琢磨するやうに教導せられる。しかも、その交情は、ただに在學中のみにとどまらず、卒業後も、現役を離れた後も、家庭にまで推し擴められて、あらゆる休戚を分か合ふといふ美しい傳統を持つてゐる。

この團結こそ、本校生徒

團結血よりも濃し



分隊は最上級生徒より最下級生徒に至るまでを等しい數で按排して合成した結合體であり、學術教育を受ける以外の、生徒館中心の、殆んどすべての生活は、この組織を基調として行はれる。

そして、分隊は集つて部をなし、部は合して生徒隊となり、そこに、渾然且つ整然たる傳統に輝く、自律的生徒館生活が營まれる。即ち、分隊では最上級生徒中の先任者が伍長・伍長補となつて分隊員を誘導し、更に、武官の分隊監事により、また部監事・生徒隊監事により順次に指導統率せられてゐる。更に、監事長・校長は、これを總轄統督して訓育の完璧を期するのである。分隊訓育・部訓育等が、主として、等しく本

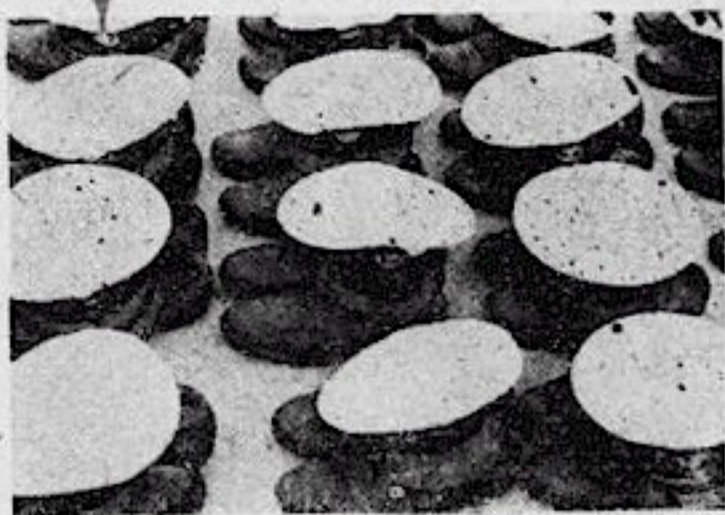
自習



校の卒業生たる武官の監事により行はれるところに、他の追隨を許さない教育的迫力がある。特に、分隊生徒が自己の直接指導教官たる分隊監事を、父とし、兄として敬慕信頼する姿は、眞に至純崇高であり、教育の眞面目は、まことにここにありと思はしむるものがある。

かくて生徒は期と分隊の兩制度により、縦横に多くの教官監事により見守られつつ育成せられて行くのであつて、この合理的な制度により、ただに訓育に於てのみならず、學術教育に於てもおのづから公正にして能率的な成果が生み出されるのである。

軍帽は一定の方向に置いて置く



校の卒業生たる武官の監事により行はれる
ところに、他の追隨を許さない教育的迫力
がある。特に、分隊生徒が自己の直接指導

軍帽は一
定の方向
に向けて
置く

教官たる分隊監事を、父とし、兄として敬慕信頼す
る姿は、眞に至純崇高であり、教育の眞面目は、ま
ことにここにありと思はしむるものがある。

かくて生徒は期と分隊の兩制度により、縦横に多
くの教官監事により見守られつつ育成せられて行く
のであつて、この合理的な制度により、ただに訓育
に於てのみならず、學術教育に於てもおのづから公
正にして能率的な成果が生み出されるのである。

ロ、入校教育

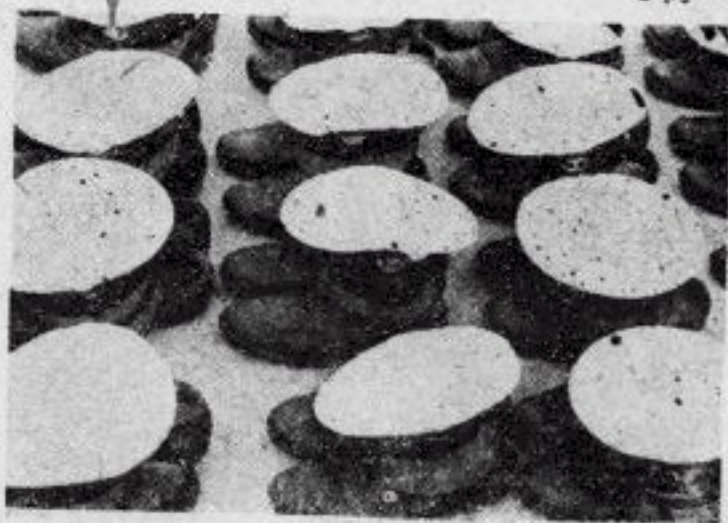
入校の當初約一箇月は、殆んど、學術教育を行ふことなく、主として、諸般の訓育が
施される。所謂「躰」を主とするもので、この間に新入生は基礎的軍人精神を體得し、
軍規校則に慣熟し、やがて、訓育と學術教育とを併せ受け得る諸般の準備を完了する。
「師嚴道尊」・「給仕第一」などといふは、わが國の教育に於て、古くより、廣く、いひ
慣らされた教條であるが、いふは易く行ふは難し、これが本校では、絶對的に徹底して
實行されてゐる。

ハ、敬神崇祖

曾て某將軍から、

「戦争は、決して、數理の力のみによつて行ひ得るものではない。吾等帝國軍人は、戰
に臨んではまづ天佑神助を信する。戦略戰術はその次である」
と聞かされていたく感動したことがある。

本校の一隅、老樹鬱蒼たる小丘——八方圍には、畏くも皇祖天照大神の神靈を奉安



校の卒業生たる武官の監事により行はれる
ところに、他の追隨を許さない教育的迫力
がある。特に、分隊生徒が自己の直接指導

軍帽は一
定の方向
に向けて
置く

教官たる分隊監事を、父とし、兄として敬慕信頼す
る姿は、眞に至純崇高であり、教育の眞面目は、ま
ことにここにありと思はしむるものがある。

かくて生徒は期と分隊の兩制度により、縦横に多
くの教官監事により見守られつつ育成せられて行く
のであつて、この合理的な制度により、ただに訓育
に於てのみならず、學術教育に於てもおのづから公
正にして能率的な成果が生み出されるのである。

ロ、入校教育

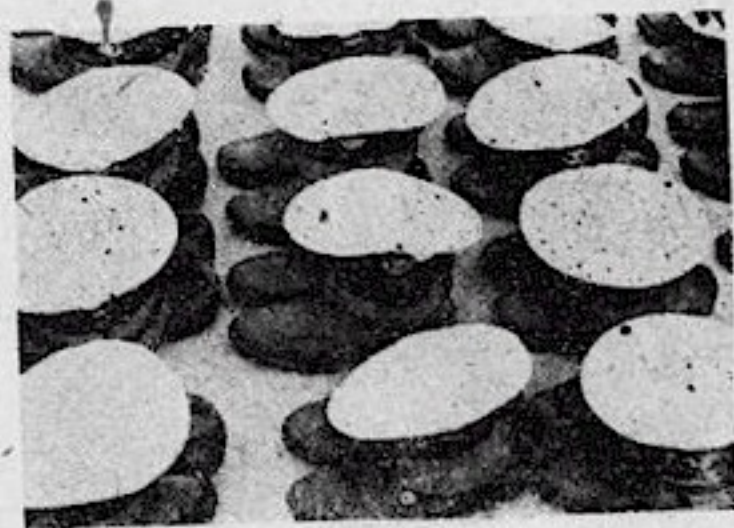
入校の當初約一箇月は、殆んど、學術教育を行ふことなく、主として、諸般の訓育が
施される。所謂「躰」を主とするもので、この間に新入生は基礎的軍人精神を體得し、
軍規校則に慣熟し、やがて、訓育と學術教育とを併せ受け得る諸般の準備を完了する。
「師嚴道尊」・「給仕第一」などといふは、わが國の教育に於て、古くより、廣く、いひ
慣らされた教條であるが、いふは易く行ふは難し、これが本校では、絶對的に徹底して
實行されてゐる。

ハ、敬神崇祖

曾て某將軍から、

「戦争は、決して、數理の力のみによつて行ひ得るものではない。吾等帝國軍人は、戦
に臨んではまづ天佑神助を信ずる。戦略戰術はその次である」
と聞かされていたく感動したことがある。

本校の一偶、老樹鬱蒼たる小丘——八方圍には、畏くも 皇祖天照大神の神靈を奉安



せる八方園神社の神域があり、教官も生徒も、日夕登拜して、皇恩の宏大なるを奉謝し、神明の冥護を祈念し、奉公の赤心を表誓し奉るのである。

また、その神域の一角には、全国各地の所在を示した方向盤が備へられてあり、一日、各自の家郷を知るに便してある。

朝まだき、神靈にぬかづき、皇城を拜しまつた生徒が、各々その父祖に向かつて、遙かに敬禮する姿に接しては、吾等もまたたとへ難き崇高嚴肅な氣持となり、心の底からこの國風をありがたく思ふのである。

二、各種の訓練

訓練は、嚴密には、教練と作業とであるがこれを體育と合して訓練と通稱してゐる。

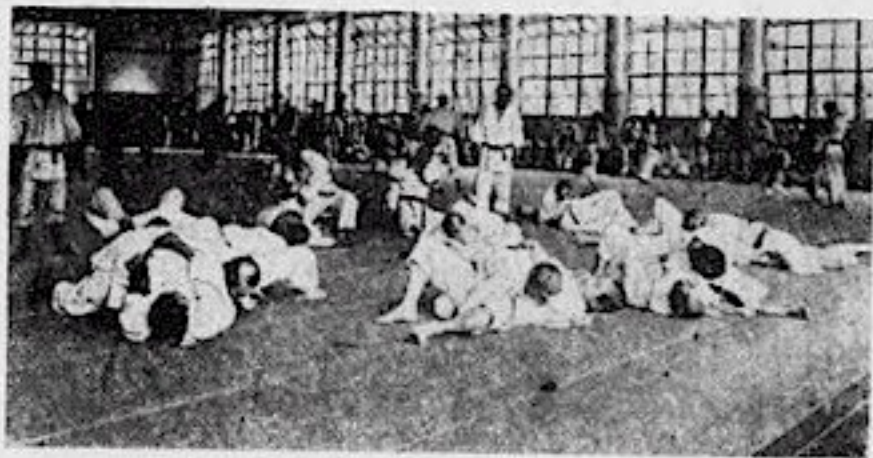
教練作業は陸戰、短艇等戰闘の要求に適する如く、各種の作業に練熟せしめるのが目的であり、體育は、武道・體操・體技に分れ、不撓の氣力、強健なる身體を養成し、海軍士官として、完全な御奉公をなし得る素地を作るを目的として、演練せしめられる。

劍道・柔道・銃劍術・游泳術等は本校に於ては武道といはれてゐる。また球技・相撲・馬術・登山・行軍等は體技と呼ばれて居る。これらは世間一般には英氣の長養、肉體の鍛錬にと、多分に趣味的に行はれてゐる。しかし、本校のそれは決して然らず、訓育中の要目として重視せられてゐる。随つて、これらの訓練に於ては、眞に敢爲熱闘の勇猛精進が行せられるのであつて、一點の弛緩をも見出し得ざる徹底味を持つてゐる。

かくて、不撓不屈、斃れてなほ已ますてふ負けじ魂は鍊成せられ、陸々として間隙のない身體は、養成されて行く。

就中、訓育的見地からは武道を、體育的見地

心身を鍛ふ



からは體操を重視する。それは、本校教育の日課中に於て、如何に、それ等に充當された時間が多いかを見れば、瞭乎として理解することが出来るであらう。

武道の目的は、古來の武士道精神を體得し、併せて氣力の鍛錬を主眼とし、自信ある識見技術の域に達せしむるにある。

平素の訓練が、黙々不斷の裡に行はれるのは固よりの事であるが、嚴冬訓練——所謂寒稽古や、春秋二回の武道週間の如きは、一入猛烈を極める。

武道週間中は特に、本校の教授囑託たる斯界の權威が中央より來校せられ、その直接の指導により、一段の向上進歩を期待する。

武道だけに限つたことではないが、勝敗に先立つて重んぜられるのはその精神である。即ち禮讓、敢爲、不屈の心構への如きは極めて強く留意せられる。

随つて攻撃的迫力を缺いた——只管に勝たんがための見苦しい姿勢の如きは最も採らざるところ。入校當初は、各人経験の有無にかかはらず心身兩面に渡り基本的演練を行ひ、一日も早く進退堂々たる兵學校武道の境地に到達するやうに教導せられる。

それは入校時の訓育に於て「一躰」が重視せられるのと同様である。

また、生死を決すともいふべき試合の勝敗が常に一本勝負で判定せられることや、勝抜きはどこまでも続けしめて苟くも優退等といふ扱ひ方を認めざるが如きは言ふまでもない。

眼を轉じて、傳統歴史といふ點からしても、本校の武道は深い緣由を持つてゐる。

例へば、柔道の如き、その創始者嘉納治五郎先生が、全國中、最初に、講道館支部を設けられたのは、わが江田島であり、とりも直さず、わが海軍兵學校であつた。時、實に、明治二十二年、「講道館江田島分場」といはれたのがそれである。當時、先生門下の俊英、山下義韶氏は僻遠の本校に常住して、その教授に當つてをられたし、廣瀬中佐、湯淺少佐、財部大將の如きは實に當時の生徒であつた。

四段廣瀬中佐が旅順港口に護國の花と散るや、師範は、新例を開き、直に六段を贈り、その忠烈を發願してゐられるがその段證書の如きも、文辭全く異例で、

「忠勇ト思慮トヲ天下ニ示シ講道館柔道ノ精神ヲ發揮セリ仍テ六段ヲ贈ル」

と認めてある。以て師範嘉納の意中を察すべきである。

その後引續く實戦の體驗等により、今や帝國海軍獨自の柔道訓練法も成案を見るに至り、日々の果敢な演練は又江田島精神鍊成への一面として大きな立場を占めて居る。

劍道、游泳術の武道に於ても各々本校特異の傳統に輝いてゐるのであるが、柔道と似通ふ點も多いので、敢へて、今は省略することとする。

酷暑訓練は總員に游泳術が課せられるので、柔剣道等の特別訓練はないが、極寒の候には、劍道、柔道、銃劍術、短艇の嚴冬訓練が行はれる。即ち早朝と午後二回順ぐりにそのいづれかを演練するので、連続の度合に於て、遙かに平日のそれに倍するものがある。零下幾度の寒風を衝いて、一椀の重湯や飴湯に腹を温め終るや、元氣一杯飛び出して、霜やけ赤切れをもとせす、敢闘する江田島健兒の姿は、眞にたのもしき限りである。

體操は軍事諸般の要求に適應する體力・氣力・持久力及び敏捷性を養成する目的を以て、武道と並行して、重要視せられる。一口に體操といふも、それは海軍に於て多年研

究工夫の結果産み出された「海軍體操」の謂ひである。

一屈折、一撚轉といへども、深き留意の下に案出せられた「海軍體操」は、その順序をおぼえるだけでも、素人目にはなかなかむづかしい。しかし、生徒は毎日課せられることであり、非常な熱意を以て當るため、その會得も驚くほど速かである。

今次大東亞戦争に於て、メナドに、クーバンに、刮目すべき、大いなる戦果を擧げたわが海軍落下傘部隊の基礎訓練にも、本體操が極めて、大きな

役割を持ったことは、牢記せられなけ

海軍體操
ればならぬ。



その他、本校特有の猛訓練たる「棒倒し」・「遠漕」・「遠泳」・「彌山登山競技」等に就いては、別項に於て述べることにしよう。

本、軍紀風紀

軍紀風紀が軍隊の生命たる以上、本校に於ても、これが重要視されるのは、固より當然である。

衣食住の全般にわたり、生活が齊一化され、規律化されてゐること、萬事「海軍兵學校生徒服務綱要」の示すところにより進退すること等々、庶事百般、軍紀風紀によらぬものはない。

そして、その基本的條件となるものは、所謂「躰」教育である。入校當初一箇月餘の準備教育の中心は「躰」にある。これにより生徒としての相應の心構へと態度とが出来上つて、はじめて學術教育に入るのである。それ程、本校に於ては、「躰」が重んぜられてゐる。

かくて、あらゆる行動が、昭々たる大目標の下、確實・慎重・敏速に進められて行く。——といへば、人或は、誤つて、その過酷にわたるなきやを思ふ者があるかも知れぬが、それに就いては、筆者が曾て海軍砲術學校に學んだ時、時の横須賀鎮守府司令長官たる百武源吾大將が、吾等に與へられた訓示の一節を想起せずにはゐられない。即ち、大將は曰く、

「帝國海軍の軍紀は、突然、世間から飛び込んで來た者には、一見いかにも過嚴といふ感じを抱かしめるであらう。しかし、これは決して一朝一夕の故を以て成つたものではない。海軍が七十年の長きにわたり、洗練に洗練を重ねた結果、出來あがつたものであつて、あらゆる制度の中、最善なるものか、然らずとせば、これより外に代るべき良法なしといふものが残つて、今日の軍紀となつてゐる。更に、改良向上せしむべきものあらば、決して、これを改むるに躊躇するものではない。諸子は、この點を十分に意味熟慮して、速かに、軍紀に習熟すべきである。」

といふ意味であり、とかく批判的に走り過ぎ易い當時の吾等には、正に頂門の一針で

あつた。よつて、以て、帝國海軍のいふ所の軍紀の如何なるものかを知るべく、本校に於ても、それは極めて厳正且つ合理的に守られてゐる。

更に、附記したいのは、曾て秋山真之中將の強調せられた如く、軍紀を整肅するがためには、精神的方面に重點を置くべきは勿論であるが、同時に形式的方面をも重視しなければならぬ。両者が相互に影響しあつてこそ、訓育の目的を効果的に轉達せしめることは、敢へて心理學に於ける説明をまつまでもない。

帝國海軍の軍紀はすべてこの線にそつて存在してゐるのであり、本校に於ても毎朝行はれる定時點



檢や、一年に數度、校長により行はれる分隊點檢の如きすべて、精神・形式の兩面にわたり深く留意せられるのである。

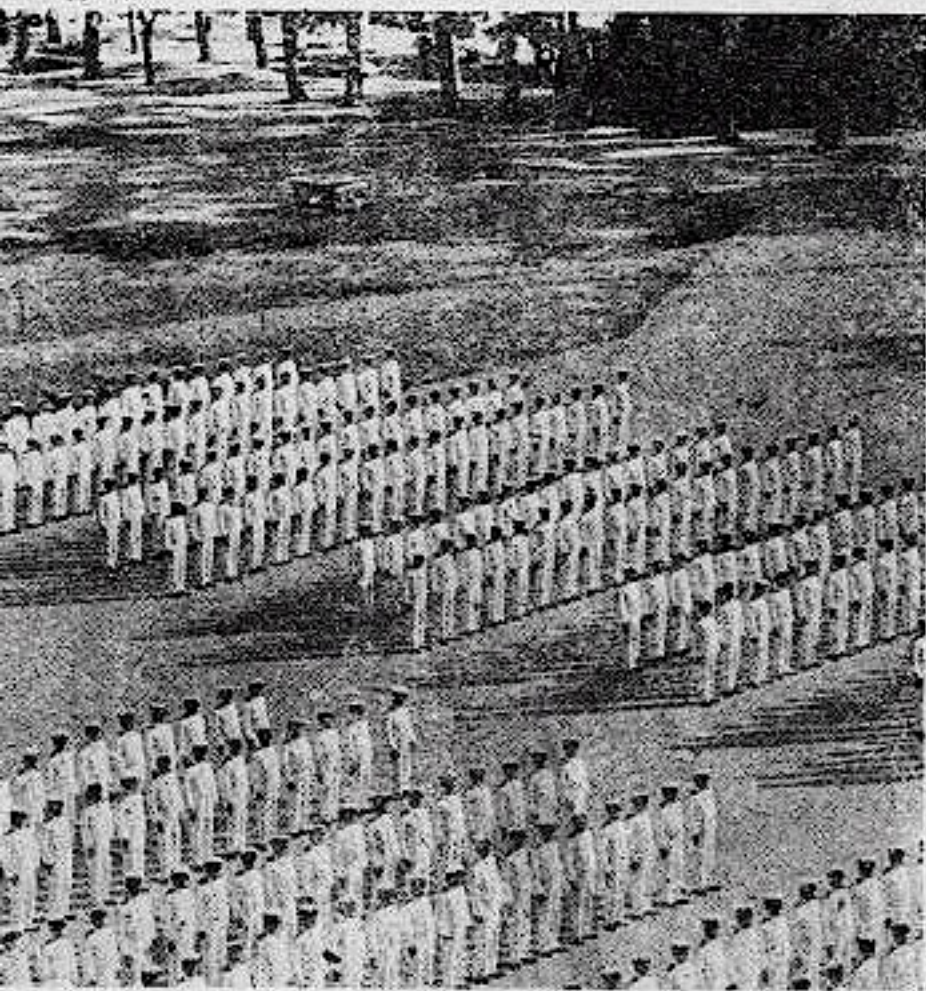
へ、先輩と後輩

すでに敍べた通り本校の監事たる教官はすべて、曾ては、

本校に於て

現在の生徒

軍容訓練
たり分隊
點檢



と大同の教育を受けた人々であり、先輩として、後輩たる生徒を思ふの情の厚きは、蓋し當然のこと、またその教育も體驗的におのづから極めて行き届くわけである。

また、監事以外の教官にあつても、専ら、海軍に奉公する先輩であり、専心、教育に従ふのであるから、その教育効果は極めて、大なるものがある。

かくて、教官と生徒との関係は極めて密接に保たれるのであるが、それは、ただ單に、教官對生徒の關係に於てのみ見られることではない。廣く部内の先輩に對する態度に於てもまた同様である。

部内の大先輩の來校せられた時には、多くの場合、一場の訓示により、生徒を鞭撻せらるるを例とする。先進、後進の差異こそあれ、同じ經驗を積み、同じ目標に向かつて進むそれらの人々の教訓は、一言半句といへども、生命の通ふものであり、ひしひしと若き生徒の胸をうつのである。

曾て、佐藤鐵太郎中將が、老いの身を本校へ運ばれて、

「齡は古いが、諸子と同じくこの學窓に育つた私だから、今日は袴をぬいで、何の遠慮もなく、孫の家へ來たつもりで、話させてほしい。」

と冒頭せられ、時には、兩眼の涙を拭うて循々として、軍人たるの心得を諭された情景は、筆者の永久に忘れ難き感激である。

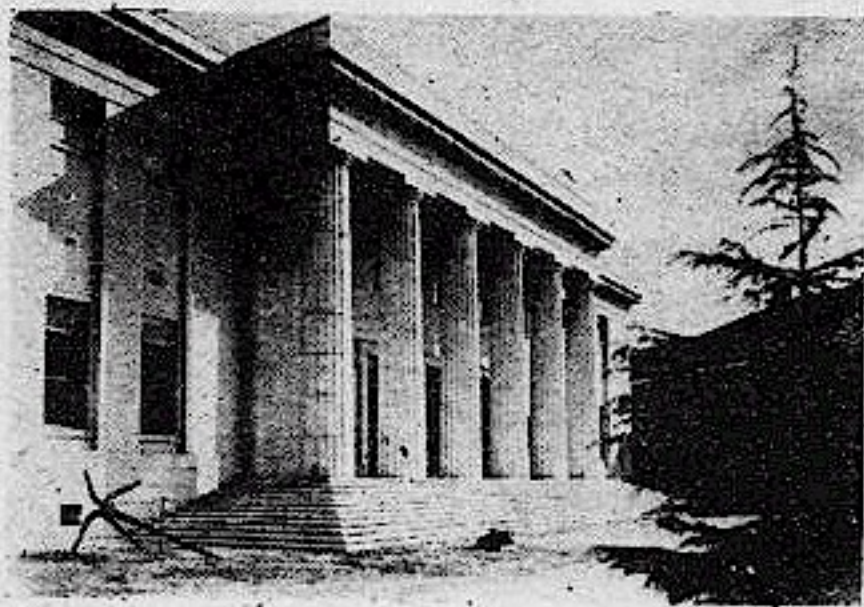
この一事を以て他を推し考へても、本校の先輩と後輩との心事が、いかに密接に繋がれてあるかがわかるであらう。

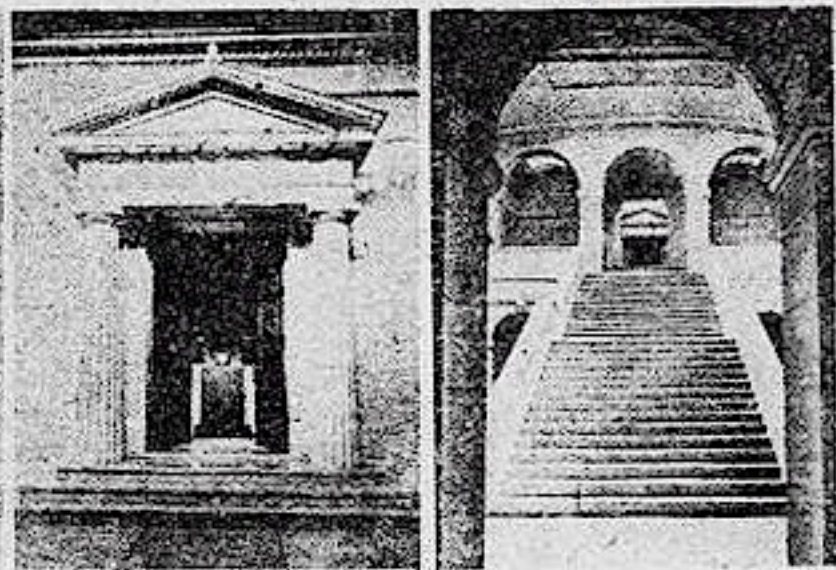
ト、教育参考館

構内に、教育参考館といふ白壁の大殿堂がある。

正面、大理石の階段を登りつめれ

参考館
正面





東郷元帥

32

ば、そこは、東郷元帥室といはれる。

中央、扉の中には、元帥現身の遺髪が奉安せられ、その四周には、元帥に賜はりし位記官記をはじめ奉り、元副関係の数々の遺品が安置されてある。

わが海軍の師とし親とし仰ぐ聖將の神蹟まします、——極めて、神聖なる殿堂、——何人も深く、その偉徳を景仰し、強く、その精神を繼承して行くことを誓はずにはゐられない。そして、今や、眼前に彷彿として、元帥の英靈に接するが如き思ひに立ち至つて、人々は、限りなき光榮と力強さを覚えるのである。

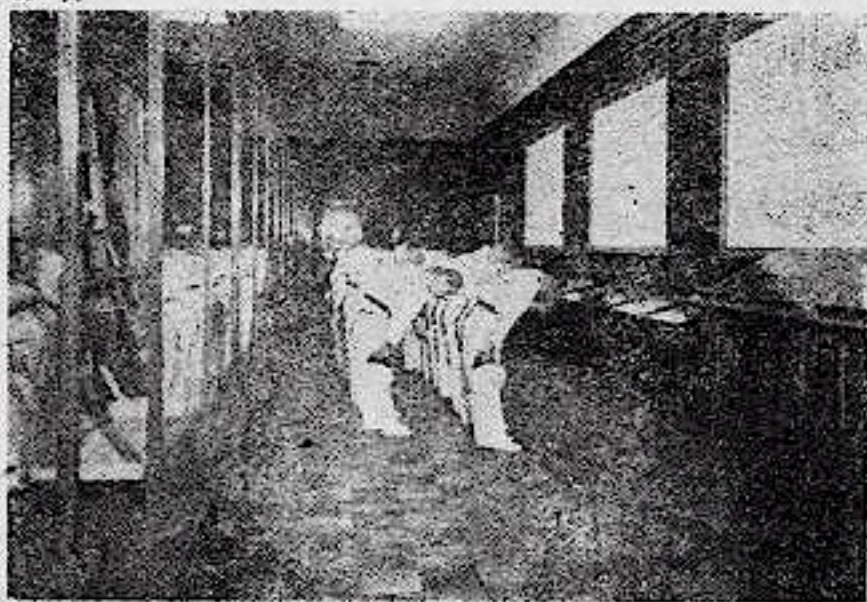
聞く、元帥薨去の報、一度、天下に傳はるや、

その偉烈を敬慕して措かざる當時の海軍士官は、御遺骸を江田島に迎へ、築城を本校の構内に割したいといふ願望とどめ難きものがあつたといふ。蓋し、元帥室の實現には、かかる人々の熱誠も與つて力のあつたことと思はれ、いよいよ尊く感ぜられるのである。

また、その特別室には、卒業生中の戦死者の名牌（大理石の壁面に聖徳太子の御親筆に係る法華經義疏中より文字を選拾して鏤刻されてある）が奉安せられ、また数々の偉烈を物語る遺品が安置されてある。

肉片血潮の飛び散つた海鬪、ズタズタに裂け破れた飛行服、血痕くろき腹

先覺の名
牌に誓ふ



卷等々。

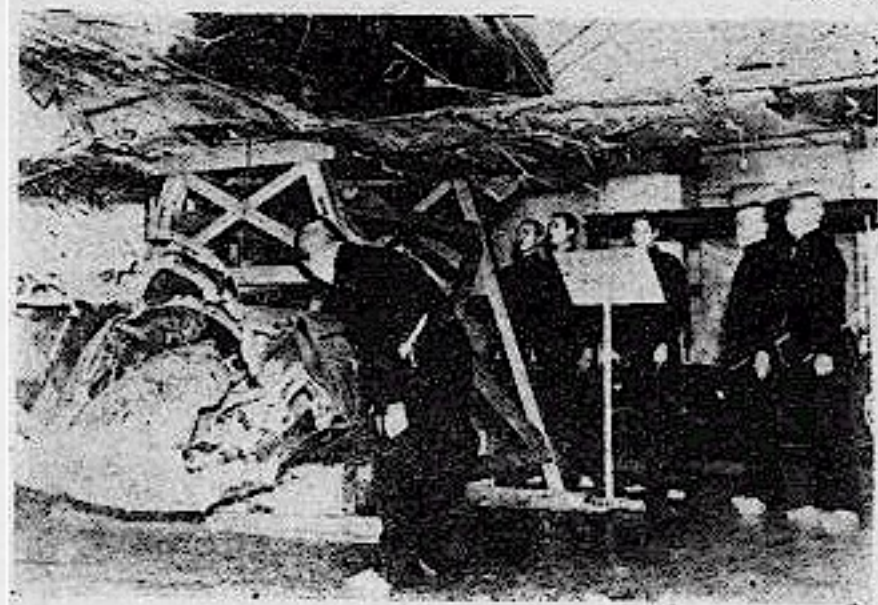
古くは、日清日露の戦役より、

先輩の壮烈に見
入る（館内陳列
の岩城樓）

近くは、ともに同一生徒館にあつて指導を受け
た若き先輩に至るまでの、生々しき盡忠の血
潮が、精神が永劫不滅の教訓を垂れてゐるので
ある。

仰拜、何人が肅然たらしめる者があらう。嗚呼、
「人生有限名無盡」。先進の純忠の精神は、永
遠に、若き後継者の魂の中に生きるのである。

その他、本館には常時、海軍関係の有益な資
料が展覧せられ、生徒教育に資するところ多大
なものがある。



チ、島を離れた生徒生活

生徒は日曜・祭日の如き公暇日には外出を許されるが、その遊歩の範圍は島内に限られてゐる。

しかし教室で修得した軍紀や學術の理論を實地に修練するためには、乗艦實習・航空實習等が行はれる。この時彼等は或は大洋の眞只中に、或は高空の層雲を潜つて航行し、その自信を深めるのである。かくて腦裡の理論は直に實際的行動として活現して行く。

卒業後、士官となれば砲術・航海・水雷・通信等々、更に上級の術科學校に入つて特
・技を専攻することとなるが、本校の教育は、初級將校としての勤務一般に通せしめるの
が目的であつて、例へば、航空術等に於ても、一往は卒業生全部が單獨操縦を爲し得る
域に達せしめられるし、砲術・運用等、將來如何なる配置にあらうとも、御奉公なし得
るだけの、各科にわたる基礎的素養を積むのである。勢ひ、その課業も複雑多岐、緊張
の連続といふことになる。

しかし、考査終了の際に 希望を帆
は、宮島に、嚴島合戦の昔 に見たし
を偲んだり、竹原に、山陽先生の事 だ伏走

蹟を訪うたり、或は、吉田に、毛利
元就公の善政を回想したりする所謂
訓育作業が行はれる。

また、慣海性を涵養すると同時に、
分隊内の親睦の情を深める目的を以
て、土曜の夕から日曜にかけての短
艇巡航なども行はれる。

そして、これ等のすべてが決して一片の趣味に墮せずして、眞摯なる武人の素養とし
て行はれるところに、極めて、大きな意味があると思ふ。しかも、本棧をめぐる各地は
風光明媚な俗塵を絶した瀬戸内海の別天地である。かかる高雅な大自然の中に、その志
氣・品行を長養し得る本校の生徒は、環境に於てもまた比類なく思はれたりといふべき
である。

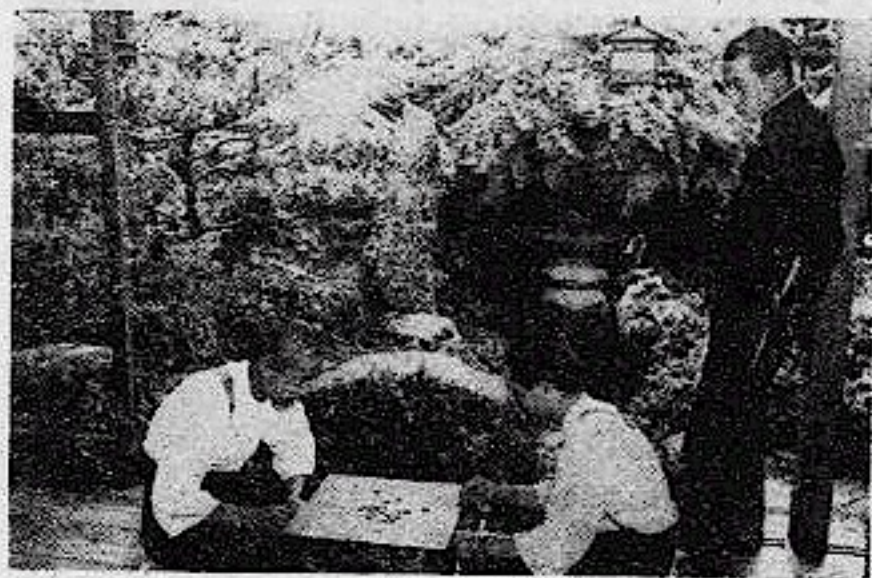
リ、官舎訪問

日曜祭日等の外出日には、教官の官舎は生徒の訪問で賑はふ。

官舎の多くは、校舎をとり巻いて弧形をなし、丘陵の麓部に、漸層的に並び建てられ
てをり教官は必ずここに定住することになつてゐる。來訪した生徒は、家庭的雰囲気の
横溢する中に、教官の経験談を聞いたり、訓練の思ひ出を話したり、或はまた、胸中の
悩みを打ちあけたりする和やかな場面があるのである。

言はばやはらいだ空氣の中に、古風な塾的教育が並び行はれるといつていいであらう。
遠く、家庭を離れて、専念、勉學修養にいそむ生徒の來訪を受けて、なごみあひ得
る官舎生活には、教官としての大きな意義を見出すことであるし、家族の者も何くれと
なく世話をするところに、人生の大きな喜びを感ずるわけである。





明日の英氣　　況んや、卒業後、たまたま、呉に
を齎ふ（生徒俱樂部）　入港した機會に多忙な時を割いて、
挨拶などに來られるのは、涙の出る程嬉しいも
のである。

又、生徒俱樂部

俱樂部制度もまた本校の持つ特色の一つであ
る。即ち、島内數十戸の民家が、學校の委託に
より、休日には、その家庭の大部分を開放して
生徒に提供し、肉親の膝下を離れてゐる彼等を
家庭的にあたたかく待遇するのである。

俱樂部は分隊とは違つて同期生のみが集ふ。

この時は、休養・外食・吟詠・音樂等が十分に

許される。そして、生徒は一週間の奮闘を慰め、更に來るべき次週に備へて英氣を養ふの
である。

随つて、生徒と俱樂部との交情はまた一人で、自ら世話をした生徒の卒業式に招かれ
た俱樂部のをばさん（親しみのある傳統的用語である）が、滿腔の喜びと一抹の悲し
みに涙しつつ臨む情景は、ほんたうに、人情の厚きを思はしむるものがある。

ル、山野の跋涉

辨當に水筒で、靈峰古鷹に登つたり、波靜かな襪邊を散策するのもまた、休日によろ
こびである。

軍神廣瀬中佐は在校一年間——移轉當初の生徒である——古鷹に登攀せらるること百
回に及んだといふ有名な話がある。恐らく、浩然の氣を養ふと同時に、意志と身體の鍛
鍊を期せられたのであらう。

今でも小軍神達は盛んに古鷹登りをやる。

島の寺利等には、今は時めく將星達が生徒時代に書遺した墨蹟等のあるのも面白い。かくて、江田島の天地は生徒にとり、まことに、魂の第二の故郷なのである。

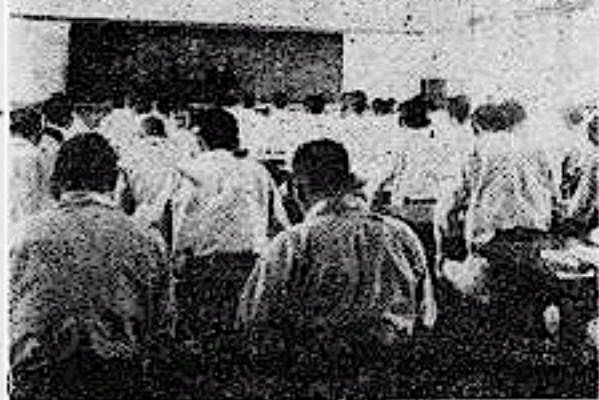
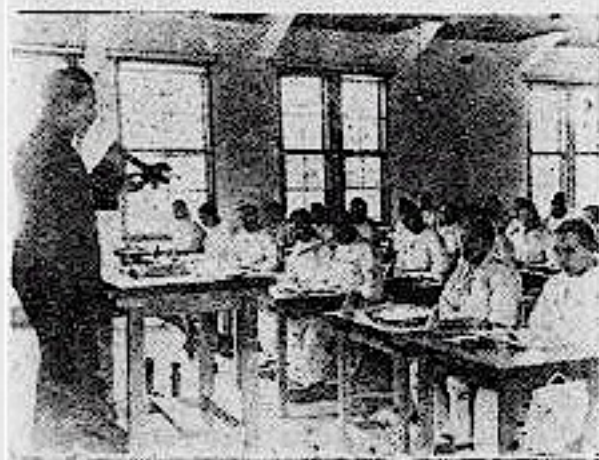
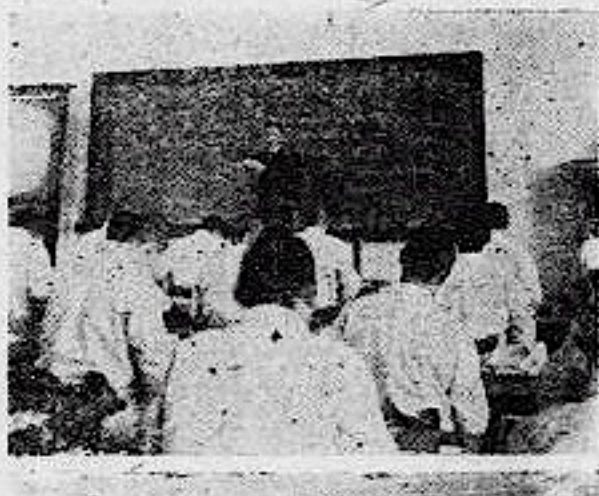
學 術 教 育

本校に於ける學術教育の目的は、以て生徒の頭腦を鍛鍊し、緊要なる知能を修得せしめ中正なる教養の基礎を確立し、將來の御奉公に萬遺漏なきを期するにある。

即ち軍事學方面に於て

は、統率・砲術・運用・航海・水雷・通信・航空・機關・軍政等、普通學方面に於ては、倫理・哲學・歴史・國語漢文・數學・理化學・外國語等が課せられる。

卒業と同時に、
右 上 航空
右 下 歴史
左 上 數學
左 下 外國語
多數の部下を持つのであるから



その教養も相當高くなければならないし、日進月歩の諸般の軍事に即應する爲には相當深い學術的素地も培はねばならない。随つて、學術はすべて、割合に高度のものたるは言ふまでもない。そして學習は、積極進取、自啓自發を基調とするのであつて、時間の善用、教務内容の確實な把握等には極めて深い注意が拂はれてゐる。

そして、これ等の學術教育もまた、各科がただ單なる學術教育として孤立するものではなく、軍事學と普通學とは深い關係を持つてゐるし、又全般的に、學術教育と訓育とは不可分の關係で進められる。それは武官が訓育中心の監事、指導官たるとともに、學術教育の教官であり、文官もまた、單に、學術教育の教官としてのみでなく、部や期の指導官たる制度から見ても、明瞭である。かく訓學一體は、本校の教育に於て頗る重視するところであつて、結局、訓育は監事長に、學術教育は教頭により、統督せられるが、この二つの立場が同一の人に兼ねられてゐる點にその、妙機が發揮せられるのである。

要は人に存す

これを要するに、全國萬殊の環境に育てられて來た若人を兵學校教育てふ一大鐵爐の中に熔け込ませて、等しく護國の植幹たらしめんとするは、本校教育の眞髓である。所謂「性相近也。習相遠也」の各人は、三年有餘の課程を経て、この大鐵爐により、各々長短はあれ、等しく軍人道に徹せる人材として送り出されるのである。

しかも、この鐵爐を形成する重大要素は、機構や制度、傳統や環境もさることながら要は、教官と生徒の至誠にありと思ふ時、吾等はその責務の重大なるを思はざるを得ない。

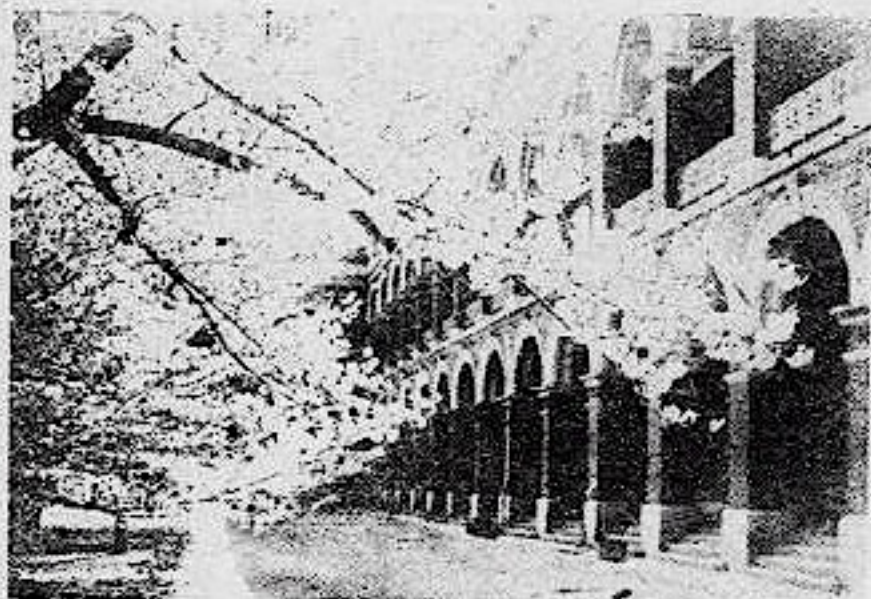
五、生徒館生活の一日

傳統輝く生徒館

生徒の生活は、生徒館・教室・海面上・練兵場・道場等々、もろもろの方面から観なければならぬが、その訓育の中心となり、生徒隊全體が一の大きな有機體として、修養し勉學する生徒館生活こそは、本校の持つ特色の最大なるものであらう。

東生徒館

校門をくぐり、兩側の老櫻の並木に



そつて進むと、右手の小高い森は、本校鎮守の八方園神社の神祠であり、その真下の大講堂を過ぎて更にやや進めば、緑も濃き松並木の間に見えつ隠れつする赤煉瓦の荘厳な建物

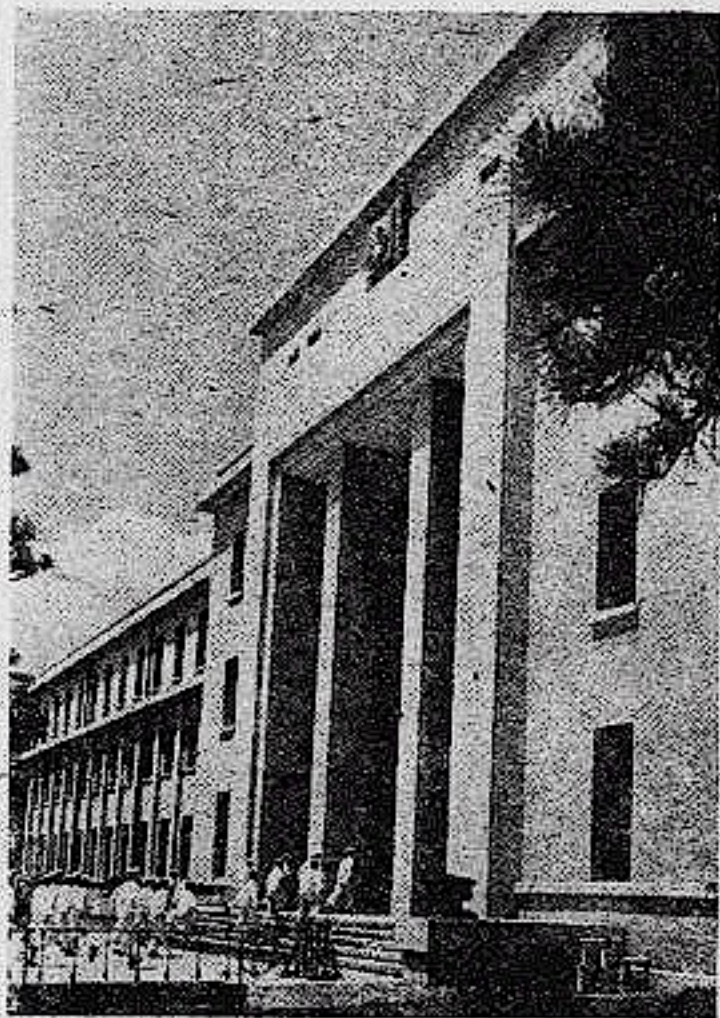
がある。

これぞ、五十有餘年の歴史に輝く生徒館である。

更に、これに續いて、近年建造成りし白雲の生徒館が、縦に横に、立並んでゐる。そして、それ等

西生徒館は各々東・

館正面西生徒館と



呼ばれてゐる。

生徒館の機構は、本校獨特の極めて複雑なものであるが、しばらく普通世間並の例を以てせば、察または寄宿舎といつて表現するの外はないであらう。しかし、凡そまた、寮や寄宿舎とは遙かに懸絶せる大きな特色を持つてゐる。

即ち、生徒館は決して單なる寢食や修學のために設けられたものではない。實に聖諭奉體・七生報國の江田島精神を鍊成する一大道場として存するのである。

歴代の先輩、いつれもがこの生活に於て、傳統の海軍精神を涵養し體得して來たのである。

されば、海軍兵學校の生活は生徒館に存すといつても、あながち過言ではないであらう。時に、來校せられた老將軍の、赤煉瓦の前を低回願望しながら、感慨に堪へざるが如き姿を見受けることがある。二十年、三十年の昔——在校當時の生徒館生活の印象を、夢の如く回想してをられるのであらう。

各生徒館ともに一階は自習室、二階三階は寢室と一定せられてゐる。そして、當直監事の指導の下に、終日、自律的に浚刺たる生徒生活が展開されていく。

最上級生徒（往年の呼稱を用ひて傳統的に今でも「一號」といふ。下級生徒になる程二號・三號といふ風に係数がふえる）は、極めて大きな責任のある立場に立つ。即ち、彼等

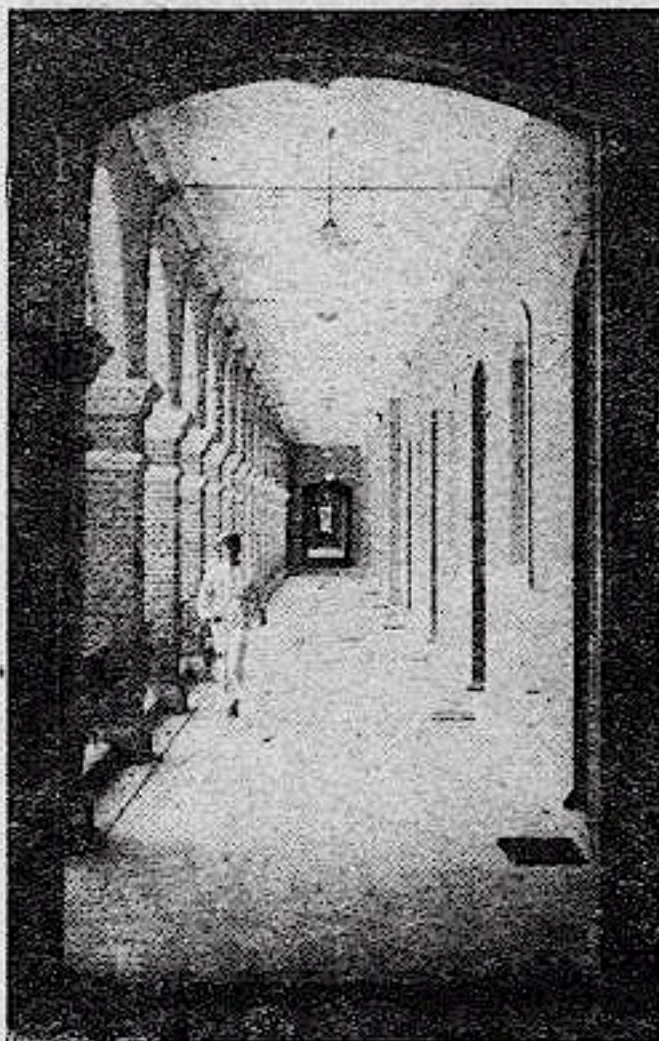
は、その一舉手一投足が、下級生徒の模範たると同時に、下級生徒に對しては、殆んど絶對に近い指導力を持つからである。

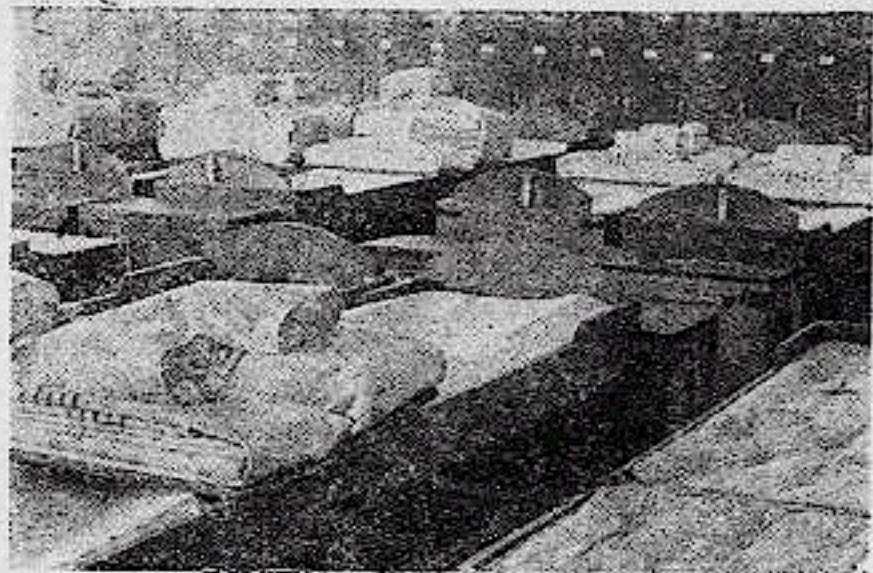
従つて、本校の教

育は一號生

以下

徒になれ





寢室の一部、整
然たる毛布と個
々のチェスト
導は出来るといふ境涯にまで、進め
られてあるべきは、固よりのことである。

實に、生徒館生活の盛衰は、係つて一號生徒の
識見士氣の如何にあり、ともいひ得るであらう。
そして、屢々上導き下従ふ、活潑潑地、火花の
散る指導ぶりを見ては、眞に、明日の皇國の將來
のため頼もしい感を持たずにはゐられない。

總員起し

暁闇の薄霧を衝いて、啾啾たる起床喇叭の鳴り
響くや、瞬時にしてその日の生徒生活は、極めて

勇壯に開始される。今まで塵一つ動く音さへしなかつた生
徒館は、一瞬にして鳴動し訓育の一大戦場と化する。

數千の生徒が、一齊に床を蹴つて跳ね起き、窓掛を引、
く・窓をあける・毛布をたたむ・軍装に着更へる等の動作
が、戦争さながらに続けられる。しかも、一つ一つのさば
きは、敏捷であると同時に、確實でなければならぬ。そこ
に、訓育上の重大意義が存してゐるのである。

起床動作は少くとも、三分以内で終了する。これが終る
や、彼等は次から次へと靴音高く洗面に駆けて行く。ここ
ではまた、洗面は即ち洗心と心得よといはれてゐる。

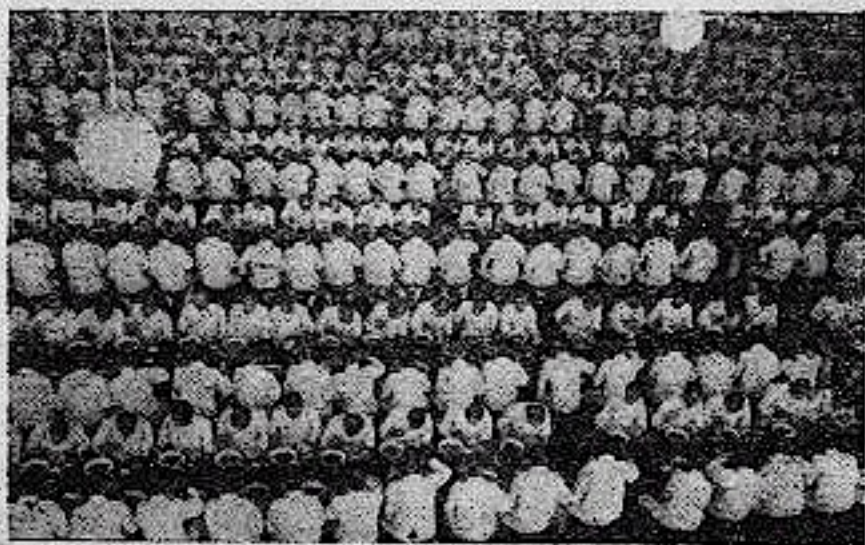
かくて、起床十五分後には練兵場に整列、清澄な大氣の
中に、上半身裸體の爽快な海軍體操が行はれる。

盛りあがる隆々たる筋肉の一點の弛みなき律動は

隊前開始
總員起床



上 食事
下 特有の朝食献立



朝食まで

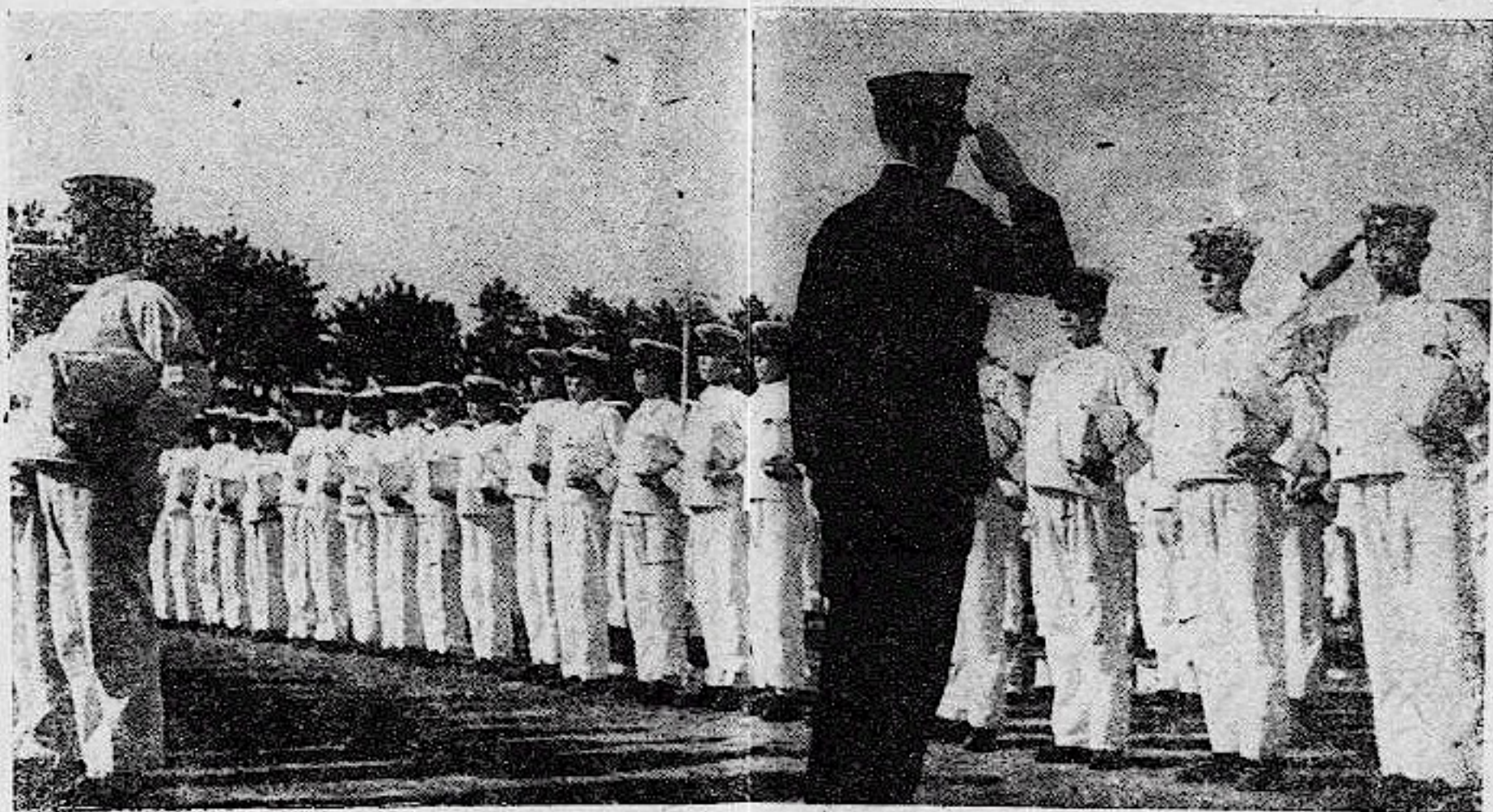
体操は十五分で完了する。そこで、整列體形は解かれ、清掃當番（正しくは掃除關係員、普通には室直といふ）が各室の清拭に當る以外は三々伍々、八方園神社に參拜して皇恩の

厚きを奉謝し、遙かに家郷の老親に向かつて挨拶をしたり、その他、自習、散歩等割合に、ゆるやかに、一日の準備作業が許される。

やがて、食事の號音とともに總員は大食堂に集合、先づ聖諭五箇條を默誦し、これまた本校獨特のパンと味噌汁の朝食に舌鼓をうつ。海軍では、食事中はすべて談話が許される。多忙複雑な日課を繰返す彼等には、食事中こそ、最も恵まれた心にとりのある時なのである。

教室へ發進

八時五分前、全生徒は、生徒館前に分隊毎に整列する。そして、分隊監事により訓示・質問・容儀點檢等が行はれる。終れば、分隊單位の整列は解かれて、各學年の教班別に切りかへられ、八時、行進喇叭とともに隊伍齊々、歩武堂々と教室へ向かふ。授業は、酷暑日課以外は、午前八時から午後二時まで行はれる。



定時酷校

それは、軍
事學・普通學

にわたり、海軍士官の
能力教養として必要使
くべからざる諸課目が
嚴肅に課せられる。

教科書はすべて本校
の教官が編纂し、本校
内で印刷したもので、

幾多の経験により、複
雑多岐の學科内容を、
如何に能率的に教授す
るかといふ點に、十分

な苦心が拂はれてゐ
る。そして、教務はただ
單に教官の講義を聞く
といふだけではなく、
生徒自身も自啓自發、
所謂「敢爲」の心構へ
を以てし、兩者相より
成果の確實と増大とを
期するのである。

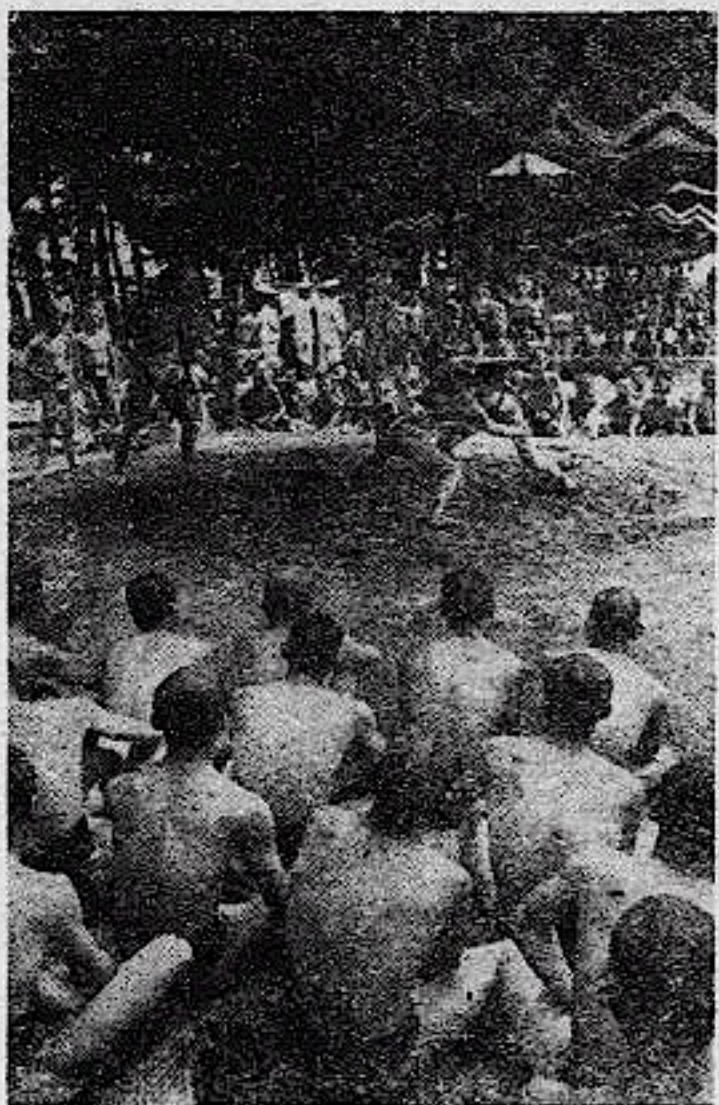
授業が訓育的に嚴正
に進められることはい
ふまでもない。

訓練と自選時

二時半から一時間は各種の訓練が課せられる。短艇・武道・相撲・體技等が部を單位として、訓育實施豫定表により、毎日順ぐりに行はれるのである。そして熱烈・敢闘の江田島魂はこれらの訓練を通じて極めて旺盛に發揚される。

姑く武道場なる「道場十訓」を掲出して本校の訓練精神を知る縁としよう。曰く、

- 一、武技を練るとともに氣力體力の鍛錬に努むべし
- 二、禮節を重んじ規律を守るべし
- 三、試合中は眞劍對抗と心得寸時も油斷あるべからず
- 四、常に氣力を充實し敵の勝を奪ふの氣勢あるべし
- 五、常に攻撃をとり守勢に陥るべからず
- 六、機を見ること敏にして常に機先を制すべし
- 七、攻撃は勇猛果敢にして躊躇逡巡すべからず
- 八、敵の攻撃に動せざる膽力と屈せざる忍耐沈毅の氣象を養ふべし



九、態度姿勢に注意し高潔なる氣品の養成に努むべし

十、武技の練達及び心的鍛錬は實習の裡自得により達成せらる専念工夫を要す

各訓練にはすべて武官教官の主任指導

一日の場

官があり、その他多数の教官・教員によ

をおとす

り懇切に指導される。

武道や短銃の訓練については本書の至るところで觸れる場合が多いから、今は特に相撲訓練の一つをとり出して訓練一般の模様を想見することにしよう。

兵學校に土俵が設けられ相撲訓練がはじめられたのは實に明治七年のことである。爾來相撲道の果敢な闘志は帝國海軍の旺盛な攻撃精神と相通するところが多いために年々隆盛におもむき今日に至つてゐる。

氣候の關係や他の諸訓練との配分上、四月か

ら六月にかけて行はれる。

授業を了へて生徒館へ歸るや、生徒はたがひに助けあつてす早く締込禪まはしを締めて飛び出していく。

土俵の前に整列し終ると、教官指導の下に準備運動が行はれる。

即ち、入念に力足を踏んで身も心も落つけ、腹の底からの一、二、一、二、の掛聲とともに鐵砲——即ち猛烈な押合を行ふ。

青芝燃ゆる大練兵場の一隅、二十數個の土俵を前にして鍛鍊向上——ただ一筋の心に生きる若人がもりあがる意氣と肉體をもつて大地を踏みしめる姿はまことに壯觀そのものである。

準備運動が終るや、土俵上に間隙をつくり一斉に敬禮、盛り砂をならし「ぶつつかり稽古」が始められる。教官や上級生徒が率先して範を示し猛烈果敢に演練する。

若し敗鬨の氣魄に缺けるやうなものがあれば幾回でも修正される。

三人扱・五人扱・分隊對抗勝負なども時々行はれる。



そして、訓練が終れば一同敬禮、土俵を清め、終末運動として「海軍體操」を行ふ。六月下旬になると待望の相撲競技が行はれる。これ亦勝拔勝負である。

整然たる秩序の下、火花を散らす勇壯な激戦は眞に息づまるばかり。世間によく見る「待った」や「物言ひ」の如きは絶對にない。しかもこの肉弾相搏つ激しい訓練に於て多少のかすり傷などは當然のこととして、骨折とか捻挫とかいふ大きな怪我のないのはいかにばかり緊張して演練せられるかを立證して餘りあるものであらう。

續いて自選時となるが、これは復習・豫習・讀書・書翰・體技等、各々その好むところに従つて行ふのであつて、齊一なる教育の中にも、個性の長所を十分に伸ばさしめんとする本校の親心である。

五時四十五分の夕食前後は入浴・洗濯・身の廻り整頓等割合に自由な時間として用ひられる。

自 習

六時半から九時までには各分隊の自習室で自學が行はれる。正しい姿勢、沈黙無言、極めて靜肅な空氣の中に自習は續けられる。

自習の中休十分間には多くは練兵場へ出て號令演習を行ふ。數千の若人が腹の底からしほり出す聲は、獅子吼といはんか、萬雷一震といふか、容易に形容し難い一大咆哮である。かかる暫くの時を惜しんでまで、他日三軍を叱咤する號令の音聲語氣の修練が行はれるのである。

號令演習は早曉の海軍體操の前にも行はれる。休息と演練とを兼ねたこれまた本校独自の無駄のない一場面である。

自習が終れば、各自瞑目、兩手を膝に、特に端正な姿態をとり冥想五分、分隊員中の一員が軍人に賜はりし勅諭を奉誦、以て聖旨を肝に銘し、更に、五省を唱へてその一日を反

省する。五省とは。曰く。

五省

- 「一、至誠に悖るなかりしか」
 - 「一、言行に恥づるなかりしか」
 - 「一、氣力に缺くるなかりしか」
 - 「一、努力に慥なかりしか」
 - 「一、不精にわたるなかりしか」
- 所謂坐禪の警策にもたとふべきか、そのいれもが、各人の心底を彫り込む迫力を持つてゐる。

就 寝

自習が終つて就寝までの三十分は、生徒にと

り一日の中で最もゆとりのある一時である。

白い寝衣に着更へた生徒は、上級生徒を中心に、自ら一團となり、講々たる雰圍氣の中に今日の一日を語り明日への希望を談ずる。

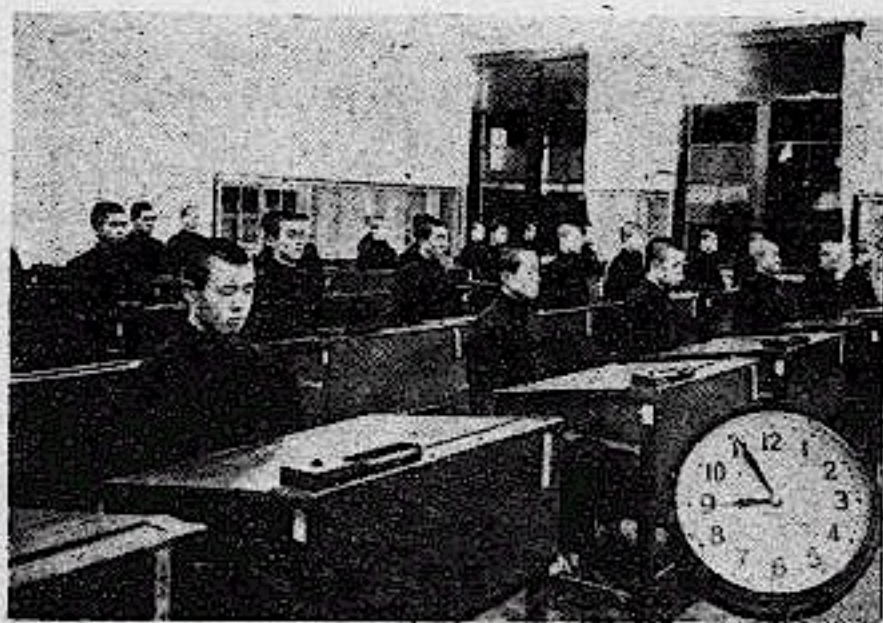
まことに一日を最も有意義に過し得た人々にのみ恵まれた羨望すべき朗景である。

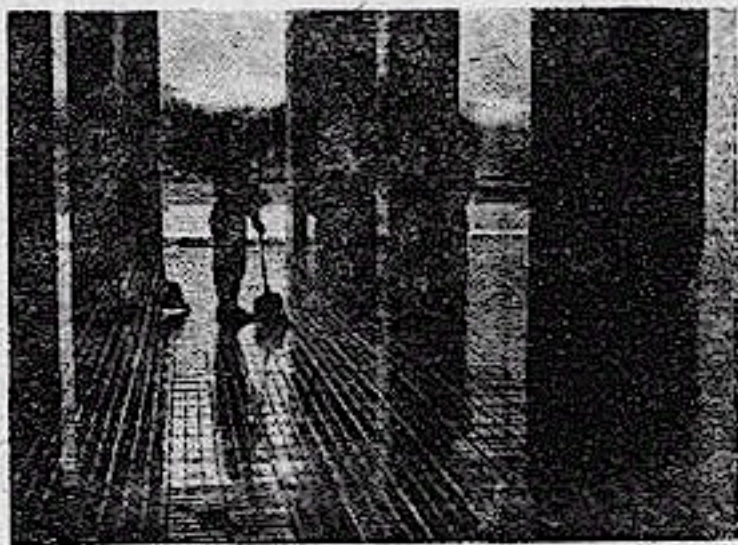
そして九時半、ゆるやかな就寝喇叭の餘韻ただよふ中に入床する。

やがて當直監事は週番生徒（最上級生徒中より数名を輪番に任命する）を引具して各室の状況を巡視して、保安衛生等に缺くるなさを確めるのであるが、これは巡檢といはれてゐる。

「五分前」と整頓手廻し

上來敍べ來つたところにより、生徒館生活が如何に嚴肅に正確に運行されてゐるか自明であるが、特に附け加へたいのは「五分前」といふ帝國海軍獨特の慣用語とその觀念に





洗濯 就いてである。

萬事、「五分前」。どれ程多忙な行事が連続しようともあらゆる動作は、定時の五分前には準備完了すべしとの謂ひである。

本校の持つ合理性中の最も鮮やかなるものの一つといふことが出来るであらう。

孫子に所謂「逸を以て勞を待つ」常に綽々として餘裕あるわが海軍の戦へば必ず勝つとの心構へは平生のかかる訓練の中にも窺ふことが出来るのである。

また清潔整頓といふことも生徒館生活に於ける大きな特色といはねばならぬ。

秩序ある團體生活に於ては、風紀の點から見ても、衛生の邊より考へても、その必要なことはいふまでもない。

特に、一定の狹隘な艦内生活に適應慣熟せしむべき生徒館生活には一入、その必要の度合も高いわけである。

随つて生徒館の内外は常に美しい秩序整頓が保たれてゐる。

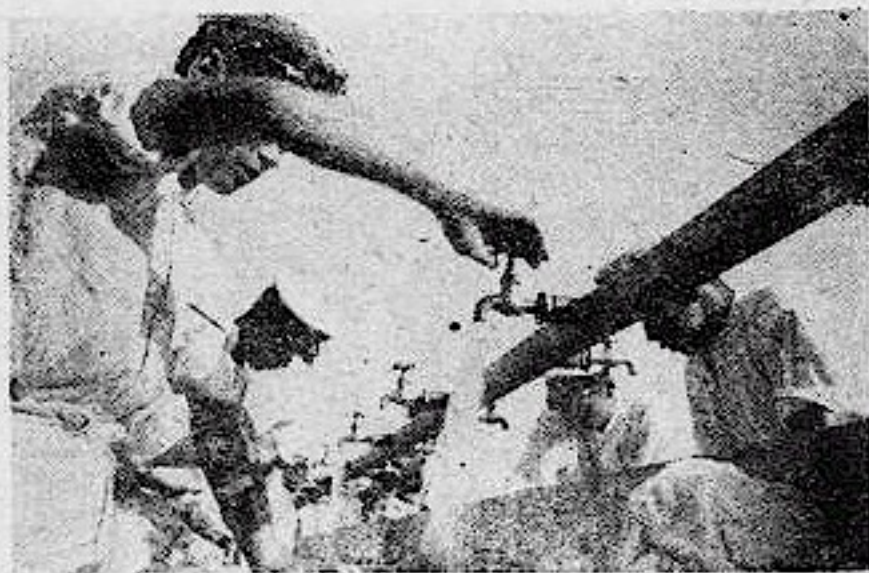
またす早い手つきで、作業服を小さな幅に畳みあげてしまふ手際や、一つの事をするにしてもその手廻し順序が自ら決つてゐて、何の滯留もなく水の流れるやうにさばかれて行く有様は、熟練の結果とはいへ見るも實に氣持がいい。

聖將東郷元帥はいはれた。

「軍人の一生は連綿不斷の戦闘なり」と。

また曰く、「神明は唯、平素の鍛錬に

洗濯



生徒に示す

佐波 眞 作曲

レ イ ヨ ツ ミ ネ ニ ス ミ シ テ フ マ ツ モ ミ ド リ ノ ー
 さ ん に り さ く の ご も ん し ゅ う あ ふ げ ば た か し ー
 ゲ ン タ リ ゴ テ ウ ノ ゴ セ イ タ ン フ ー シ テ カ シ ロ ム
 を し ふ る ひ と も ま な ぶ こ も こ こ ろ は お な じ ー

ヤ マ フ オ ヒ ミ ズ セ イ ク ヲ ウ ー ノ
 き む の お ん あ ー さ な け ぶ な に
 オ ミ ノ ミ チ ヒ ー ゴ ト ヨ ゴ ト ム
 す め ら ぎ の し ー こ の み に て と

エ タ ワ ン ニ ノ ゾ ミ ー テ ー
 め い じ つ つ う ー む ー の ー
 ネ ン ジ ツ ツ フ ー ネ ー ノ ー
 ち か ふ み を き ー た ー へ ー

タ テ ル セ イ ト ク シ
 ま ら り の た だ い ト み が ン
 イ ク サ ノ ワ ザ ざ さ る
 ち た へ ん い ざ と も に

海軍兵學校校長海軍中將草鹿任一作詞
 海軍兵學校第七十一期生徒佐波眞作曲

軍歌 生徒に示す

一、靈鷹峰に棲みしてふ

松も緑の山を負ひ

水清澄の江田灣に

臨みて立てる生徒館

三、嚴たり五條の御聖訓

俯してかしくむ臣の道

日毎夜毎に念じつつ

ふねのいくさの技を練る

二、燦たり菊の御紋章

仰げば高し君の恩

朝な夕なに銘じつつ

四、教ふる人も學ぶ子も

心は同じすめらぎの

醜の御楯と誓ふ身を

海の守りの魂磨く

鍛へきたへんいざ共に

力め、戦はずして既に勝てる者に勝利の榮冠を授く」と。

生徒館の一日は、正に旺盛なる士氣による戦闘の連続であり、かくてこそ、帝國海軍の楨幹たる士官の資質は逞しく打成されるのである。

六、海軍兵學校の特殊行事

棒 倒 し

棒倒しこそは兵學校訓練中の花といふべきであらう。

部對部の攻防必至の戦であつて、訓練部長はじめ各教官參列の下、練兵場の中央に敵味方の兩軍が相對峙する。

袖を二重にした頑丈な棒倒し服、無帽、徒足、かくて突進・敢闘・團結・防禦の各々の用意が整ふ。

各軍はまた攻撃防禦の二隊に分れ、防禦軍は高さ二間程の九柱を縦に横に二重三重、人垣をもつて取囲み、如何なる敵の猛攻と雖も撃退せんとする構へを組成する。



倒し 攻撃軍は命令一下、敵陣に殺到、萬難を排して敵の棒を倒さんとするのである。

兩軍ともに別に遊撃の一隊があり、各軍の先頭に立ちただかり、突入して来る敵が味方の陣營に入るに先立つて、これを制殺せんとする。

兩軍用意完了。

「進め！」の號音一下、攻撃軍は隊長を先頭に、一大喊聲とともに敵陣向かつてどつとなだれ込む。敵、突く、蹴る、この時ばかりは上級生徒も下級生徒もない。あらゆる攻防の術は徹底的に用ひ盡くされる。

遊撃隊に一撃を喰はされ、待ち構へた敵の人垣を乗り越えれば、二段、三段、肩の上に仁王立ちに立つ敵からは敵られる、蹴

め手で、反復猛襲、進二無二、棒にしがみつかんとして相次ぐ亂闘また亂闘。かくて、勝敗は一二分にして決する。先に棒を傾けた方が勝なのである。

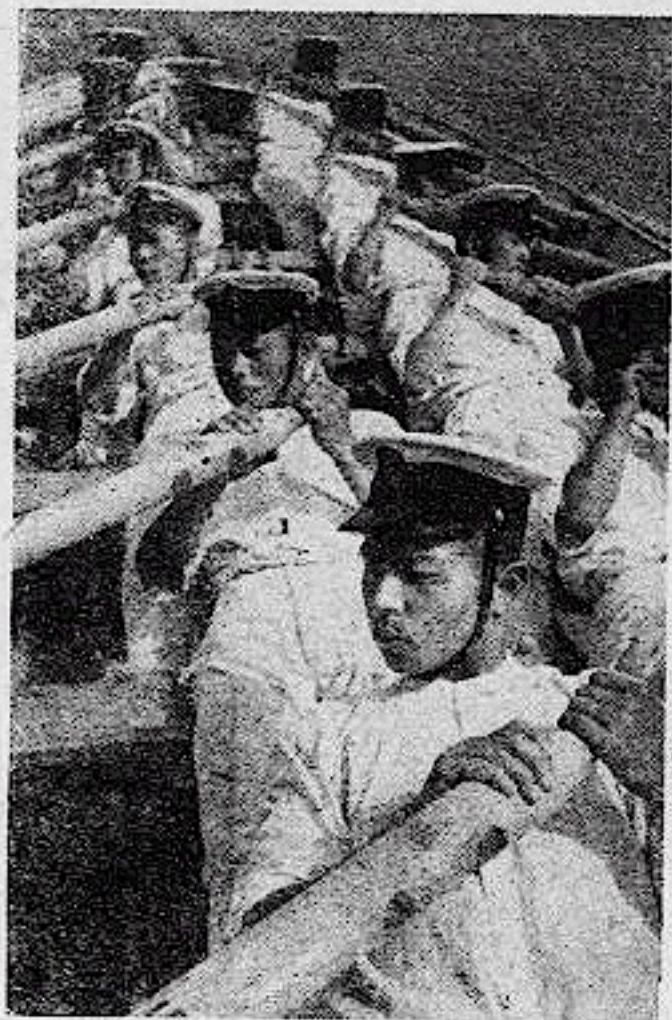
始めて見た目には野蠻的とさへ思はれる。しかし徹底した攻防戦はやはりここまで来なければ嘘である。

見敵必殺、隊長を先頭に攻撃に次ぐ攻撃を以てし、勝敗を一舉に決せんとする敢闘撃滅の必勝精神はかくの如くにして養はれていく。

闘ひ終つて互ひに裂けもぎれた棒倒し服を見て慰め合つたり、頭や顔に出来た瘤を眺めて、激しかった戦況を語り合つたりする明朗な情景もまた江田島健兒にのみ與へられた豪快な味はひであらう。無論恨みごとなどは微塵も起らない。

總短艇橈漕教練

短艇教練は、海に生きる兵學校生徒にとつてはまことにふさはしい訓練といはねばな



短艇訓練

らぬ。

各種短艇の

指揮運用を演練するとともに、海上の諸作業に適應すべき慣海的氣魄を養成することがその目的である。

そのためにはカッ

ターの横漕、指揮法

、在學年間を通じて、

槽漕、帆走をはじめ機動艇の基本操縦法並に應用操縦法に至るまで、極めて、多くの時間による演練が行はれる。

就中殆んど毎週一回行はれる總短艇操漕訓練はその華々しさに於て陸上の棒倒しと相匹

敵するものといふことが出来るであらう。

全員海岸なる各分隊固有のカッターの前に整列、そして命令一下、ある者はカッターの中に飛び込んで槽漕の用意にかかる。ある者は太い短艇索を操縦して、す早く、ダビッドからカッターを海面におろす。終るや間髪を容れず分隊の全員が繩梯子によつて、ましろの如くに乗り込む、そして満身の力を以て漕ぎ出すのである。その動作は實に秒一刻を競はねばならぬ。そして所定の位置に達すれば、廻頭して原位置に復歸する。

棒倒しと同様、極めて短少な時間ではあるが、その精神力肉體力の使用量は極めて多く、教練としての意義は頗る大きい。

それはその姿に於て海戦の勝敗が、常に一瞬にして決定せらるるに彷彿たるものがある。

野外演習

兵學校と陸戦——一寸、奇異の感を持つ人があるかも知れない。

しかし、屢次の事變戦争に於ける海軍陸戦隊の壯舉を思つたならば、この疑念は忽ちに
して氷釋するであらう。

海陸共同作戦の場合に於ける陸戦の必要は勿論、海軍それ自體のみを以てして、陸上戦
闘に終始しなければならぬ場合も極めて多い。

随つて、海上作業を本領とする兵學校に於ても、陸戦は重大な役割を持つてゐる。

そして常時陸戦訓練の課せられることはいふまでもないが、毎年卒業期が近づくと、原
村に出かけて、數日に亘る規模の大きい野外演習が行はれる。

最上級生徒は主として中隊長小隊長として、下級生徒は列兵として、陸戦の要領を會得
するのである。

原村演習。老いも若きも本校卒業生にとつては忘れ得ぬ深き思ひ出である。

筆者の手元にある二學年生徒の原村演習記の一部を紹介しよう。

原村演習記

中隊命令が下されいよいよ戦闘開始。



左に、右に肩の小銃が揺れる。吾々はただ
黙々として、松林の中を歩む。

先づ斥候と側衛が派遣される。

輕便無線電信機、自轉車、トラクター、等々、

通信や運搬の機械化、演習は全く實戰的である。

五六百米歩むと、もう敵との接觸が始る。敵

の斥候や敗殘兵が山中より發砲する。

部隊長の劍尖が左へ振れると、吸はれる如く

部隊は山陰へ消える。

やがて斥候よりの報告——無電に依る報告が

敵の行動・主力の位置を刻々と知らせる。

吾々は分遣されて野砲道より前進だ。

戦局を有利に導くために大迂回攻撃

だ。敵を處々に撃破して、流ヶ岡高地に一大殲滅戦を展開する。

作戦の妙だ。底知れぬ碧空を眺める時、疲労は何處へかふつ飛んでしまふ。ただ若さと氣力に委せて、吾々は只管に突込んで行く。小川であれ、崖であれ――

兩軍死力を盡くしての大白無戦だ。此處彼處で、審判官の指導官に、戦死を宣告されつつ立つてゐる。

本當にもうその時は無我夢中だ。走る。伏す。撃つ。突込む。すべて無意識の中の出來事である。

天地も裂けよと吼える突撃の怒號。劇突の構へ。

「待て」「演習中止」の喇叭がこの原村一帯の沃野に、一日の演習終結を告げる。太陽は大分西に傾いた。

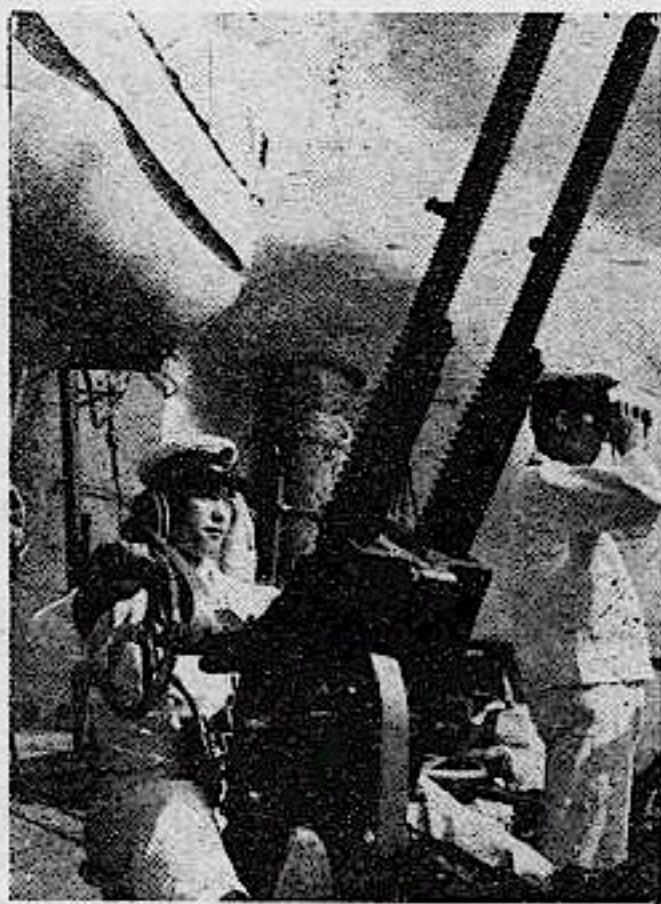
乗艦實習・航空實習

各學年とも少くも一年に一度は乗艦實習がある。教室の机上で得た知識を實物に當つて確實に體驗するためである。

學年の高低に随つて、實習内容の異なることはいふまでもない。

例へば、低學年では港内に碇泊した艦内に起居して、艦内諸部の構造・兵装・配置等を研究したり、下士官兵員の訓練作業を見學或は體驗して、軍艦生活の初歩を會得する。

高學年になると海上に出航して、下士官兵勤務の外、砲術・航海・高角機
操練



水雷等の各分隊士勤務や、副直將校、當直將校等の初級兵科將校としての勤務にも當らせられる。

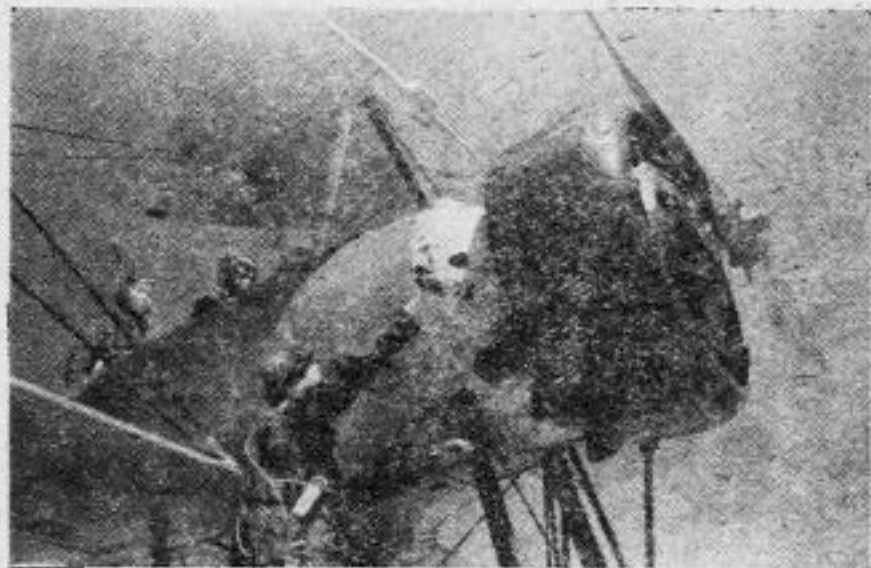
實習には、兵學校教官も乗組むのではあるが、主として、生徒の指導に任ずるのは、當該軍艦の士官である。

いはば生徒は俚諺に所謂「可愛い子には旅をさせよ」の状況下に、人と處とをかへて鍛へられるのである。

しかし、艦長始め各指導官は、すべて、同じ海軍の先輩であるから、その熱誠溢るる指導と、いささかの間隙もない親しみはまた自ら別格である。

一日の訓練が終り、入浴・夕食がすむと、なまなましいその日の體驗についての研究會が催される。

知識慾に燃え立つ海の子の次から次へと矢つき早にする質問、永い體驗から割り出す指導官の懇切な應答等、一問は一問、一答は一答毎に生徒の知識を確實にし豊富にして行くのである。



航空實習は最上級生徒に課せられる。學校を離れた航空隊に起居して行はれることは、大體、乗艦實習の場合と變りはない。

學校で航空の教務は受けてあるものの、實際的體驗を経てゐない生徒は、この實習で何よりもまづ、飛行機に對する信頼性を持つやうになる。そして數週に亙る實習の結果、操縦教育に於ては、自ら練習機の操縦桿をとつて、自由に航行し得る域にまで達するし、機上作業教育に於ては、空中戦闘・爆撃・雷撃・偵察・空中航法等に至るまで、懇切周到に體驗せしめられる。

航空實習

風速の強い大空に於ける、困難な位置や距離の測定・通信、空中よりする艦種

辨別法や、艦艇との協力

備陸

法等、海軍航空に係けら

れた任務は、まことに、獨特

にして大きなものがある。

生徒はそれ等の一般に互り

基礎的體驗を経るのであり、

随つて、本校の卒業生は、將

來の専攻は別とするも、一往

は、海營としての資質を具備

するに至るのである。



遠 漕

海に生きる海軍士官の素養として、短艇訓練が重視せられて、常住不斷にその氣力と技倆は鍛へられることは前に叙べた通りである。

かくて、一年一回、「兵學校三大行事」の一といはれる宮島遠漕こそは、日夕練磨の腕をふるふ分隊對抗の競技として永い歴史に輝いてゐる。

定時の近づくに随ひ、白い事業服に身を固めた分隊員、十二の櫂も軽やかに、静かな朝靄の中、十分の落着きを見せて、各分隊のカッターは、鏡のやうな江田島灣内の出發點に勢揃ひする。

全艇員は乗組んだ分隊監事や上級生の「あくまで頑張れ、断じて負けるな」の激勵に身をふるはし、冲天の意氣に燃えて、發進の令を待つ。

やがて、審判官の銃聲一發、目ざましい競技の火蓋は切られる。サツサツと波を切る一

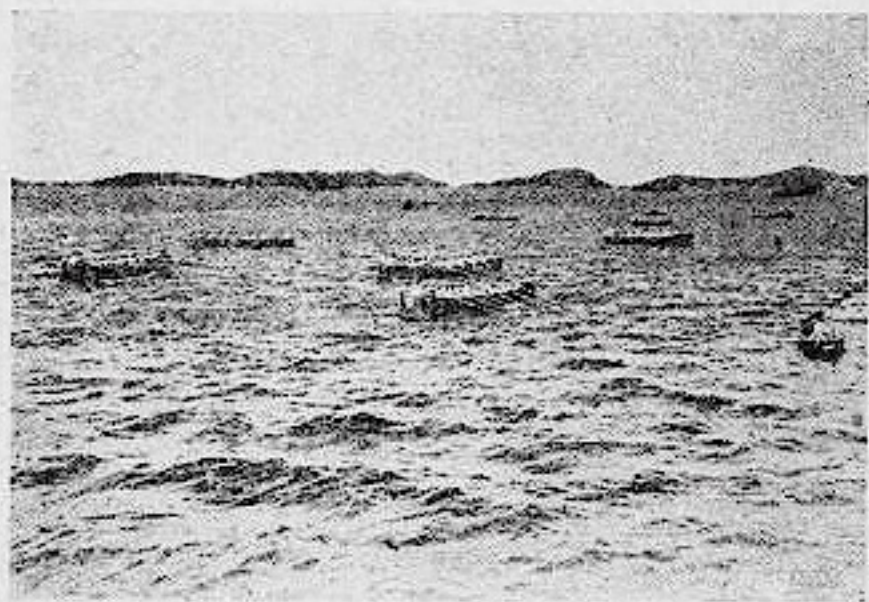
糧一糧には、各分隊の全員一致、協力必

速漕

勝の涙ぐましい精神が籠つてゐる。

蜿蜒十海里、宮島へ、宮島へ、一艇身でも早く。目ざすは、ただ勝利の榮冠のみ。

一瞬の空元氣などは、物の數ではない。充分のねばりを見せて、力漕また力漕、流るる汗は眼に沁み込み、鍛へし兩腕も漸く痲痺して行く。上級の艇長や分隊監事は、頃合を見て、柄杓で海水を汲みあげ、全艇員の頭からふりそそいで活氣を加へる。潮の調子を見ては、有利な方へ有利な方へと櫂をとる艇長の暗も、分隊必勝の一念に燃え立つて居る。「一二、一二」「よいしよ、よいしよ」と腹の底からの齊叫、火花



の散る競技とは正にこのことであらう。

自らの生徒時代を回想し、たまりかねてか、つひには、分隊監事も立ち上り、手を振り、板を踏み鳴らして激勵する。校長・監事長・教官等の乗つた、水雷艇や内火艇も、その間を奔馳して士氣を鼓舞する。

一致團結、不撓不屈、死力を盡くして戦ひ抜く宮島速漕、聖崎燈籠の決勝線まで、後幾漕、最後の一時まで頑張り通すのである。

終れば宮島に上陸、監事長の講評並に訓示が行はれて中食、更に少時の休息や遊歩が許される。

あらゆる人事を盡くした人々の胸には、勝敗は命なりの悟道も、自ら開かれるのであらう、豆だらけの掌を見せ合つて、笑ひ興じたり、宮島公園の鹿に戯れて、朗々然たる海の子の心中は、傍で見るだにすがすがしい。

かくて、艦長も一兵も、同じく運命を一艦に託し、同心協力、斃れて後やむの海軍魂は養はれる。

彌山登山競技

これも「兵學校三大行事の一」彌山登山競技は、宮島の紅葉谷公園から、石段二十一丁、彌山の頂上をきはめる駈足競技である。

毎年紅葉の色づきそめる頃に行はれる。「彌山をきはむるに非ずんば、三景の眞價を知る能はず」とは有名な山陽の述懐。山嶽に立てば、紺碧の瀬戸内に點在する大島、小島、水天彷彿の彼方には、四國の連山を望むことも出来る。まさに、天下の絶景である。

しかし、一分一秒を競ふ登山競技に於ては、風致だの、眺望だのの悠長事は、凡そ、論外である。死すとも先登せん克難の苦行である。

銃聲一發、十數名が一團となつて、五分間毎に駈け出す。息ははずみ、喉は渇く、倒れさうになると、後から上級生徒が叱咤して勵ます。隨所の要地に立つ教官からも聲援される。そして駈けて駈けて登りつめるのである。

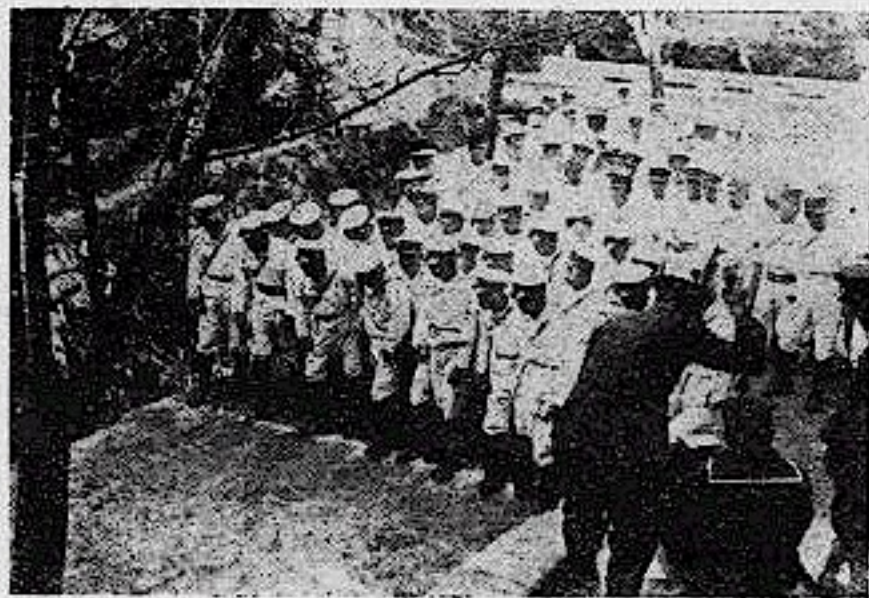
さすがの難關も所要時間三十分を越す者は極めて少い。

しかし、そのためには競技に先立つ一箇月位前から、どの分隊でも、自發的に涙ぐましいほどの準備練習をするのである。

朝の洗面がすむや、上級生徒指導の下、練兵場を一周し、校内至るところの石段を、幾回となく上下したり、膝關節の屈伸運動を反復連続したり、先輩から傳へられた、有効なあらゆる経験の粹を集めて、競技當日に備へるのである。

競技の苦しさは因よりのことであるが、その準備期に於ける苦心苦勞もま

登山競技



た、一通りではない。

彌山登山競技の度毎におもふのは、日露戦争直前に、聯合艦隊により行はれた烏帽子岳登山競走に就いてである。

本校のこの競技もかうしたところに淵源する古い傳統であるし、當時の競技に就いて考へても帝國海軍の傳統精神の躍如たるものがあるので、一往はそれにも及ばねばならぬ。

時は、正に、日露の風雲急を告げし明治三十七年一月。聯合艦隊は佐世保軍港に集合し、出師の準備を整へ、今や、出動命令を俟つのみであつた。適と二月一日、血氣漲り、士氣舉れる全艦隊は、佐世保に一大運動會を開催し、その主要競技の一として、烏帽子岳登山競技の壯舉が行はれたのである。

全員は、銳氣勃發、破竹の勢を以て、山上へ山上へと突進したのであつた。

時の競技委員長上村第二艦隊司令長官は、敵愾の魂烏帽子岳を覆ふの光景を眺め、既に戦勝の兆あるを思ひ、欣喜措く能はず、自ら白布に「先登第一」と揮灑して優勝旗とせられた。

そしてこの榮冠を獲たのは實に水雷長廣瀬武夫少佐の率ゐる、特務艦朝日の登山隊であつた。

朝日は當時第一艦隊の第一戦隊に屬し、二月一日、佐世保に入港、直ちに翌日の登山競技に参加したのである。

この優勝の裏にも指揮者達の並々ならぬ苦心が存してゐることを見逃してはならぬ。

即ち同艦は元來横須賀鎮守府所屬なるがため、兵員の大部分は烏帽子岳登攀の経験なく、道筋も不明瞭であつたため、「足馴し」「捷路探索」「應援隊配置」等を定める目的を以て入港即夜登山を試み、必勝を期して、夜半歸艦したのである。

先登第一旗

明くれば競技當日、廣瀬水雷長は同

艦登山隊の先頭に立ち、加藤寛治砲術長はその後尾を固め、他の少壯士官は是より先山腹の要地に伏兵、應援位置に就いてゐたのである。競技員はこの思ひがけなき伏兵の應援に、勇氣百倍、全員殆んど死力を盡くして奮進し、遂に一着の榮冠を獲たのであつた。

しかも、彼等の決勝點に至るや程なく、附近に山火事が起り、一時は火勢猛烈、黒焰濛濛たるものがあつたが、競技副委員長八代六郎大佐の命により直に蹶起火中に飛び込み、難なくこれを消し止め、優勝して、尙且つ緯々たる餘力あるを示し、全軍をして刮目驚嘆せしめたのである。

時に、今昔のちがひはあれ、所に烏帽子岳と彌山との差はあれ、その作戦に於て、その努力に於て、その餘力に於て、吾等はそこに服々として相通する一箇の帝國海軍の傳統精神を考へないではゐられない。

游泳術訓練

兵學校の起床から就寢に至るまでの教育日課は、春秋寒暖を問はず、まづ不變といつていい。ただ、七月一日から八月末に至る所謂酷暑日課に於ては、訓練は、生徒總員に游泳術演練のみが課せられる。

いふまでもなく

游泳術演練は決して

て娯樂でもなければ

趣味でもない。

勿論、任意、選擇

の訓練でもない。

一齊に全般に課せ

られるのである。

以て身體

を練るの 編隊游泳



である。精神を鍛へるのである。敏捷性を養ふのである。救急法を學ぶのである。慣海性を培ふのである。随つて本校の游泳は終始一貫規律齊々、舉止堂々として行はれる。各部の中で技備により等級別に分けた生徒の一群々々には、數名の指導官が付き添ひ、或は水中に於て、或は船上に於て、教示を行ひ保安に任ずる。

更に、當直監事は表棧橋上の指令臺上に立つて、全海面の監視に當る。擴声器・双眼鏡・望遠鏡・信號兵等々、保安に關するあらゆる用意は準備されてゐる。蓋し、當然ではあるが、大掛りな規模である。水も漏らさぬ用意とは正にこのことであらう。

そして、數百千の若人が水清澄の江田島灣上に浮かび出た姿は、實に明日の帝國海軍の嚴たる力を示す一大繪巻物の展開である。

また、老いも若きも教官總員の海上出勤は本校の誇るべき師弟道の顯現と見ることが出来る。來よう。

生徒の各分團は指導官の下、最上級生徒の高級者が數名、助手として指導補佐に任ずる。練兵場での總員準備運動が終るや、主任指導官の命令一下、各分團は定められた箇所で入水。特設プールや練習船上などで各種の泳法や遠泳の演練が行はれる。

個人も編隊も秩序整然として行はれる。

遠く對岸の津久茂や中村の翠巒を望んで、びちびちした筋骨の律動も鮮やかに、續々高臺より飛び込む姿を見ては、實に海國日本の夏は江田島にありの思ひを起さしむるに充分である。

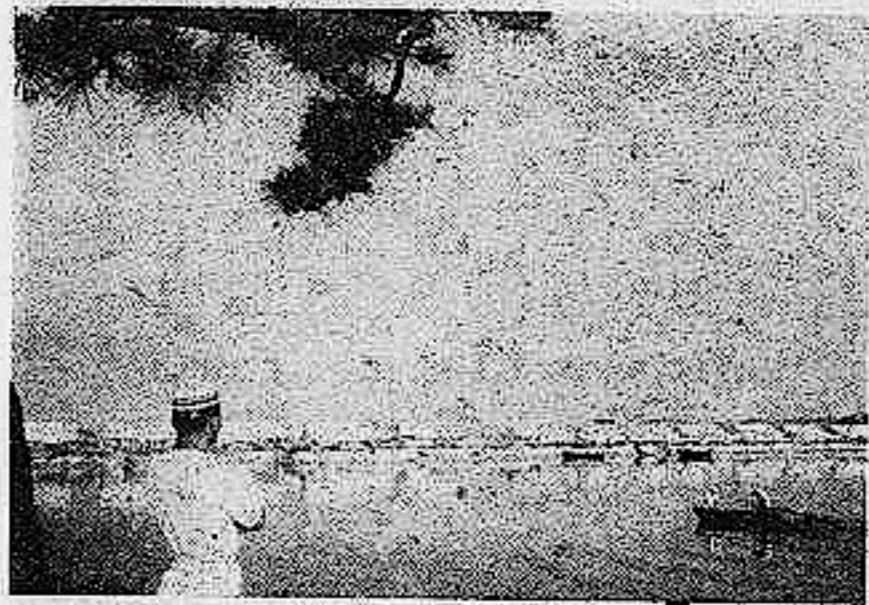
全国各地から集つた生徒の中には、勿論相當數の游泳不能者もあるわけであるが、本校では、永い傳統により彼等には赤帽を被せて他と識別し全くの初歩から指導する。

しかし、教者と被教者との熱烈な努力は目に見えて實を結んで行く。赤帽は日に日にその數を減じ、やがて海上からその姿を消すのである。

プールの端木につかまつて、バタ足の練習に専念する赤帽に、

「十米の飛込みを眺めながら練習せよ」

などと激勵する助手の一言が、如何ばかり、赤帽の向上心を激發することであらう。



幕 巻

夏期休暇を目睫に控へて數日、學校を離れた濱邊—白砂青松の間に待望の幕營が行はれる。游泳術演練が主たる目的たるはいふまでもないが、簡易素淡な生活に慣れしめ、實質剛健の氣風を養ふことなども、幕營にかけられた大きな望みである。

總員起床から就寢に至るまでの訓練や軍紀は生徒館のそれと少しも變るところはない。ただ幕營—設置成 幕營の性質上、學科の教授や温習 行はれない。その代り、炎々天を

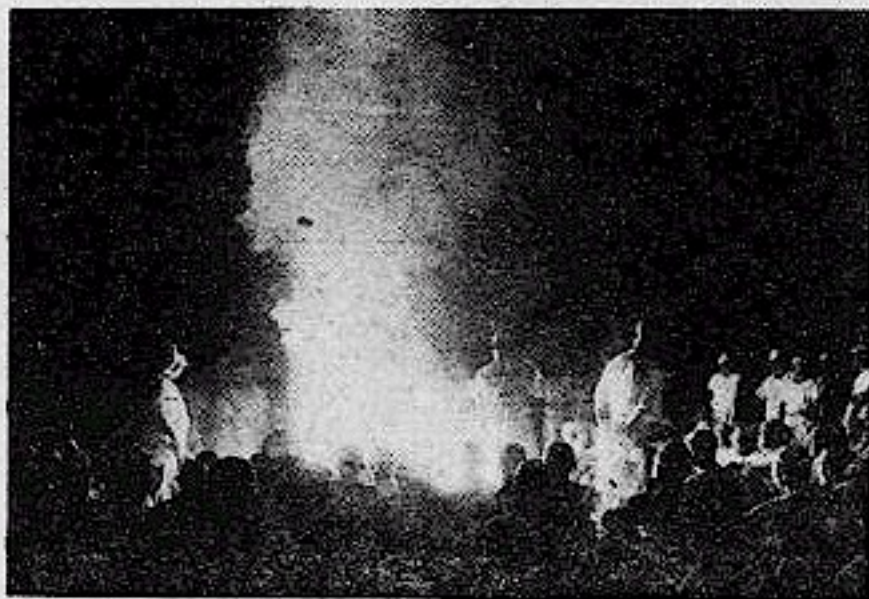
こがす豪快な篝火にすべての雑念を忘れたり、教官の實戰談に若き血を沸かしたり、軍樂隊の演奏や映寫に耳目を楽しましむる等、嚴正な反面に和やかさを持つ數日である。

終了の前夜には、概ね、娯樂演藝會まで開かれる。軍歌あり、音曲あり、自作の詞曲あり、巧拙を問はず、斷じてやるところに江田島健兒の面目躍如たるものがある。幕營は生徒生活に於ける大きな思ひ出の一つである。

游泳競技

八月末には、短距離・中距離競技が

篝火



壯ともいふべきものがある。

寸秒を争ふ競泳は、實に海國男子の眞面目を發揮して餘すところがない。競技は正に生徒の雷撃であり、體當りである。

かくて「爲せば成る」の尊い經驗が積まれて行く。

校長始め各科教官の對抗競技も行はれる。

技の巧拙ではない。老いたりといへども示さん意氣と熱である。

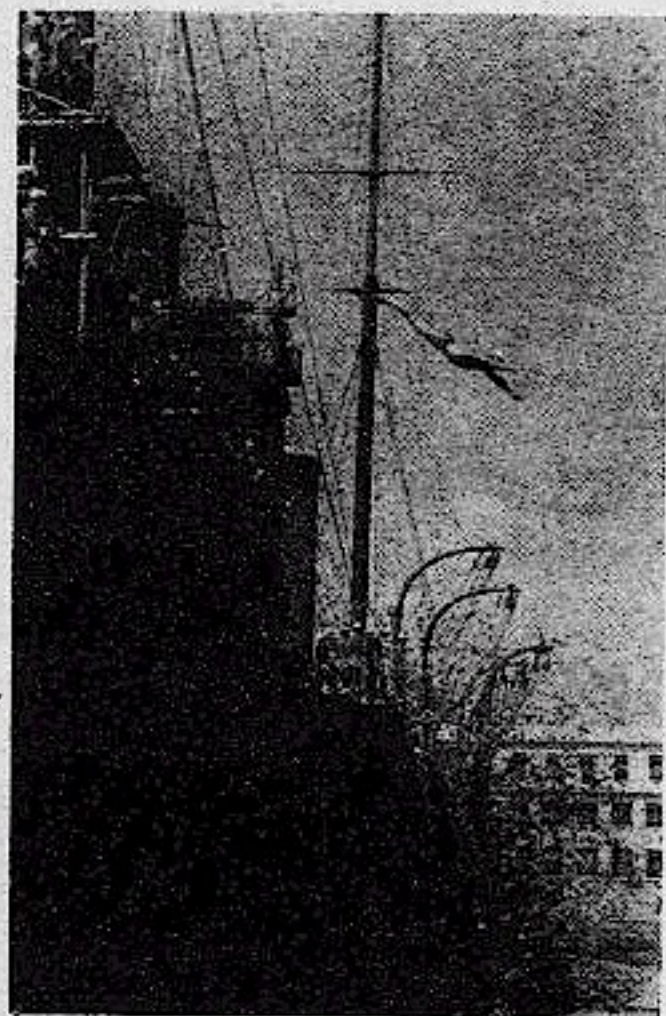
宮島遠泳

競技に前後して、遠泳が行はれる。

遠漕・彌山登山競技と並んで、兵學校三大試練の一と聞える行事である。各々その技倆に應じて距離を定められるのであるが、

その最高なるものは、宮島より本校

游泳準備運動
—海軍陸隊



十米飛込

行はれる。

凡そ、競

技は本校にあつては技術の向上を期する一種の指導法である。

昨日までの赤帽が勇躍、七米、十米の高臺から飛込む姿は爽快を通り越して凄



に至る洋上十海里の海面を泳ぎぬくのである。

太鼓をうち鳴らす教官の聲援、自ら元氣を鼓舞する「よいこりや」の齊叫、内火艇で馳驅する軍醫官の心使ひ等々の中に遠泳は火花を散らして敢行される。

二時間——三時間——四時間——、つひに十時間——中食も泳ぎながら、指揮官艇にすがりつきながらの振り飯である。

かくて不撓不屈の江田島魂は鍊成されて行く。

軍 歌

日曜・祭日等の外出日には、歸校點檢直後、軍歌の練習がある。

全生徒が練兵場に整列、圓陣を畫きつつ、軍歌帳も右手に高く、勇壯な步調に合はせつつ、各部が順送りに齊唱行進する。腹の底からの、江田島の天地も張り裂けんばかりの大合唱である。

練兵場は地響を立てる、古鷹も震はんばかりの軍歌行進——數千の若人の限り無き情熱を、思ひ切り高調しつくす爽快味は、江田島健兒にのみ許された、最も豪快な場面の一つであらう。

しかも、外出先から歸つた日の軍歌行進は、一瞬以て娑婆氣を去り、神聖な生徒館生活に戻る第一階梯として、まことにふさはしい。のみならず、士氣を鼓舞しては精神教育ともなり、手近な衛生上の見地からしても頗る意義が多い。

この一事を以てしても考へられるやうに、兵學校の教育は極めて實際的であり、間隙のないやうに進められる。

江田島健兒の歌

佐藤清吉 作曲

ハ ウ ハイ コ ス ル ウ ナ バ ラ ノ
 れ い ろ う そ び ゆ る と う か い の

オ ホ ナ ミ ク ダ ケ テ ル ト コ ロ
 / ふ よ う の み ね を あ ふ ぎ て は

ト キ ハ ソ マ ツ ノ ミ ド リ コ ネ
 し ん し う だ ん じ の ね っ け つ に

シ ヌ レ イ ノ ク ニ ア ネ ツ シ マ
 わ が じ ね さ ら に を ぞ る か な

イ ー ク シ イ ク イ ク ス ク
 あ あ け う え い の ー く に

セ ン ガ イ クウ ー び ー
 ば し ら ー ま も ら で

ア フ ゴ バ イ ヤ タ カ シ ー
 や ま じ ー ん を す て て ー

第五十期生徒 神代猛男作歌
 海軍軍楽特務少尉佐藤清吉作曲

江田島健兒の歌

(大正八年海軍兵學校創立五十周年記念)

一

澎湃寄する海原の

大濤砕け散るところ

常盤の松の翠濃き

秀麗の國秋津洲

有史悠々數千載

皇謨仰げば彌高し

二

玲瓏聳ゆる東海の

芙蓉の峰を仰ぎては

神州男子の熱血に

わが胸さらけ躍るかな

ああ光榮の國柱

護らで止まじ身を捨てて

三

古鷹山水清く

松籟の音牙ゆる時

明け放れ行く能美島の

影紫にかすむ時

進取尙武の旗擧げて

送り迎へん四つの年

短艇海に浮べては
鐵腕權も携むかな
銃劍とりて下り立てば
軍容肅々聲もなし
いざ蓋世の氣を負ひて
不拔の意氣を鍛へばや

見よ西歐に咲き誇る
文華の蔭に憂あり
太平洋を顧みよ
東亞の空に雲暗し
今にして我勉めずば
護國の任を誰か負ふ

嗚呼江田島の健男兒
機到りなば雲喚びて
天翻け行かん蛟龍の
池に潜むにも似たるかな
斃れて後に止まんとは
我真心の叫びなれ

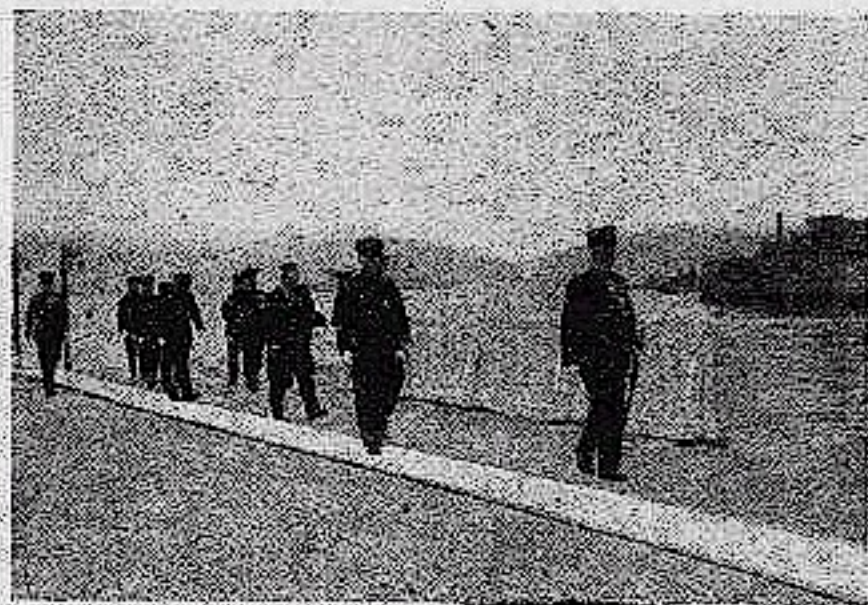
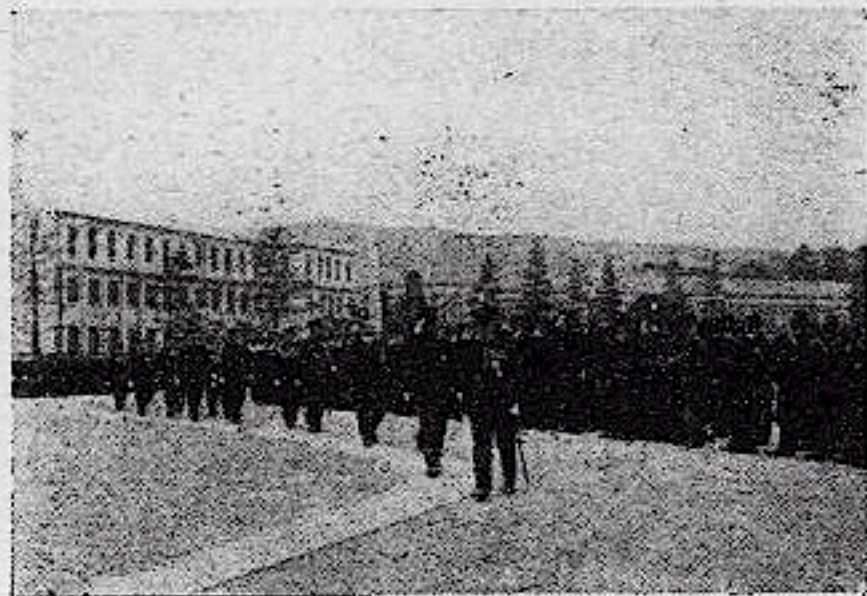
その他の演練・行事

教練・武道・體技の各項にわたり、兵學校には、競技と名づけられるものが極めて多い。すべてこれ神聖な訓練であつて、それらが多く競技の形式をとるのは、これにより精神力や技倆の加速度的進歩を期待するのである。

勿論生徒はあらゆる競技を通じて、絶對眞摯、力のあらん限りを盡くすのであり、その間些かの不純な考へもさしはさまない。

更に、正月の課業開始に先立つて行はれる、歩武堂々たる觀兵式をはじめ、菊花散郁たる秋日和の陸上運動會、寒風肌をつんざく嚴冬の兎狩、考査直後、訓育作業として行はれる小旅行、日曜を利用して行はれる馬術訓練、分隊全員の短艇巡航等々、兵學校獨特の演練や行事は多彩多様である。

そして、そのいづれもが明朗に力一杯男性的に行はれるところは、あらゆる形容を絶し



表榎橋御上陸の
御差遣宮殿下
てただ海軍兵學校的といふの外は
ない。

卒業式

研鑽修養幾星霜、その功成つて、今ぞ思ひ出
多き江田島に別れ、勇躍、海洋の護り、七洋制
覇の壯途に就く、榮ある卒業式は、長き遊より
御差遣宮殿下の台臨を仰いで舉行される。

灣内碇泊の諸艦より發する鼓をたる皇禮砲空
高く響き渡る裡に、今日はその姿も一際輝い
て、堂々入港の御召艦は靜かに江田島灣沖に投
錨。御乗艇は表榎橋に向かほせられる。

部内の顯官、全職員生徒、父兄、各種團體代
表者等の堵列奉迎する中を、塵一つ留めぬまで
に掃き清めた白砂の路を踏ませ給ふ尊い御姿。
有資格者は扈從し奉り肅々と式場大講堂に向
かふ。

定時、諸員最敬禮、軍樂隊の國歌奏樂中に、
殿下は御座に御着き遊ばされる。校長は恭しく
御前に參進、卒業證書授與の旨を言上、榮ある
證書は授與せられる。參列の父兄はあまりの莊
嚴さに、ここかしこ、感激の涕にうちふるうてあ
る。限りなき御仁惠を拜し、わが子わが弟の、
否、一門に輝く榮譽に、心も身もう
御差遣宮殿下
を奉送
ちふるふのである。

つづいて、御附武官は優等卒業生に
對し畏き邊よりの御下賜品を傳達す

候補生
出發

る。軍樂隊の奏する、壯麗な「勝利の曲」はま
ことに心からその勤勵と榮光とを祝頌するが如
く、滿場肅然、ただ深き感激あるのみ。

再び國歌奏樂裡に、殿下には御退場、今し生
徒として奉迎した卒業生徒は忽ちにして、抱茗
荷の帽章、少尉候補生の襟章、白手袋のいで立
ちも晴れやかに、全員とともに堵列して奉送、
つづいて、御乗艇、御乗艦、御出港を見送り奉
る。

嚴肅莊重な卒業式が終れば、參列の將星・職
員・父兄・候補生は一堂に會集し、祝賀の饗宴

が催される。

先輩や教官父兄の心からなる祝福と激勵を受
けて、はじめて手にする祝杯に紅潮せる候補生
の面は限りなき喜悅と、大いに爲すあらんとす
る決意に滿ち滿ちてゐる。

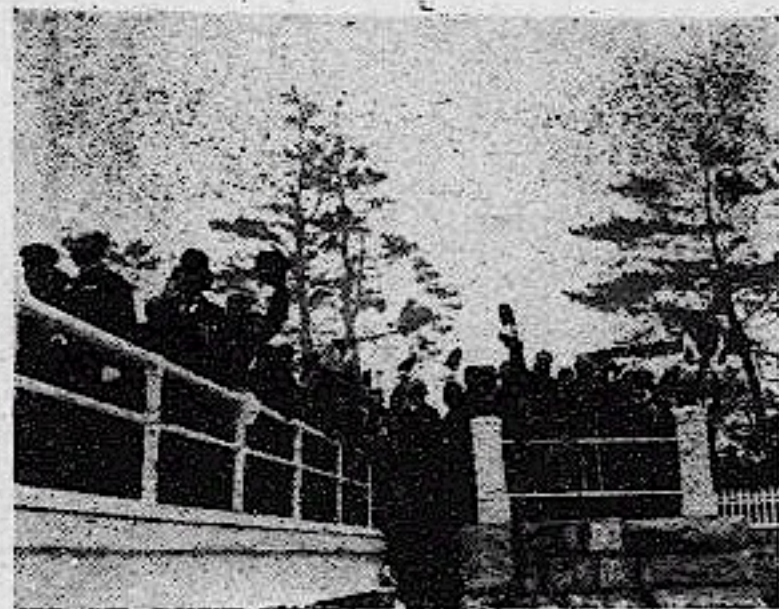
不斷に送られる軍樂隊の奏曲も、この日ほど
晴れ晴れしく吾等の心を動かすことはない。

やがて、宴終れば、候補生達は、あわただし
い短い時間を三々五々、或は練兵場の芝生に、
或は生徒館庭の櫻の下に、或は語りひ興じ、或
は記念撮影等をして名残りを惜しむ。

母校よ
さらば

今や、戦時下、練習艦隊は廢せら
れ、直ちに各艦に乗り組むこの果立ち





候補生に
榮光あれ

は、とりもなほさず出征である。送る人も送られる人も、自らなる緊張を覚えすにはあられもない。定刻となるや、八方園神社に勢揃ひをした候補生は教官や父兄さては、日頃手厚い厄介をかけた倶楽部の人々等に送られて、心からなる別れの挨拶を交はしつつ、表棧橋に向かひ、乗艇、つづいて乗艦する。

その名を連呼しつつ帽を振る人、背伸びをしハンカチを振る人。軍樂隊は「軍艦マーチ」等の演奏によりその行を壯んにし、別れを惜しむ。候補生の軍艦に乗り組み終ると見るや、見送

りの人々は水雷艇や汽艇に乗つて、萬歳を連呼しつつ灣口まで見送る。

堂々、山の如き軍艦の雄姿や砲台や砲塔をうめ盛くして豪然として居座り、首を振りつつ

する候補生、涙を拭ひつつ見送る父兄、かつては、同じく苦樂をともにせるカッターを漕漕して、送り來れる分隊員の歡送、等々。灣内は全く興奮の坩堝と化する。

かくて、艦艇の次第に速力を増すや、うち振る帽も、その人々も、點、點、點のみ。しかし人々はその姿の灣口を消え去るまで、新候補生に榮光あれと、長く長く見送るのである。

七、先覺の遺芳、江田島精神

發しては、萬葉の櫻となり、綻つては、百鍊の鐵となる、そも江田島精神の歸趨するところ。如何。これこそ吾等の心から鑽仰すべき重大事であればならぬ。しかも、この事



櫻花

たる、吾等の知見や筆致を以てしては、容易にその表現の十全を期することは出来ない。

乃ち今は先覺の遺芳に直參して、讀者と共に、その眞姿を尋ね仰ぎたいと思ふ。

しかし、純忠・壯烈・死身・報國、まことに天地日月を貫ぬく大和魂の金的江田島精神の歸趨を仰ぐべき先覺の遺芳は枚擧す

る暇もない。それらは、固より別稿に俟たなければならぬ。今はしばらく主としてその最も世人の知見に親しき方々の芳烈を、主として時代的には、兵學校江田島移轉の頃から現代に及ぶつもりである。

そして、ここに私の特に強調したいことは、これらの先覺の精神は、わが海軍兵學校に於て、現在なほ生徒の操守として、信念として脈々として生きてゐるといふ一事である。

刻苦勉勵・齋藤生徒

兵學校生徒は今でも毎日作業簿といふものにその日その日の所感を書いて、反省向上の資料としてゐる。一般にいふ日誌と考へていい。分隊監事はこれによりその人物の個性を察知したり、考へ方を指導したりするのである。随つて作業簿は本校の訓育に於て一の大きな役割を持つてゐるわけである。

今ここには明治二十六年の卒業生たる、齋藤七五郎生徒（後の中將）の作業簿の一端を



齋藤七五郎中將

擧げ、兵學校生徒の精神生活の二部面を見ることとする。

先づ第一頁には、

身體髮膚受之於父母
不敢毀傷孝之始也
立身行道揚名於後世
以顯父母孝之終也

と孝經の一節を大書し、

第二頁には、

教育勅語を謄書し奉り

第三頁には、

剛毅
力行
△△△

不避責任
深沈
△

公平無私	廉潔	誠實	賢言	迎意	怠惰	優柔	卑劣	能忘	言語不明晰
△	△		○	○	○	○	○	○	○
								(○○○)十月三日	
								○九月二十三日	
								○二十四日	
								○十月九日朝	
								○十一月三日朝	
								○五月十一日	
								○一月二十二日	
								○十二月十一日	
								○一月二十二日	
								○五月十一日	

澹泊
快活
斷燥
輕慾
私慾
倦厭
犯禁
心臆ス
緘黙

△△
○○○
○○○
○○○
○○○
○○○
○○○
○○○
○

と記してある。△や○は蓋し自戒反省の度數か程度を表すものなるべく、その刻苦工夫の努力は、まことに深刻なりといはねばならぬ。

以下、作業録中の數箇處を摘記する。

○予ハ予ノ性質如何ヲ知ラズ。怯懦乎。柔弱乎。剛直乎。便佞乎。饒舌乎。沈黙乎。抑モ果敢乎。將不斷乎。人ハ須ラク己ノ病ヲ知り、其ノ病ヲ矯正シテ、天性ノ直ニ致スベキ也。予ハ剛直ナランヲ欲シ、沈黙ナランヲ欲ス。又果敢ナルヲ願フ。今後、怯懦、柔弱、便佞、饒舌、不斷ノ舉アラバ、大書シテ戒飾スベシ。(二十四年二月一日)

○繫劍處ニテ顔ヲ洗ヒ、身體ヲ拭ヘリ。此ノ夜、他人ノ家ノ果實ヲ竊ムヲ夢ム。夢覺忽ニスベケンヤ。王陽明ノ伏波廟ニ謁スルノ夢ヲ見タルハ、平生欽慕ノ故ニアラズヤ。予未ダ威巴能ノ如キ賢人ヲ夢ミズシテ、反ツテ竊盜ヲ夢ム。是レ心盜意アルガ故タラズンバアラズ。

清麗無垢ノ心トナレロ。

今年ハ父上様五十六歳。母上様五十四歳。千代二十一。亥之助十八。喜代十六。(二十五年一月二十一日)

○距離目測ニテ百二十ヲ百四十、三百ヲ三百二十「メートル」ト言ヒ、照尺ヲ教員ニ示シテ後、之ヲ改メントセリ。卑也。陋也。且ツ軍人ハ斷ヲ尙ブ。一度斷定シタルコトヲ再變スルコトヤハアル。吾ガ父上母上兄弟朋友ハ、予ノ怯懦ニシテ一命ヲ長ク保タンヨリ正人賢士トナリテ、寧ロ短命ナルヲ願フベシ。(同年四月十五日)

齋藤生徒の江田島三年の生活——只管修養向上を期した努力は思ふも涙ぐましい限りと言はねばならぬ。

現在の生徒生活に於ても、その記載法などは人々により多少の差はあるが、一律に作業簿の記註を缺かすことなく、それぞれ各監事の厳正な補正指導を受けて、その心的境地の向上をはかりつつあるのである。

七生報國・廣瀬中佐

軍神廣瀬中佐は、東京築地なる海軍兵學校に入校し、途中江田島に移つて卒業せし、兵學校江田島移轉當初の生徒であつた。

その入校に際し、家郷に寄せた書信に曰く、

雲章拜讀 如尊意時下寒風凜烈朔風劈肌之候 御祖母公嚴大人を始め皆々様御清適御起居被遊候由何の歡か之に如かんや眞に欣喜雀躍此の事に御座候 従て頭兒儀不相變壯健勉學罷在候間乍憚御安慮可被下候 陳者不肖頭兒漸く海軍に入る事を得候處御祖母公嚴大人の御歡喜不一方候由尊翰にて領承仕候 殊更御祖母公大御歡喜被成候由 不肖頭兒に於て大滿悅の事に御座候 幼齡より御覆育の御鴻恩を蒙り未だ御膝下に於て朝夕奉侍する能はず唯身を立て名を揚げて御恩に報せんと存候處今回の儀に付御歡喜の由眞に不肖頭兒に於て



齋藤七五郎中將

擧げ、兵學校生徒の精神生活の一面を見ることとする。

先づ第一頁には、

身體髮膚受之於父母

不敢毀傷孝之始也

立身行道揚名於後世

以顯父母孝之終也

と孝經の一節を大書し、

第二頁には、

教育勅語を謹書し奉り

第三頁には、

剛毅 △

力行 △△△

不避責任

深沈 △

公平無私	△	澹泊
廉潔	△	快活
誠		斷
賢言	○○	輕燥
○		○○○○
迎意	○○	私慾
○		○○
怠惰	○	倦厭
○		○
優柔	○○○	犯禁
○○○		○○
卑劣	○○	心臆ス
○○		○○○○○
能忘	(○○○)十月三日	緘黙
○		○
言語不明晰	○九月二十三日	
	○二十四日	
	○十月九日朝	
	○十一月三日朝	
一月二十二日	十二月十一日	
	一月二十二日	
	五月十一日	

と記してある。△や○は蓋し自戒反省の度數か程度を表すものなるべく、その刻苦工夫の努力は、まことに深刻なりといはねばならぬ。

以下、作業録中の數箇處を摘記する。

○予ハ予ノ性質如何ヲ知ラズ。怯懦乎。柔弱乎。剛直乎。便佞乎。饒舌乎。沈黙乎。抑モ果敢乎。將不斷乎。人ハ須ラク己ノ病ヲ知り、其ノ病ヲ矯正シテ、天性ノ直ニ致スベキ也。予ハ剛直ナランヲ欲シ、沈黙ナランヲ欲ス。又果敢ナルヲ願フ。今後、怯懦、柔弱、便佞、饒舌、不斷ノ舉アラバ、大書シテ戒飾スベシ。(二十四年二月一日)

○繫劍處ニテ顔ヲ洗ヒ、身體ヲ拭ヘリ。此ノ夜、他人ノ家ノ果實ヲ竊ムヲ夢ム。夢豈忽ニスベケンヤ。王陽明ノ伏波廟ニ謁スルノ夢ヲ見タルハ、平生欽慕ノ故ニアラズヤ。予未ダ威巴能ノ如キ賢人ヲ夢ミズシテ、反ツテ竊盜ヲ夢ム。是レ心盜意アルガ故タラズンバアラズ。

清麗無垢ノ心トナレヨ。

今年ハ父上様五十六歳。母上様五十四歳。千代二十一。亥之助十八。喜代十六。(二十五
年一月二十一日)

○距離目測ニテ百二十ヲ百四十、三百ヲ三百二十「メートル」ト言ヒ、照尺ヲ教員ニ示シテ後、之ヲ改メントセリ。卑也。陋也。且ツ軍人ハ斷ツ尙ブ。一度斷定シタルコトヲ再變スルコトヤハアル。吾ガ父上母上兄弟朋友ハ、予ノ怯懦ニシテ一命ヲ長ク保タンヨリ正人賢士トナリテ、寧ロ短命ナルヲ願フベシ。(同年四月十五日)

齋藤生徒の江田島三年の生活——只管修養向上を期した努力は思ふも涙ぐましい限りと言はねばならぬ。

現在の生徒生活に於ても、その記載法などは人々により多少の差はあるが、一律に作業簿の記註を缺かすことなく、それぞれ各盟事の嚴正な補正指導を受けて、その心的境地の向上をはかりつつあるのである。

男子豪腸吞海鯨、
雄心盟欲擧家聲、

閉塞の偉
勳を物語る
千代丸短艇

苦學三年何所得、

漸上青雲第一程、

寄秋生多喜馬君、

君は蓋去年陸軍幼年校に入る人にして徂徠先
生の後なり

數行音信寄吾情、

欲訪當年勿頸盟、

眞交千古齊管鮑、

丹心一寸國干城、

陸軍唯願駕普佛、

期其他年成業日、

凌煙閣上繪功名、

唯心程の雄襟を寫すのみに御座候 猶申述べ候御座候へども先は貴酬までに

百拜頓首

十二月二十四日

二伸 時下不順幸ひに自愛あれ

これ、實に、明治十八年十二月二十四日の事、少壯にして既にその孝心の厚き、その志の盛んなる、まことに見るべきである。

その後、中佐は本校を卒業し、海上の勤務に、外國の駐在に、幾多の配置を経られ、その間の心事消息を示す遺墨も少くないのであるが、今は旅順港第二次閉塞に際し、永訣を令兄に告げられた一書を擧げることとする。蓋し中佐は明治三十七年三月二十七日、閉塞船副井丸の指揮官として、旅順港口に迫り、同船の燃發を行ひ、任務を全うしたのである



が、歸途、敵の哨艦艇や陸上砲臺よりする砲撃を蒙り、わづかに一片の肉塊を端舟の中に留めて、壯烈な最期を遂げられたことは、普く人の知るところである。

第一次旅順口閉塞の擧に對し先考と山縣先師とに代り武勇絶倫の賞詞を賜ふ。この賞詞は他の千人萬人の口より出づるあらゆる稱賛の辭にまして弟の最も榮とする所なり。而して友情切々上士の功に誇らざるを訓へ更に有終の美を濟さんことを望ませらる。感激の至に勝へず

今や第二次閉塞隊として福井丸に上らんとす。賜ふ所の手書は先考の眞影と共に收めて懷に在り。弟は天佑を確信し再びその成功を期すると共に武士として決して家名を汚すことなきを自信す。

七生報國 一死心堅 再期成功 含笑上船

愈々御武運の長久ならんことを祈る 再拜

明治三十七年三月十九日

頭弟 武夫

兄上様

第一次閉塞に際し八代兄その寫眞を贈つて、形影相伴ふの意を寓せらる。今回も同じく收めてポケットにあり

勤王大義太分明 報國丹心期七生 傳家一脈遺風在 盟舉名聲弟與兄

寄家兄言志

幾回いふも志は同じ。弟は七生人間滅國賊の楠木兄弟の精神を以て我が精神と心得居候。

以て、中佐の深く胸底に信念とせるところを仰ぐべきである。

また、中佐の部下を思ふの情厚きは、杉野兵曹長との關係に於て世の熟知するところであるが、更に中佐は第二回閉塞決行に先立ち、同志に所志を語り、

多年露國に留學し、露國は實に第二の故郷である。情誼に於て思ふ所がなければならぬ。

されば閉塞の任務ををへ、幸にして生命を全うするを得ば、許可を得て小舟に乗じ、單身旅順に入り、「アレキシーフ」太守に會し、面り降伏を勸告したい。

といつたといふ逸話の如きまた、その情に厚き武人の優懐と、その志の雄大なるを示すものであらう。

連英、報國の壯志は何ぞ廣瀬中佐のみに止らん、閉塞隊参加の將兵は、面々比々、決志盡忠の一念に燃えたのであり、その心事歴々、山なす遺墨に接しては、ただその純忠の大義を瞻仰して感涙の下るあるのみ。

從容自若・湯淺少佐

同じく閉塞隊員湯淺少佐の永訣を令兄に告ぐる書に曰く、

前略・今般愈々聯合艦隊に於て大活動被致候に付ては小生も決死的事業に撰拔せられ武士の面目之に過ぎず愉快千萬に御座候。唯今より天佑を確信し從容笑を含んで死地に乘入申候。生死成敗等は新聞紙上にて御承知被下度

先は出發に臨み御暇乞迄如此に御座候

拜具

相模丸にて

兄上様

小生戦死後の事は別に相認め置候間何れ御入手相成る事と存候

また、閉塞決行の前々日、一書を家郷に送りしにいふ、

古人曰ヘルアリ從容義ニ就クハ難シト
今ヤ二十有餘ノ勇士ト此難事ヲ決行ス
武士ノ面目之ニ過ギズ願ミレバ最早人
事ニ於テ缺クル處ナシ此上ハ天佑ヲ確
信シ笑ヲ含ンデ死地ニ投ズ愉快極リ

ナシ

湯淺竹次郎少佐

三十七年五月一日



沈着周到・佐久間艇長

「惟フニ、武人ノ一生ハ連綿不斷ノ戦争ニシテ、時ノ平戦ニヨリ其ノ責務ニ輕重アルノ理ナシ。事有レバ武力ヲ發揮シ、事無クレバ之ヲ修養シ、終始一貫其ノ本分ヲ盡サンノミ。」とは實に聖將東郷元帥の聯合艦隊解散訓示の一節である。世界に冠絶せる帝國海軍の今日ある、決して、一旦一夕の故にあらず、全軍一致、聖將不磨の至旨を標的として、猛訓練に次ぐ猛訓練を以てして、今日の偉且つ大を爲すに至りしに外ならないのである。

海軍兵學校教育參考館に奉掲せる殉職公死者の名牌が戦死者のそれよりも多い一事は以て帝國海軍平生の苦闘精進を語るに、百萬の言葉を以てするよりも、明白なるものたるを信ずる。

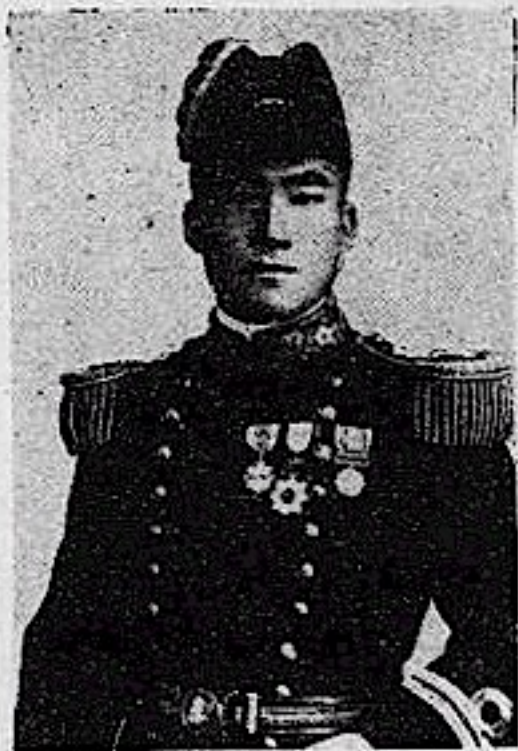
江田島に養ひし精神は決して戦に於てのみ表れるものではない。行住坐臥、連綿不斷に儼存するのである。

明治四十三年四月十五日、吳港外新湊沖に於て訓練中殉職せられし第六潜水艇長佐久間大尉の敢爲・豪膽・沈着・懇情の偉烈の如き、まことに營に海軍軍人のみに止らず、全國民の仰いで百世の鑑となすべきところである。

大尉は實に本校の第二十九期卒業生徒であつた。蓋し、當時の潜水艇は水上航行に際しては内燃機械により、潜航の場合には、空氣を必要としない二次電池により進退したのであり、隨つて水中に於ては速力も航続時間も頗る貧弱なものであつたのである。

そこで、大尉の着目研究せられたのは、ガソリン機械により航行する、所謂ガソリン潜航法であつて、速力・航続時間等の點に於ては、極めて有利であるが、萬一通風筒より海水の浸入するが如きことあらば、到底沈没を免れぬといふ極めて危険な方法であつたのである。

細心熟慮の士に非ずんば敢へてし得ざるところ、大尉は實に幾多の困難と危険とを征服しつつ、これが完成を期して精進し、つひにその職に殉せられたのである。



佐久間勲大尉

小官ノ不注意ニヨリ

陛下ノ艇ヲ沈メ部下ヲ殺ス

誠ニ申譯無シ サレド艇員一同死ニ至ルマデ皆ヨクソノ職ヲ守リ沈着ニ事ヲ處セリ 我レ等ハ國家ノ爲メ職ニ斃レシト雖モ唯々遺憾トスル所ハ天下ノ士ハ之ヲ誤リ以テ將來潜水艇ノ發展ニ打撃ヲ與フルニ至ラザルヤヲ憂フルニア

リ 希クハ諸君益々勳勵以テ此ノ誤解ナク將來潜水艇ノ發展研究ニ全力ヲ盡クサレンコトヲ サスレバ我レ等一モ遺憾トスル所ナシ

沈没ノ原因

瓦素林潜航ノ際過度深入セシ爲メ「スルイスバルブ」ヲ掃メントセシモ途中「チエン」キ

沈没後ノ狀況

一、傾斜約仰角十三度位

一、配電盤ツカリタル爲メ電燈消エ、電纜燃エ、悪瓦斯ヲ發生呼吸ニ困難ヲ感ゼリ
十四日午前十時頃

沈没ス 此ノ悪瓦

斯下ニ手働ポンプ

ニテ排水ニカム

一、沈下ト共ニ「メン

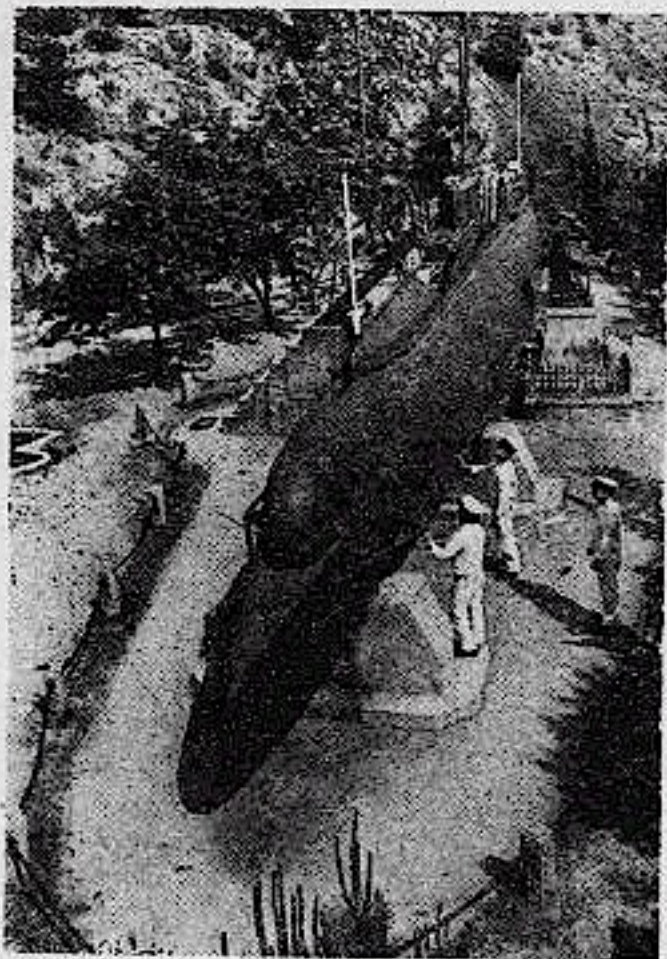
タンク」ヲ排水セ

リ 燈消エゲーヂ

見エザレドモ「メ

ンタンク」 第六號

ハ排水シ終 潜水艇



陸下ノ船ヲ沈メテ下部
 救入ルベシト申シ
 一、司令塔ノ深度計ハ五十二ヲ示シ排水ニ勉メドモ
 二、潜水艇員士卒ハ抜群中ノ抜群者ヨリ採用スルヲ
 要ス カカルトキニ困ル故 幸ニ本艇員ハ皆ヨ
 ク其ノ職ヲ盡クセリ 満足ニ思フ 我レハ常ニ
 家ヲ出ヅレバ死ヲ期ス サレバ遺言狀ハ既ニ
 「カラサキ」引出ノ中ニアリ
 (之レ但シ私事ニ關スルコト言フ必要ナシ
 田口、淺見兄ヨ之レヲ愚父ニ渡タサレヨ)

一、司令塔ノ深度計ハ五十二ヲ示シ排水ニ勉メドモ
 二、潜水艇員士卒ハ抜群中ノ抜群者ヨリ採用スルヲ
 要ス カカルトキニ困ル故 幸ニ本艇員ハ皆ヨ
 ク其ノ職ヲ盡クセリ 満足ニ思フ 我レハ常ニ
 家ヲ出ヅレバ死ヲ期ス サレバ遺言狀ハ既ニ
 「カラサキ」引出ノ中ニアリ
 (之レ但シ私事ニ關スルコト言フ必要ナシ
 田口、淺見兄ヨ之レヲ愚父ニ渡タサレヨ)

レルモノト認ム 電流ハ全ク使用スル能ハズ
 電液ハ溢ルモ少々 海水ハ入ラズ「クロリン」
 ガス發生セズ 殘氣ハ五〇〇磅位ナリ 唯々額
 ム所ハ手働ポンプアルノミ

(右十一時四十五分司令塔ノ明リニテ記ス)

溢入ノ水ニ浸サレ乗員大部衣濕フ 寒冷ヲ感ズ
 余ハ常ニ潜水艇員ハ沈着細心ノ注意ヲ要スルト
 共ニ大膽ニ行動セザレバソノ發展ヲ望ム可カラ
 ズ 細心ノ余リ畏縮セザランコトヲ戒メタリ
 世ノ人ハ此ノ失敗ヲ以テ或ハ嘲笑スルモノアラ
 シ サレド我レハ前言ノ誤リナキヲ確信ス

一、司令塔ノ深度計ハ五十二ヲ示シ排水ニ勉メドモ

此ノ邊深度ハ十磅位ナレバ正シキモノナラン

一、潜水艇員士卒ハ抜群中ノ抜群者ヨリ採用スルヲ
 要ス カカルトキニ困ル故 幸ニ本艇員ハ皆ヨ
 ク其ノ職ヲ盡クセリ 満足ニ思フ 我レハ常ニ
 家ヲ出ヅレバ死ヲ期ス サレバ遺言狀ハ既ニ
 「カラサキ」引出ノ中ニアリ
 (之レ但シ私事ニ關スルコト言フ必要ナシ
 田口、淺見兄ヨ之レヲ愚父ニ渡タサレヨ)

公 遺 言

謹ンデ

陸下ニ白ス

佐久間艇長 我部下ノ遺族ヲシテ窮スルモノ無カラシ
 遺書の一部 メ給ハラントコトヲ 我ガ念頭ニ懸ルモノ

之レアルノミ 左ノ諸君ニ宜敷(順序不順)

一、齋藤大臣 一、島村中將

一、藤井中將 一、名和少將

一、山下少將 一、成田少將

一、(氣壓高マリ鼓マクヲ破ラルル如キ感アリ)

一、小栗大佐 一、井出大佐

一、松村中佐(純一) 一、松村大佐(龍)

一、松村少佐(菊)(小生ノ兄ナリ) 一、舟越大佐

一、成田鋼太郎先生 一、生田小金次先生

十二時三十分呼吸非常ニクルシイ

瓦素林ヲブローアウトセシ積リナレドモ ガソリンニヨウタ

一、中野大佐

十二時四十分ナリ

一、死盡忠・特別攻撃隊

大東亞戦争の劈頭、帝國海軍により行はれた「ワイ真珠灣奇襲は、世界の海戦史に未だ
曾て見ざる雄渾猛烈な一大作戦であつた。

その戦果は大本營海軍部より確報接受の都度發表せられ、敵側の諸國は固より、わが國
民自體をも驚歎せしむる底の偉大さであつた。この一舉、世界が、國民が、帝國海軍の限
りなき底力を見直したといふも過言ではない。

就中吾等の胸を強く衝いたものは、十二月十八日に於ける綜合戦果の發表であつた。

時正に午後三時、

撃沈戦艦五隻、カリフォルニア型一隻、メリーランド型一隻……全國民の啾咳一つ立て
ぬ感激の中、

我方の損害、飛行機二九機、未だ歸還せざる特殊潜航艇五隻、

隊司令長官ヨリ希望通參加ヲ命ゼラレシモノナリ。

爾來部内ニ對シテモ、嚴ニ機密ヲ保持シツツ短時日ノ内ニ用兵者、技術家渾然一體トナリ、工員ニ至ル迄不眠不休晝夜兼行ニテ製造實驗ニ或ハ準備訓練ニ心血ヲ注ギタル結果、今次開戦ニ先立ツ緊急ノ際ニ完成ヲ見タルモノニシテ、攻撃ニ參加セル將士ノ靈忠無双ノ精神及技術工作關係者ノ熱誠ト共ニ帝國海軍ノ卓越セル技術ヲ廣ク世界ニ誇ルニ足ラン

而シテ實行ニ當リテハ收容ニ關シ萬全ヲ方策ヲ講ゼラレタルハ勿論ナルモ、敵主力ヲ攻撃シタル後ハ警戒一層至嚴ヲ極ムベク海底ニ横クハル沈没敵艦ノ殘骸ヲ糞ヒ狹長ナル水道ヲ通過猛烈ナル反撃ヲ脱過歸還スルコトノ困難ハ豫想ニ難カラズ、萬一ニ備へ自爆ノ準備ヲ整へタルコトハ帝國海軍軍人トシテ當然トスル處ナリ。

斯クテ 御稜威ノ下天佑神助ヲ確信セル特別攻撃隊ハ某月某日、枚ヲ叩ンテ壯途ニ就キ、眞珠灣目指シテ突進シ、沈着機敏ナル操縦ニヨリ嚴重ナル敵警戒網並ニ複雜ナル水路ヲ突破全艦像定ノ部署ニ依リ、港内ニ侵入或ハ白晝強襲或ハ夜襲ヲ決行、更上空前ノ壯舉ヲ敢行、任務ヲ完遂セル後艇ト運命ヲ共ニセリ。

就中夜襲ニ依ル「アリゾナ」型戦艦ノ轟沈ハ速ク港外ニ在リシ友軍部隊ヨリモ明瞭ニ認めラレ、十二月八日午後四時三十一分（布哇時間七日午後九時一分）即チ布哇ニ於ケル月出二分後眞珠灣内ニ大爆發起リ、火焰天ニ冲シ、灼熱セル鐵片ノ空中高く飛散、須臾ニシテ火焰消滅、之ト同時ニ敵ハ航空部隊ノ攻撃ト誤認セルモノカ熾烈ナル對空射撃ヲ開始セルヲ確認セリ。又同日午後六時十一分（布哇時間午後十時四十分）特別攻撃隊ノ一艇ヨリ襲撃成功ヲ無線放送、午後七時十四分以後放送杜絶、同時刻頃自爆若クハ撃沈セラレタルモノト認めラルモノモアリタリ。

晝間強襲ニ關シテハ敵艦隊ニ於テ僅ニ之ヲ認メタルモノモアルガ如キモ殆ドソノ何物タルカヲ判別シ得ザリシガ如ク港内混亂ノ際ナル爲戦果ノ絶大ナリシコトハ確信シアルモノ今ノ處航空部隊ニヨル戦果ト判別困難ナリ。

出發ニ際シテハ、攻撃終了セバ歸還スベキ命ヲ受ケアリシモ、遂ニ歸還スルモノナカリシハ或ハ味方航空部隊ノ爆弾、魚雷雨下シツツアル敵艦ニ肉薄（史上類例ナキ至近距

離) 強襲シ或ハ長時間海中ニ潜伏月出ヲ待テテ露頂シ、晝間攻撃ニヨル損傷少キ敵主力艦ヲ確認攻撃シタル等全隊員生死ヲ超越シテ攻撃効果發揚ニ専念シ、歸還ノ如キハ敢テ其ノ念頭ニ無カリシニ依ルモノト斷ズルノ外ナシ。

斯ノ如キ古今ニ絶スル殉忠無比ノ攻撃精神ハ實ニ帝國海軍ノ傳統ヲ遺憾ナク發揮セルモノニシテ今次大戦史勇頭ノ一大偉勳ト云フベシ。

これ等の人は、實に、大本營報道部課長平出大佐がこの發表に引續き聲涙ともに下る肅々たる言葉を以て、

「この勇士達は、日頃から上官の信任厚く、同僚後輩からは尊敬の的であつた優秀な人物ばかりであります、いづれも眼中出世なく、榮達なく、快樂なく、わが身さへなく、全く「自己」といふ觀念を捨てて、ひたすら大君と祖國に全身全靈を捧げ盡くし、弱冠二十餘歳にして雄々しくも護國の花と散つた」
若き人々のみであつた。

この勇士達を上級生徒として、直接指導を受けた生徒達は當時なほ江田島に在寮してゐたのである。

大死一番、君恩に報じ、祖國を守り抜く大精神は、まことに海軍兵學校の傳統であり、生命であるといはねばならぬ。

岩佐中佐は本校第六十五期、昭和十三年三月卒業、横山古野兩少佐は第六十七期、廣尾大尉は第六十八期で、いづれも二十歳臺の若武者のみである。

純忠至孝・日高中尉

聯合艦隊司令長官山本五十六大將は、眞珠灣攻撃直後、知人に一書を寄せて、

「今の若い者等と口幅ひろきことは申すまじく候」といはれたと聞く。

日高中尉の如きは本校第六十八期卒業の若武者である。在校中は全く溫和そのものの如き素直な生徒であつた。どう考へても、私にはそれ以上の印象はないのである。



日高第一中尉

しかるに、私はとある

機会に中尉の壯烈な最期

を聞き、その遺書に接するに及んでたとへやうのない強い衝撃を受けたのである。

人を見る明のないおろかしさ、かほどに立派な士官を教へ子に持った喜び等々、萬感交々胸中に去來してしばし

冥想沈思の外はなかつた。

中尉は生前既に父君を失ひ、母堂の手一つで育てられたのであるが、兵學校入校以來、毎月、父君の命日には母堂へ便りを書くことを怠らず、しかも、その冒頭には常に父君の法名を書いて、その冥福を祈るとともに、軍人としての決意を披瀝して、地下の父君に誓ふところがあつたといふ。

中尉は第一次ハワイ作戦の勇士であつた。そして、引續き一月二十七日の第二次ハワイ作戦に於て、行年わづかに二十四歳、太平洋上に「大君の御旗」として散つたのであるが、その出動にあたり、封筒に、

「海軍に於ける御奉公終りし時母許へお送り被下度」

と表記したものを氣魄烈々、至忠至孝の遺書であつて、短言句々の中に、忠孝一木の
大信念を吐露してある。

日高中尉遺書

一、光輝ある傳統を有する帝國海軍の楨幹海軍兵科將校として皇國の興廢を決する此の大東亞戰爭に従ひ、大元帥陛下の股肱たる光榮に感激粉骨碎身御奉公を誓ふものに御座候
二、生涯前既に實父を亡せしと雖も一族御一同の御好意と母上様の御努力により無事成育して海軍兵學校に學ぶ、幾多の海軍の先輩の薫陶を受け海軍の中堅將校として立つ事を得日本男子の譽此の上なし之偏に君恩の致す處男子の幸福深く感ず、此の機に臨んで挺身聊かたりと君恩に報いんとす

三、戦場に臨んでは人事を盡して事終りぬれば皇運の隆々發展を祈つて莞爾として死に就くものなり、決して見苦しき態は不致宜しく御想像被下度

四、余が師事せし教官恩師又御好意を蒙りし御一同に對して深甚の謝意を表す、官敷御傳へ被下度

五、一子余を育てて今日まで苦勞多かりし母上様よ、余が是に海の藻屑と消ゆとも母上の生涯決して空しきものにあらず、意を強くして國家社會の未だ母上に課せし勤あらば充分之を果し靜なる余生を送られんことを

六、是に臨んでは日頃私淑する大楠公吉田松陰廣瀬中佐に聊かなりとならばんとし決する處愈上堅し、重ねて母上様に厚く御禮申上候

再讀、三讀、ただ純忠至孝の中尉の面影を偲び、ただ、流涕滂沱たるのみ。

その生前、母堂より送られた書信は、悉く保存して一冊となし、その表紙には、中尉の自筆を以て、

たちねの母のめぐみを忘れては 學び行くとも甲斐やなからん

と認めてあると聞く。以てその平生持するところを窺ふべく、中尉の如きまことに忠孝一本の達士といはなければならぬ。

挺身敢闘・田村生徒

既に述べたやうに、烈々敢爲の江田島精神は斷じてただ單に先覺者の遺芳——歴史的存在としてとどまるものではない。

海軍兵學校の誇るべき傳統として、輝かしき生命として、否々當然の責務として、現在の數千の生徒の胸中にも脈々として潑刺たる息ぶきを持つてゐる。

吾等はその活典型を七十二期生徒たる田村生徒の信念に見る。

同生徒は昨春行はれた分隊對抗の短艇競技に於て、決然必勝の意氣に燃えて出場、力漕に次ぐ力漕の後、漸く同分隊が優位を以て、決勝點に入るや、力盡き精絶え、權を握つた



田村生徒の遺影と
ともに決勝線に入
れる第〇分隊生徒
て驚れたので
ある。

呼べど還らぬ英魂となつ
てその責任を果たしたのであ
る。何たる開魂ぞ。何たる悲
壯ぞ。

當日、競技委員長たる本校
監事長兼教頭は、次の如き講
評訓示をせられた。

昭和十七年度生徒學生近距離短艇競技講評並ニ訓示

一、短艇軍紀ハ嚴正ニシテ士氣ハ旺盛ナリ

一、競技ハ勇壯活潑在々堂々且靜肅ニシテ極メテ圓滑ニ行ハレタリ

一、「カッター」ノ操縦並ニ機漕法ハ其ノ技術進歩ノ跡顯著ナリ

二、生徒第〇〇分隊ノ成績ハ拔群ナリ

又

生徒第〇〇分隊第一組短艇員

第〇分隊第一組短艇員

第〇〇〇分隊第一組短艇員

學生第〇分隊短艇員ノ技術ハ見事ナリ

二、今次競技ニ於テ第〇〇分隊第一組短艇員故第七十二期生徒田村誠治ガ最後迄渾身ノ力

ヲ以テ力漕ニ力漕ヲ重ネテ決勝線ニ入り豫選第一着ノ號音ヲ耳ニシ莞爾トシテ櫂ヲ立テ
タルモ力盡キテ再ビ立ツ能ハザルニ至リタルハ不撓不屈斃レテ後已ムノ軍人精神ヲ如實
ニ發揮シ本校生徒ノ傳統精神ヲ具現セルモノニシテ諸子將校生徒ノ鑑鏡タリ

之ヲ要スルニ本校ノ成績ハ優良ニシテ短期間ノ練習ニ克ク此ノ進歩ヲ見タルハ平素各
指導官監事ノ懇篤ナル教育ニ依ル事勿論ナルモ短艇期間中各分隊上級生徒ノ適切ナル指

導官監事ノ懇篤ナル教育ニ依ル事勿論ナルモ短艇期間中各分隊上級生徒ノ適切ナル指

導ト諸子ガ熱誠訓練ニ從事シタル賜ニシテ本職ノ最モ欣快トスル所ナリ

抑ト近時短艇ハ多ク機動化セラレタリト雖モ尙海上作業ニ橈艇ヲ使用スル機會尠カラズ殊ニ敵ト對峙セル洋上ニ於テ敏速簡單ニ之ヲ使用スル機會極メテ多ク且ツ短艇競技ハ海軍軍人ノ眞面目ヲ發揮スルモノニシテ由來海軍諸競技中最モ重視セル傳統的競技ナリ

惟フニ己ヲ空シクシ不撓不屈整レテ後己ムノ必勝ノ信念ハ戰ニ強キ武人ノ具備スベキ最重要ナル資質ナルノミナラズ艇員打テ一丸トナリ全力ヲ集中スル和衷協同ト千變萬化ノ海上ニ於テ風濤ニ抗シ艇ヲ指揮操縦スルノ妙ハ蓋シ一艦ノ指揮運用ノ基礎ヲ爲スモノニシテ兵科將校必須ノ技能ナリ

諸子ハ思フ茲ニ致シ故田村生徒ガ本校生徒訓育ノ極致ヲ如實ニ示セル鐵石ノ信念ヲ繼承シ其ノ殉職ヲ無爲ニ終ラシムルコトナカラシムルト共ニ愈斯術ノ練磨ニ努メ心身ノ鍛鍊ト術力ノ向上ヲ圖リ將來海上雄飛ノ素地ヲ鍊成センコトヲ期スベシ
終リニ故田村生徒ノ英靈ニ對シ謹ンデ哀悼ノ意ヲ表ス

昭和十七年五月十八日

海軍兵學校監事長 大杉守一

全校員整列、弔旗は嫋々たる春風に靡き、香華しめやかな莊嚴裡に鄭重に行はれた海軍葬、碧空にこだまする弔銃の音はただに同生徒の英靈を弔ふのみではなく、側々として吾等の胸をうつたのである。

偉大なる江田島精神の雄々しき實踐者への心からなる景仰であつた。

美しくたくましく英魂が全員の胸に生きた一瞬であつた。

結 び

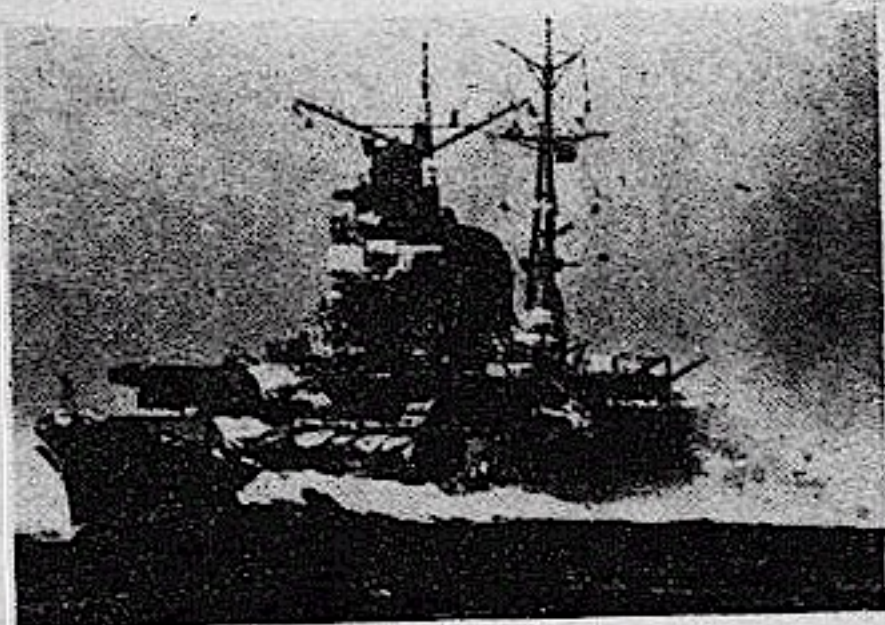
今や戦時下数千の生徒は一人の勵みを以て、江田島精神の體得に勇猛精進の修練を行じつつある。吾等は心からなる頼もしさと、限りなき喜びを覺えないではゐられない。

然らば、この純乎として純なる江田島精神は、そも那處より淵源せるものぞ。

江田島精神、そも那邊より來れる。

他なし、神州正大の氣、古今獨歩、東西無儔の大和魂が、この地に澄清して燦然たる光芒を放つに外ならないのである。

わが新設艦
艦の雄姿



崇高なる江田島精神——偉大なる大和魂。

かくて、吾等は、國民一億があらゆる雜念妄慮を一擲し、天業民族本然の魂になりきる時の皇國の盛んなる姿を仰望しては、その喜びに心身ともにうちふるふを感ぜざるを得ない。

天下の若人諸君！

皇國は實に國家の運命を賭して戦ひつつある。

史上、かかる非常の秋は未だ曾てあらざるところ。

來つて江田島に學ぶと否とを問はず、今こそ、身に「みたまわれ」の光榮を感じ、各々その職域に於て、民族精神の眞善美に生きぬき、上下一致、一億總進軍、以て臣民道の實踐に徹すべきである。

(出版會承認)
い 30133 號

江田島精神



不許複製

本書著作權ハ海軍省教育所所有

江田島精神

海行かば水漬く屍山行かば草むす屍

大君の邊にこそ死なめのだには死なじ

いざ行かむ網も機雷も乗り越えて

撃ちて眞珠の玉と砕けむ

昭和十八年五月二十五日刊行印刷
昭和十八年六月一日初刷發行 (二〇〇〇部)

●定價一圓三十錢 送料(四種)十二錢

著者 中條是龍

發行者 高木義賢
東京市小石川區藤町三丁目十九番地

印刷者 (東京) 佐藤磨
東京市小石川區藤町二十六番地

印刷所 昭文堂印刷所
東京市小石川區藤町二十六番地

發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社

日本出版會會員號一一六五一五番
東京市小石川區藤町三丁目十九番地
電話 日 五三〇〇
夜 六六〇〇
東京二九三〇 年込代表 六二〇五(長)